

---

# 真・恋姫†無双 星巴伝

桜惡夢

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

真・恋姫†無双 星巴伝

### 【ZPDF】

N3439P

### 【作者名】

桜悪夢

### 【あらすじ】

これは異なる歴史の扉

## 注意事項（11・1・17改訂）

### 注意事項

本作は【真・恋姫†無双】【萌将伝】を基盤とした、ファンファイク  
ショーンです。

ですが、都合上以下の事を変更・設定しています。

荀イクのイク『或』  
字が存在しない為、  
形の似た字を当てます。

程イクのイク『翌』  
同義語を当てます。  
もしくは立のままです。

エン州のエン『兌』  
字が存在しない為、  
形の似た字を当てます。

歴史背景の変更。

史実・原作と所々異なり  
地名は古代と現在の名が  
混在しています。  
対象の字がなかつたり、  
詳しい古代地名を作者が  
知らない為  
ます。

寸・尺・丈、斤、里など  
各計測値の概念は現在の  
基準を適用  
します。

年月週は現実に依存。  
年齢／誕生日に関連。  
時間は【刻】のみ。

一部のキャラに独自設定  
追加しています。

一部のキャラは除外及び  
チートに近いです。

一部のキャラは除外及び  
別の役だつたりします。

オリキャラが多いです。  
ちょい役も多いです。

一部、【胡蝶翼譚】との  
リンクも有ります。

基礎は魏ルートですが、

展開は独自ルートです。

『巴片』は過去話です。  
本編は全て『章』付き。  
『閑話』は外伝です。

本作中に『管理者』及び  
『外史』に関する設定は  
存在しません。  
現段階で、です。

以上の事に御注意を。

尚、注意事項は後に追加  
する事も有ります。  
御了承下さい。

建業

都城から少し離れた森。

深い緑の中を桃色の輝きが緩やかに流れた。

月の光を浴び、キラキラと星の様な輝きを纏い  
一步、また一步と進む度に揺れては輝く。

宵闇と月光が幻想的な姿を作り出す様は

“美しい”の一言。

但し

左手に下げられた酒瓶達を見なれば、だ。

「ふ～ん、ふふ～ん」

上機嫌で鼻歌を歌いながら軽やかに足を運ぶ。

普段は凛としている碧眼は無邪気な子供の様に輝き、端整な顔も緩  
んでいる。

向かっているのは森の奥の小さな泉。

実は秘密の癒しの場所。

四六時中、“王”としての振る舞いをしてくると…  
窮屈で仕方無くなる。

だから、皆の田を盗んでは時折、素の自分に戻る。

主に人気の無い場所で。

ただ、今日は趣面が違う。

昼間、賊討伐をした所為か気分が高揚して寝付けず、一いつして氣を  
紛らわせ様と夜の散歩と洒落込んだ。

「祭や冥琳達に知られたら後が面倒だけね～」

そつは言いながらも口元は楽しそうに笑む。

眉間に皺を寄せて怒鳴つて説教する一人の姿が容易に思い浮かんだ。

“ 王が勝手に夜中に城外へ脱け出すなどと  
どういうつもりですか？  
説明して頂けますか？ ”

多分、そんな台詞だらう。

経験と“勘”が、そうだと告げている。

まあ、左手の“同伴者”を知られては困る。

勝手に倉庫から持ち出したから説教も割り増しだ。

（やうね、ちゃんと証拠は隠滅しないとね）

飲み干したら泉の中へでも投げて沈めよう。

流石に眞琳も泉を浚う様な真似はしないだらうし。

我ながら名案だ。

尤も、物事は程々が一番。

調子に乗って足が着いては元も子もない。

そんな事を考えている間に視界が開ける。

月の光を反射し泉の水面が鏡の様に光つてゐる。

泉の畔に立つと水月がよりはつきりと見える。

「……綺麗ね……」

戦場に身を置いていると、静寂が妙に恋しくなる。

勿論、怖さも伴う。

油断すれば死が待つ。

ただ、それでも

危険を承知で求めてしまつるのは人の性なのか

柄にもない事を考へてゐる自分に苦笑する。

慰める様に微風が頬を撫で視線を奪つた。

「……ん?、あれは……」

眼に映つたのは

月明かりに照らし出された少しだけ生えた蓮華草。

「……姉様……」

その花を見て思い出す。

自慢だった姉の姿。  
憧れだった姉の姿。  
偉大だった姉の姿。  
誇りだった姉の姿。  
目標だった姉の姿。

不意に込み上げてくる熱い感覚に身体が震える。

ぎゅう……と両の腕で身体を抱き締めた。

「…………姉様、どうして逝ってしまったの?」

ゆっくりと顔を上げる。

黒天を淡く照らす

琥珀色の月が輝いていた。

見上げた瞳から透明な雲が溢れて頬を濡らす。

「……姉様……」

静寂にさえ融けてしまう程弱々しく夢い声。

瞼を閉じて、記憶の中へと意識を沈める。

江東の大地

何処までも続く様に広がる地平の彼方。

そして、目の前には視界を埋め尽くす

燃え盛るが如き炎縄の旗。

刻まれたるは

金色の“孫”の一文字。

孫旗の下に並んでいるのは一万人の兵士達。

「……」

頭では判つていても身体は緊張と重圧に震える。

そして 恐かつた。

「あら?、どうしたの?」

掛けられた声に右へ頭だけ動かすと銀色の髪を靡かせ此方へ歩み寄る女性。

「……姉様……」

どうとか絞り出した声。

私を見詰める深紅の双眸が優しく細められる。

「仕方の無い娘ね、ほり…  
此方にいらっしゃい…」

そう言って私の肩を左手で抱き寄せる。

自然と私の頭は姉の左胸に重なった。

トクン、トクン、トクン…

穏やかな鼓動。

私の中に強く、優しく響き染み込んでゆく。

眼を閉じ、それだけに集中すれば

乱れていた心は落ち着きを取り戻した。

ただ、私は“弱い”自分が何より情けなくて…  
悔しさに唇を噛んだ。

「…すみません、姉様…」

姉の胸に顔を寄せたまま、小さな声で謝る。

「…貴女は何を謝るの…?」

意外な返しに顔を上げる。

姉はいつもの優しい微笑みではなく鋭く厳しい表情。

私は思わず息を飲んだ。

「…え？、それは　」

「　戦に“怖れ”を抱く自分が“情けない”？　」

「　っ！」

全てを見透かした様な姉の言葉を聞き、ドクンッ！と心臓が大きく跳ねた。

「誰でも初めての戦場なら怖いものよ…

それに、喻え“歴戦の雄”なんて呼ばれても怖い人も沢山居るわ」

姉は視線を兵士達へ向け、私も自然と眼で追った。

眼下には死地へ赴く兵達。

勿論、自ら命を投げ出しに行く気は有りもしない。

私は僅かに顔を動かして、姉の表情を覗き見る。

姉はそれを待つていた様に兵達を見詰めたまま静かに口を開いた。

「戦をすれば人が死ぬ

それは敵味方を問わず…

全てが話し合いで済むなら一番理想的な形ね

だけど、現実は違う

戦う事でしか救えない命が沢山有る…

そして、その命を救う為に命を奪わなければならぬ矛盾が在る…

判る？

私達はこの矛盾を抱えて、戦い続けなければいけない

一度踏み出した者は自らの行いと結果に責任を持つて歩き続ける義務がある

自分の為に散つた命に報い自分の為に奪つた命に応え結果を示す

それが…“王”たる者よ

姉が私を見詰めた。

その瞳には“申し訳なさ”が色濃く滲んでいた。

孫家は決して名家ではなく豪族でもなかつた。

“孫子”で知られる孫武の末裔という事以外は大した強みも特徴もなかつた。

唯一、伝家の宝刀

“南海霸王”だけが孫家の誇りだつた。

だが、姉が生まれ、孫家は大きく変わる。

十三歳の時、家督を継ぐと才能を發揮し始める。

建業一帯の太守だった豪族の汚職を暴き、それを断罪すると…  
豪族の勢力を吸収…

後任の太守となり、基盤を固めていった。

更に江東の各地に存在した邪教集団や匪賊を討伐し、名声を集め  
やがて、揚州州牧と成る。

孫家を名実共に“王族”へ至らしめ  
“孫興”の誕生となる。

しかし、全てが上手く運ぶ訳ではなかつた。

元々、身体の弱かつた姉は若さ故の無理から“付け”が身体を蝕んだ。

まだ未婚で子もない。

だから、私が“王”として後を継ぐ事になつた。

そして、今日が初陣

私は姉の双眸を真っ直ぐに見詰め返す。

「……私は誓います

孫家の誇りと“我が意志”は決して折れぬとっ！」

そう答えた私を見て

姉は眼を細めて微笑んだ。

何れ位、そうしていたのか見ていた筈の月は雲に隠れ辺りは闇に包まれていた。

ガサッ…

右斜め後ろで茂みが鳴る。

静かに振り返ると視界には黒衣を纏つた者が居た。

殺氣は 無い。

暗殺ではないだろ。

私の“勘”も有るが…

気配を悟らせず私の後ろを取つた時点で何も仕掛けて来ないのだから。

ただ、相応の実力者なのは間違いないだろ。

左手に下げていた酒瓶達を静かに足元へ置く。

「…私に夜這いかしら？」

私は冗談めかして訊いた。

しかし、黒衣の者は黙つたまま動かない。

“少し位、冗談に反応してくれてもいいのにな…”と胸中で苦笑する。

「……孫文台様ですね？」

黒衣の者は此方の言葉には答えず静かに訊いてくる。

声から察するに女性  
それも、まだ幼い感じ。

序でに先の応答の反応から見て眞面目な性格。

何となく用件は判るが…

「だとしたら？」

私は口角を上げ、挑発的な態度で言い返した。

「…御手合させ願います」

そういつて、黒衣の下から右手に握られた両刃の剣を出し半身の姿勢で構える。

(へえ…隙が無いわね  
見た感じ雪蓮よりは年下…  
蓮華と同じ位かしら?)

体躯は幼く華奢だが…  
技量に関しては別格だ。  
甘く見れば此方が危ない。

黒衣の者を静かに見据えて観察し、考える。

だが、向こうから仕掛ける気配は無い。

此方の回答を待っている。

それが判れば十分。

自然と口元に笑みが浮かぶのが自分でも判る。

私は右手を回し左腰に佩く“南海霸王”の柄に掛けて同じ半身の構えを取る。

「私は孫堅、字は文台…  
貴女の願い、聞き入れた  
思う存分に、さあ…  
掛かって来なさいっ！」

私が叫ぶのと同時に彼女は地を蹴つた。

間合いは私が6歩…

彼女は8歩位だろうか。

だが、初手に關しては共に關係なかつた。

彼女は右手のみでの刺突。

私は左手の親指で鎧を弾き鞘を走らせ、刃を走らせ、刀身を閃かせる。

キンツ！

接触は一瞬。

私の右手は振り抜かれ…

彼女は勢いのまま私の脇を擦り抜ける。

互いに勢いを殺さず身体を回転させる。

ギキンツ！

私の横に離いだ一撃を剣を逆手に持つて彼女は受け、そのまま刃を引いて滑らし力を往なす。

私は右足で地を蹴り後ろへ低く飛び退く。

同時に私の鼻先を切つ先が掠めた。

一端距離を置き、お互に静かに構え直し

今度は私から仕掛けた。

柄を両手で握り直し疾駆。  
左下段から斬り上げる。

ギキンツ

彼女は剣の刃を寝せ刀身を滑らせて往なし、そのまま身体を深く沈

ませ、右足を踏み込んだ。

がら空きの胴体

だが、彼女の剣は私の元に届かない。

ゴギンッ！

彼女の剣を私の左手に持つ“鞘”が弾いた。

彼女は剣と共に弾かれるが距離を開けて体勢を整え、静かに此方を見据える。

鞘での攻撃は咄嗟の機転。

だが、理由は有った。

初手を交わした時、初めて見る筈の“私の太刀筋”を彼女は知っている様に動き対応して見せた。

歴然とした力量差が有れば可能かも知れないが…

少なくとも、彼女の力量は羨妬目に見ても私と同等。

なら、そんな芸当は不可能なのが当然で…しかし、それを可能にするならば答えは一つ。

## 予備知識

この場合は“戦闘経験”が有る事になる。

だが、私に子供と手合わせした記憶は無い。

唯一、娘の雪蓮には稽古を付けてはいるが、

“南海霸王での戦い方”は一度も見せた事が無い。

そもそも戦場ですら普段は槍を主戦にしている。

この戦い方は“南海霸王”と共に孫家の嫡子にのみ、一子相伝とされる。

私とて“王になる為”にと姉が教えてくれたのだ。

だから、私は本当の意味で“この口”を使えない。

私達同様に“この口”にも“真名”が在る。

“南海霸王”は表の名。

真の名は“主たる者”だけしか聞く事が出来ない。

そして“主”が変われば、主に合わせ“名”を変え、主一人に名一つ

故に“真名”は“主”たる者のみに許される。

(……私は聞こえない……

“『JのJ』の名も、声も、魂魄の鼓動さえも

……ドクン……

( え? )

右手を伝い“南海霸王”的鼓動が身体に響く。

( そんな…どうして )

答えを示す様に雲を割つて月の光が射した。

琥珀色の光に照し出された黒衣の中

爛々と輝く深紅の双眸。

私は眼を見開いた。

そして理解し眼を細める。

（…もう… そうなのね…）

幼い顔に面影が重なる。

（貴女は… “私に” 逢いに来てくれたのね…）

ドクン… と私の考えに対し同意する様に鼓動が鳴る。

“ 主 ” たる者を前に  
“ 南海霸王 ” は目醒めた。

まるで

この瞬間に私の手元に在ったかの様に…

（… 成る程、貴方の役目は私に教える “ 導 ” のね）

私は孫家と呪を

貴方は “ 我が子 ” を

の人から託された。

思わず溢れそうになる涙、緩みニヤけそうになる顔、それを必至に抑える。

私は“答えを示す”為…

“南海霸王”を鞘に納め、半身の姿勢で構えた。

だが、初手とは違う。

気迫も殺氣も鬪氣も全開。

ただ相手を倒す事にのみ、全てを傾け費やす。

此方の意志を感じ…

彼女も剣を鞘に納め、同じ様に半身に構える。

風も無く、木々が騒めく事さえ無い

二人だけの世界。

緊張と静寂

互いの実力は伯仲。

なら、勝つ為に必要なのは僅かな“差”…  
均衡を“崩す”事だ。

しかし

納刀した以上、次の抜刀は最高にして最後の一撃。

よつて、必然的に考え至る答えは同じ物

同時に地を蹴つて前へ。

だが、ぶつかり合つたのは刃ではなく、右の拳。  
手だけを比べれば  
正に大人と子供。

しかし、“継ぎ手”なれば純粹な力比べにはならず、彼女は肘を置  
み、私の拳を往なす様に引き込む。

私は左足を踏み込み、右肩から彼女に体当たり。

彼女はそれに全く逆らわず身体を委ね、右足を振る。

私は前屈みになつて躲し、左足を踏み止まり、右足で地面を蹴つて  
彼女の軸足を刈りに行く。

彼女は軸となる左足で地を蹴つて躲す。

私は左足で起立し、身体を捻つて回転を増しながら、右足を下段か  
ら螺旋を描き振り抜く。

彼女は放つた右足の勢いを殺さず、左足のみで着地し身体を捻つて  
右足を振る。

鈍い音を立て一人の右足が斬り結ぶ様に衝突。

骨と筋肉が軋む音が身体を伝わり頭に響く。

刀剣での鎧迫り合いならば持ち堪えただろう。

だが、殊更体術に置いての体重差は大きい。

私の右足が押し勝ち

彼女は後方へ飛ばされる。

普通なら此処で“ズレ”が生じるのだが…

彼女は何事も無かつた様に軽やかに着地を決めた。

（…流石に読んでるか…）

体重差が有る事は最初から判りきつている。  
彼女にしても折り込み済みだろう。

（それなら ）

私は再び前に出る。

僅かに遅れて彼女も前へ。

再び右の拳が激突。

だが、今度は互いに退かず撃ち合つ。

拳、足、肘、膝、腕、脛、

撃ち、受け、放ち、躰し、穿ち、払い、撲ち、捌き、押し、避け、掛け、引き、誘い、騙し、読み、欺き、作り、崩し、進み、退き、往なし、滑りし、逸らし、

淀みの無い応酬。

しかし、舞い踊るかの様に美しく流麗に…

全力でぶつかり合つ。

互いに3歩と離れず前へと出ての伯仲の乱打戦。

接近戦では有るが…

互いに“組み”はしない。だから“掴み”も無い。

ただ、互いに左手は鯉口を握つたまま一切使わない。

それは“決め手”故に。

解る者が見れば溜め息物の撃ち合いで、一人には“仕掛け”に過ぎない。

私が放った左膝蹴りに対し彼女は右の掌で受ける。

一瞬の膠着。

彼女が右足で蹴りを放ったのに合わせ、私は右足での無理矢理な跳躍。

そのまま自分の右足を縮め彼女の右足に乗せる様にし一気に足を伸ばす。

彼女は大きく後方へ飛び、私も反動で後退する。

だが、体勢は私が有利。  
彼女はまだ宙に有る。

生じた一瞬の“差”

それを見逃さず私は左足で着地すると同時に地を蹴り彼女に向かい疾駆する。

彼女は僅かに遅れて着地。直ぐ様、前へ出る。

右手を柄に添え

左親指で鎧を弾き  
鞘を、刃を走らせ

抜き放つ。

（この歳で此処までやれるなんてねえ…  
才能云々じゃあ片付かない話でしょ?  
どれだけ厳しいのよ…）

かつて、自分が教えを請い修練に励んだ懐かしい日々を思い出し苦笑する。

“南海霸王”の刃は彼女の首筋の右を捕えて止まり…

彼女の剣の刃は私の喉元を捕えて止まっていた。

「引き分けみたいね」

私がそつと互いに刃を退き、鞘に納める。

（しかしまあ…

この娘つてば、予想以上の実力だつたわね…）

私の使つた“南海霸王”は“刀”と呼ばれる独特的の形をした武器で…大陸では他の“刀”を見た事が無い。

一度、鍛冶職人に作りさせてみようと説明し…作らせてはみたが…

見た目だけに終わった。

強度が段違いに脆い。

一太刀で折れてしまった。

どうやら製法だけではなく原料にも問題が有るらしく生産は困難と判断した。

だから、この戦い方を知る者は限られており…当然、出来る者も限られ…

何より…

この戦い方は“刀”でこそ真価を發揮する。

なのに

(あんな剣でよく戦るわ)

彼女の剣  
刃長は凡そ一尺三寸。  
身幅は一寸弱。  
よく見る形の直剣。

だが“刀”は違う。

“南海霸王”

刃長は凡そ一尺。

身幅は一寸程。

刃は独特的の“反り”を持ち薄く、軽く、何より硬い。

そして、刀身の“反り”があの戦い方の要である。

普通なら刃を走らせられず抜刀すら叶わない。

だが、彼女は抜刀した。

私に後方に飛ばされた時、彼女は着地するよりも一瞬だけ早く左親指で鎧を弾き鞘から刃を解放した。

鞘を走らせる代わりだ。

そして、着地と同時に前へ出て宙に在る柄を掴む。

この時、左手は鞘を後方へ引いて“抜き”を補助。

結果 “刀”と比べても何の遜色も無い同等の抜刀速度を可能にして見せた。

勿論、簡単な事ではない。

(同じ獲物同士だったなら私の負けだったわね…)

腕の長さを加味しても…  
私の負けが濃厚だ。

けれど、充実感が有る。

もしかしたら、この時を…

“解放”を私は待っていたのかもしれない。

私は腰から“南海霸王”を外して彼女に差し出す。

「持つて行きなさい

“南海霸王”の“主”には貴女こそが相応しいわ

暫し、彼女は私を見上げ…

「ありがとうございます」

けれど、私の真意を理解し彼女は“南海霸王”を受け取ってくれた。

彼女が鞘から抜くと…

“南海霸王”の“純白”の刀身は紅い輝きを纏う。

それは幼い日に見た

“南海霸王”の真の姿。

もう記憶の中にしか居ない筈なのに…

今、この瞬間

私の目の前で“あの人”が微笑んでいた。

(…“ありがとうございます”をいつのは私の方よ…)

だけど、口には出さない。何と無く、悔しいから。

多分“あの人”が見たら、“彼方”で再会をした時、揶揄われるだらうから。

私は微笑みながら彼女へと歩み寄る。

「私の真名は水蓮よ」

「私は つ？」

私は彼女の唇に人差し指を当てて言葉を遮る。

彼女は状況が理解出来ず、眼を丸くし瞬かせる。

「「めんなさいね  
でも、名を聞いたやつたら私は貴女を手離したくなくなる」といつの  
「いつん、絶対にね」

そう言って小首を傾げると彼女は困った様に左右へと眼を動かし戸惑つ。

歳相応な仕種が愛らしく、抱き締めたくたくなる。

とこつか抱き締めた。

「え　ふえ？、あの？、その、えとつ、ええつー？」

彼女は突然の抱擁に戸惑い混乱し慌てふためく。

苛めくなるというか…

構いたくなるというか…

揶揄いたくなるというか…

強烈に母性本能と悪戯心が刺激される。

(　はつー?  
…落ち着きなさい、水蓮…  
いい?、落ち着くのよ…)

僅かな理性で、自分に言い聞かせ、どうにか堪えた。

私は小さく呼吸し、彼女を抱き締め腕を緩める。

緩めようとする。

(「…」  
でも、離したくない…)

僅かな理性は本能と欲求に圧され劣勢に立たされる。

何故か、彼女の抱き心地は最高で病み付きになりそうだった。

(「…」  
自分の娘達よりも愛らしく感じるなんて…  
面影があるから…かな?)

そう考えてみるが…

実の所、自分でも判らないから何とも言えない。

ただ、妙に惹かれる事には間違ひ無かった。

それでも思考が余計な方へ逸れた為に理性が戻る。

(……我慢、我慢よ…)

我慢するのよ、水蓮…

貴女なら出来るからつー)

必死に自分を鼓舞する。

名残惜しくは有つたが…  
このままでは埒が明かず、話も進みそうにない。

(……よし、大丈夫ね)

様々な衝動を抑え、彼女を抱く腕を解いた。

「(;)めんなさいね」

私は苦笑しながら謝る。

彼女は小さく頭を左右へと振つて“大丈夫”と示す。

私の行動に対しての緊張も有るのだろうが…

先程闘つた時と違い…  
まるで小動物的な反応。

(これって反則でしょ?)

その変わり様に私は胸中で苦笑した。

そして、意識を切り替え、私は微笑みを浮かべながら彼女を見詰める。

「貴女の名は聞かない

その代わり、一つだけ…

私に“その口”的“名”を教えて貰える?」

私はそう言い“南海霸王”へと視線を落とす。

彼女は“南海霸王”を見て静かに瞼を閉じる。

長い様な、短い様な…

不思議な静寂。

そして、ゆっくり瞼を開き深紅の瞳が私を見詰めた。

## 「」の「」の真名は

“麟雨紅鶯”

水蓮様、貴女この「」から伝言が有ります…

“自分を見失わず歩み  
この先何が有るうと  
誇りと意思を忘れず  
決して折れる事無く  
心に誓い刻め” と

彼女は“麟雨紅鶯”からと言つたが

私には判る。

それは“あの人”からと。

(ああーっ、もひっ！  
こんなの狡いわよーっ！)

完全な不意討ちの言葉。  
私は心の中で叫ぶ。

だが、何の抵抗も出来ず…  
頬を温かな雨が濡らす。

私は膝を折り彼女の小さな胸に縋り付いた。

子供の様に泣きじゃくつ…

彼女は私の頭を優しく抱え撫で続けてくれた。

翌日

私は城の東屋の椅子に腰を下ろし、台の上に置かれた白磁器の酒瓶を傾ける。

蓋に注がれた白酒。

口に運び、喉へと流す。

それは昨夜も持ち出し…

“彼女”に御酌されながら会話を肴に愉しんだ白酒と同じ銘柄の物。

だが、昨夜程美味しいとは感じない。

「…んー…失敗したわ…」

こんな事なら手離すんじゃなかつたと後悔。理由を聞いたら逃げられるかもしけないが。

「あああーつ！」

そんな事を考えながら苦笑していると大声が響く。

田を向ければ雪蓮と蓮華が此方へ歩いて来ていた。

「母様だけ狡いつ！」

「そうです って…

ちょっと、姉様っ！？

此処は注意すべき場面じゃ有りませんかっ！？」

自由奔放な雪蓮の発言を、生真面目な蓮華が窘める。

見慣れた“私の日常”だ。

「あら、私は非番よ？

それよりも雪蓮？

貴女に当てた仕事は片付けたのかしら？」

「も、勿論よ？」

動搖する雪蓮。

どうせ、冥琳に押し付けて来たのだろう。

私は呆れて溜め息を吐く。

「ほ、本当に つて…

あれ?、母様?

“南海霸王”は?」

雪蓮は目敏く私の違和感に気付いた。

蓮華も言われてから気付き訊ねる様に私を見る。

私は目を細めて微笑む。

「返して来たわ」

「 はい?」

“返して”つて…誰に?」

蓮華は目を丸くし茫然。

雪蓮は驚きながらも真相を知りたくて訊いてくる。

「 “南海霸王”の

正統後継者によ

私はそう答える。

『え…ええええええええええええええ…つ…！…つ…？』

雪蓮と蓮華が揃つて大声を上げている中

私は蒼天を仰ぐ。

何処までも澄み渡る蒼天に“未来”を馳せ

見果てぬ“夢”を想い描き私は優しく微笑む。

蒼天に掲げられた

紅く輝く、眩き純白の刃を想い浮かべて。

設定解説

表名：南海霸王

（なんかいはおう）

真名：麟雨紅鶩

（りんうりゆうじき）

全長：凡そ三尺（90cm）

刃長：凡そ一尺（60cm）

柄長：凡そ八寸（24cm）

鞘長：凡そ一尺一寸（63cm）

鍔長：凡そ一寸（3cm）

身幅：一寸程（4cm）  
(元幅4cm/先幅2cm)

反り：約一寸弱（2.5cm）

重ね：棟6mm/鎬4mm

刀拵え：

刃文の無い純白の刀身。

刃先から峰にかけて平地・鎬筋・鎬地は存在。

また峰は棟卸し。

先反り、大鋒・ふくら枯れの薙刀直造。

柄拵え：

立鼓形、柄巻は白の菱巻。

金細工の唐鶴に縁、青金に猿手、麒麟の飾目貫。猿手には炎紺帯の手貫緒と紅玉の雲金。

鞘拵え：

白地に金の蛭巻塗。

金細工の口金物、芝曳。

鞘口は呑口。

また栗形・逆角は無し。

代わりに同位置に金細工の筒金を装飾。

腰帶に差すだけの形。

設定は細かいですが…  
作中では大雑把です。

## 序章 壱 金烏玉兔

豫州沛国郡沛県

田舎という程まで素朴で、都というには華がない。

“その間”という言葉が、丁度良い感じの街。

“沛”と言えば

かつて高祖・劉邦が誕生、後に挙兵した場所。

とある伝承では“赤龍”が劉邦には宿つたとも言われ一時は聖地の様に崇められ人口が急増した事もある。

それに伴う混乱は必然。

治安の乱れ、市勢の迷走、果ては過疎化も起きた。

榮枯盛衰

街は人の欲によって荒廃、だが、人の志により復興。

今は活氣と平穏が共存する笑顔の溢れる街。

其処に構えられた屋敷。

庶人の家とは一線を画した佇まいからは家柄が滲む。

「やれやれ…

予定以上に早く着き過ぎてしもつたのう…」

その中庭で、白髪混じりの金髪の初老の男性が呟く。

息子夫婦の子  
つまり孫が誕生するのだ。

「急ぐなといふのも無理な話である」

庭木に止まる小鳥達に目を向け話し掛ける。

勿論、小鳥達の返事が有る筈も無いのだが…  
それでも気を紛らわす為に口に出してみる。

「…しかし、揃つて時期が重なるとはのう」

「…揃つて、だ。

長男と次男の夫婦に揃つて子供が出来た。

医者の見立てでは  
長男夫婦の方が先の予定と聞いていたが…  
少し遅れていた。

次男夫婦の方はまだ数日の猶予が有る。

だから、次男夫婦の時期に合わせて休みを取つて来てみたのだが…

「…読みが外れたか…」

挾める筈の長男の子も未だ母親の腹の中。

“初孫を抱ける”と期待をしていただけに残念だ。

「…まあ、儂が焦つた所で仕方無いが…」

そう呟き、空を仰いだ。

「ふむ…」

見詰める蒼天には寄り添つ様に日輪と月輪が在つた。

昼間の用など殊更珍しくもなかつたが…

何故か、妙に気になつた。

「…金鳥と玉兎、のう…」

蒼天の輝き見詰めながら、長く立派な顎鬚を撫でて、何かを憂う様に呟いた。

暫し見詰めていると

一つの間に虹が掛かり…

更に瑞雲が羽衣を纏う様に周囲を包み込み…

蒼天に対極図を描いた。

「これは

」

瑞雲も虹も吉兆・慶事だとされてはいるが…

(果たして重なる物か?)

そう、考えた時

おぎやああつ

屋敷の中から二つの産声が上がった。

奇しくも

同年、同月、同日、同刻に産声を上げた二人。

勿論、双子という訳はなく従兄妹・従姉弟の関係。

二人は時の大長秋  
姓名は曹騰、字は季興。  
真名は雅信。がしん

その孫として産まれた。

「儂も長く生きてあるが…」

この様な話は見るのも聞くのも初めてじゃのう」

「…父上でも、ですか？」

雅信の隣に立つ、短く切り揃えた爽やかな印象の有る金髪の男性が訊ねる。

姓名は曹獻、字は仲興。

真名は准也じゅんや

雅信の次男である。

沛県の県令を務めている。

「それこそ、劉邦の再来とでも言つべきか…」

雅信は眉間に皺を寄せる。

まだ産まれたばかりの子に多くを背負わせたくないとは思つ。

だが、自分の立場を考えて見れば難しい事も判る。

大長秋の孫というだけでも一人に大きな期待と重圧が申し掛かるのは容易。

加えて、あの様な現象とが合わされば…  
一体どうなる事か。

「……あの空を見た者は？」

「……短い間だつたとはいえ街の者だけでもかなり……」

雅信の問いに准也は静かに答える。

「……昼間という事も一因の一いつでは有るが……  
なら、他の時間帯だつたら良かつたか、と聞かれれば頷ける訳でも  
ない。」

「……暫し、一人の誕生は伏せておけ  
母子共に大事な時期じゃ  
良いな、准也よ？」

「はい……」

親子と言えど、立場を弁え准也は返答する。

「……それから、准也よ  
安寿はどうしておる？」

「……は？、姉上ですか？」

今は休まれているとは思いますが　まさかっ！？」

突然、准也は眼を見開く。

「言つて聞く娘ではないが手は打てよう」

「直ぐにいっしー」

雅信の言葉を聞くと准也はその場を走り去る。

「やれやれ……」

「年寄りを働かせよるわ……」

愚痴る様な台詞だが声色は穏やかで……

苦笑を浮かべていても眼は優しく……

既に黄昏を過ぎ、夜の帳が降りた黒天を見上げる。

瞬く星の海

浮かぶ月は琥珀ではなく、蒼く冷めていた。

「……世は乱れるか……」

既に兆しと言つては遅い。

火種　いや、燻る業火は確実に国を蝕んでいる。

それは群雄割拠へと向かう始まりに過ぎないだろ？。

「…どうか…どうか　」

故に雅信は天へと祈る。

産まれたばかりの孫達…

数多有るまだ幼い子供等…

これから産まれる命達…

その未来が

平穏な事を

屋敷の一室では金色の髪の女性が我が子を胸に抱いき微笑んでいた。

姓名は曹嵩、字は巨高。

真名は芹華。  
せりか

元は洛陽で文官として務め夫・准也との結婚を理由に此方へと赴任した。

旧姓は夏候で、義父・雅信の懷刀もある。

尤も、今は知的な姿からは遠く緩みきつた笑顔。

「 芹華、起きてる? 」

「 つー 」

不意に声を掛けられ表情を引き締める。

「 蓮需姉さん? 」

芹華が返事をすると同時に扉が開かれ、見知った顔が笑顔で入室してくる。

姓名は曹昊、  
れんじゅ  
字は安寿。  
真名は蓮需。

芹華の義姉になる。

「誕生日に バーバー。」

そう言つて白磁器の酒瓶を右手で掲げる。

左手に眼を落とせば  
我が子を抱いていた。

産後直ぐに動ける事もだが酒を飲もうとする事自体に呆れるしかな  
い。

が、言つて聞く人でもない事はよく知つていた。

「はあ……相変わらずですね  
……少しだけですよ?」

「ありがと」

蓮需は芹華の寝台に腰掛け持つていた御猪口を渡し、トクトク……と  
酒を注ぐ。

「名前はもう決めたの?」

「はい、名は操です」

そう言つて芹華は我が子の顔を蓮需に見せる。

「宜しくね、操ちゃん

此方が貴女の従兄弟になる<sup>コウ</sup>皓ちゃんよ 」

蓮需がそう言つて皓の顔を見せると

二人がゆつくりと眼を開き互いを確認する様に見る。

父親譲りの青玉の双眸と、両親譲りの紫水晶の双眸が

生まれて初めて眼にするは

運命に導かれ共に現の世に生を受けた半身

「ああ

「うあ

小さな手を懸命に伸ばし、互いの手を求める。

それを見た蓮需と芦華まで自然と距離を縮める。

小さな二つの掌はお互いの温もりと存在を掴み合つ。

そして、田を細めて

二人は微笑みを浮かべた。

「…………寝ちゃつたわね」

「…………寝ちゃいましたね」

蓮需と芹華はお互いの手を握ったまま安らかな寝息を立ててゐる一人を見詰めて微笑みを浮かべる。

「産まれて初めて見るのが母親以外って…  
どういう事なのかしら?」

蓮需は唇を尖らせ拗ねた様に呴きながら暗を見る。

「ふふつ、姉さんたら…  
早くも嫉妬ですか?」

芹華はクスクス…と笑いを堪えながら揶揄う。

暗に“親バカですね～”と言つ様に。

「ん～～…………やつかも」

暫く悩んで、蓮需は小さく舌を見せて苦笑する。

「あ、でもアレよね  
操ちゃんを皓のお嫁さんになんえば良い訳、だし  
「

「ちよつ！？」

駄目ですよつ！？」

駄目ですかねつ！？」

私の操ちゃんは誰の嫁にも出しませんからねつ！？

蓮需の発言に芹華は必死に反論し、興奮した猫の様に“フーッ！”  
と威嚇する。

「あはは～

芹華の方が親バカね～」

「…………つ～、姉さんつ～？」

蓮需に揶揄い返された事に気付き、芹華は一瞬で顔を真っ赤にする。

蓮需はケラケラと笑う。

芹華は誤魔化す様に傍らに置かれた酒瓶を持ち手酌で注いで呷る。

「おお～っ

良い飲みっぷりね～」

蓮需も楽しそうに酒を注ぎ口へと運ぶ。

「でもね、真面目な話…

二人が一緒になれば色々と都合も良いのよ

急に声を抑え、静かに言つ蓮需に芹華は真意を悟る。

「……許婚者、とこつ事で譲歩します」

「じゃあ、お嫁に」

「皓君をお婿に貰います」

「あつ～、狡いわよつ～？」

「お互い様ですつ～」

蓮需と芹華は楽し気に話を弾ませる。

ただ、胸に抱いた我が子の掴む手が虚空を彷徨わず、互いを想い繋いで居られる事を願い、祈つて。

## 序章 弐 艱難身紅

沛県・曹家

中庭を見渡し見下ろす様に少し高い位置に立つ東屋。

其処の椅子に腰を下ろし、台の上に付いた両肘を柱に組んだ両手の甲に顎を乗せまだ地面には届かない足をブラブラと揺らしている。

可愛いらしく圓らな碧眼はただ、ぼんやりと我が家の景色を眺める。

時折、頬を撫でゆく微風が戯れる様に肩口程の長さの金色の髪を揺らす。

癖の無い艶やかな髪は風を誘う様に陽光に煌めく。

藍色の衣服の隙間から覗く白磁を思わせる清楚な肌は初夏の陽射しに薄らと汗を搔いている。

五年の月日を経て成長した見田麗しき少女。

姓名は曹操、真名は華琳。

准也と芹華の一人娘。

曹家の姫君である。

「……暇ね……」

薄桃色をした小さな唇から漏れたのは退屈そつな声。

傍らに積まれた書は五冊。  
それらは既に読み終えた。

「こんな事なら私も付いて行けば良かつたわ……」

母である芹華は近くの街に視察に出ていた。

今更ながらに留守番として残つた事を後悔する。

勿論、理由は有つた。

楽しみにしていた書が届き早く読みたかったから。

だが、実際に読んで見れば期待した程の内容も難度もなかつた。

結果、暇を持て余す。

「 あら、華琳？」

今日は留守番してたの？」

真名を呼ばれ、振り向くと見知った女性が意外そうな表情で此方へ

と歩み寄つて来ていた。

「お母様？」

随分と早い御帰りですね」

華琳は女性 蓮需を見て姿勢を正して訊ねる。

「芹華に頼まれたけど…

思つてた程じゃなかつたし残りは准也に任せたわ」

そつ言いながら華琳の隣に腰を下ろす蓮需。

態々空いている椅子にではなく“隣に”座る。

華琳は蓮需の取るであつた次の行動を確信して小さく溜め息を吐いた。

「ん～～」

蓮需は華琳を抱き上げると自分の膝の上に乗せ両腕で抱き締める。

蓮需も芹華も、隙と暇もあれば自分達を抱き締めて放さない。

半ば諦めてもこるし…

別に嫌でもなかつた。

それだけ彼女達から愛情を注がれているといつ事。

「お母様、父上一人にして大丈夫ですか？」

華琳は悲鳴を上げていると思われる父親の姿を脳裏に浮かべながら訊いた。

「ふふつ、大丈夫よ

私の“手伝い”が要る様な案件は済ませて来たから

そう答えながら頬擦りする蓮需に華琳は熟、子煩惱な人達だと思つた。

華琳達は自分の両親の事を“父上・母上”：

互いの両親の事を  
“父様・母様”と呼ぶ。

「あ、でも…

華琳が居るつて事は霍琅は芹華の独り占めな訳ね…」

そつ啖き、蓮需はちよつとだけ拗ねた様な表情を見せ空を仰ぐ。

華琳は視線を動かさず…

中庭を見ている。

姓名は曹皓  
かくらう  
真名は霍琅。

蓮需の息子で曹家の嫡子。華琳の従兄弟で許婚者。

華琳にとつて初めて真名を“己の意志”で預けた相手でもある。

蓮需の“独り占め”といつ言葉に華琳の表情は小さく不満を浮かべるが…

本人は気付いていない。

その様子を蓮需はチラッと気取られない様に覗き見てクスッ…と笑う。

まだ幼いとはいえ、華琳も“女”なのだと思つと妙に微笑ましい。

自分の母親に対し“嫉妬”しているのだから。

そんな事を考えていると、不意に華琳が顔を上げる。

「 そつ言えば…

お母様、一つ訊いても良いですか？」

華琳は何か思い出したのか蓮需を見上げた。

「何かしら？」

「週に一度、

霍娘と二人だけで出掛けているのには何か理由が？」

華琳の瞳は真っ直ぐ蓮需を見詰める。

普段、芹華は准也の補佐で家を空けている。

代わりに　　という訳ではないが、蓮需が一人の事を見てくれている。

字の読み書きも蓮需を師に教えて貰った。

勿論、芹華や准也も時間が有れば色々と教えてくれているのだが。

ただ、3歳を迎えた頃から週に一度、芹華の居る日に限り蓮需は“霍娘だけ”を連れて出掛けている。

霍娘に聞いても釣りだとか狩りだとか登山だとか…  
そんな答えしか返らない。

それが微妙に不満でも有るのは確かだが…

華琳の本能は“違和感”を霍琅に感じていた。

“何か”を隠している。

華琳はそつ察した。

「……仕方無いわね

なら、次の機会には華琳と芹華も一緒に来る?」

蓮需は小さく溜め息を吐き苦笑しながら提案する。

その答えに、華琳の表情は嬉しそうに輝く。

「本当にですか?」

華琳は口調は極めて冷静にと思つてゐるが…  
蓮需から見ればバレバレ。

“好奇心”を刺激され田を輝かす姿は子供らしく…

ついつい、抱き締めたくて身体が反応しそうになるが我慢する。

「ええ、約束よ」

蓮需が笑顔でそう答えると華琳の顔に花が咲いた。

それに蓮需の理性が簡単に飛んだのは  
言つまでもない。

その日の夜

華琳は中庭を臨む廊下の柱に背中を預ける格好で月を見上げていた。

琥珀色に輝く姿には何處か安らぎを覚える。

でもそれは“月”に対してもではなく

きっと

「……霍琅……」

ぽつりと華琳は呟く。

「ん?」

自然と返された声。

右隣へ顔を向けて見れば、自分と同じ位の娘をした雪の様に白い  
髪の少女。

否 少年。

“少女だ”と言つても誰も驚かない位に  
いや、誰も“少年”だとは思わない位に可憐ひしい。

華琳でさえも“可愛い”と思つ位に、だ。

付け加えるのなら

霍琅は容姿や衣服に無頓着だつたりする。

それを良い事に、母親達が霍琅に“少女物”の衣服を着せている行  
為にも問題が有つたりするだが…  
似合つているから仕方無いとも思つてしまつ。

「……華琳？」

反応が無い事に小首を傾げまるで紫水晶の様な円らな双眸が自分を  
見詰める。

華琳は我に返る。

子供なりには周囲の気配に敏感な方だと思つが…  
全く感じなかつた。

(……こいつの間に来たのよ？

吃驚するじゃないつー）

ドキドキと高鳴る心拍数を胸中で愚痴の事で誤魔化し気持ちを落ち  
着かせる。

「……お母様から聞いた？」

平静を装い、霍琅に訊く。

話を逸らした、とも言つ。

「うん、聞いたよ

華琳とお母様も一緒に凄く楽しみ

霍琅は無邪気に微笑む。

特に隠す素振りも、演技をしている様子も無い。

（……私の気のせこだつたのかしら？）

華琳は大人顔負けの洞察力で霍娘の様子を見抜く。

事実、霍娘に疚しい事など何一つとして無かつた。

だから、華琳も“違和感”の事を勘違いだと思つた。

談笑する二人の様子を廊下の角から見る者が居た。

「…華琳も流石ね

尤も、霍娘の天然さ迄は、読み切れてはいないみたいだけど

「でも…良いんですか？」

「大丈夫、安心しなさい  
ちや～んと“それらしく”振る舞うから」

「いえ、其方らではなくて霍娘との…いえ、心配し過ぎですね」

「…ありがと、芹華

貴女の気持ちも判るけど…  
あの子には必要なの」

「判つてます、姉さん

霍娘は私の息子でも有る訳ですか？」

「ふふつ…そうね」

蓮需と芹華が微笑み合う。

ただ、静かに黒天を照らす月だけが“季”を刻む。

三日後

蓮需を先頭に四人は近くの邑へと赴いた。

勿論、曹家の主筋が揃つて行動しているのだから念の為に二十人程の護衛役も別動隊として、先に入つていたりする。

言葉だけで見れば視察かと間違えてしまうだろう。

だが、今の彼女達の服装は豪族のそれとは違ひ地味で簡素な着衣。解れや継ぎ目、汚れも有り一見して身分有る者だとは判らない。

当然ながら、装飾品の類も一切身に付けていない。

また護衛役の者達は旅人や商人等に変装している。

「……」

華琳は慣れた様子の霍琅を見ながら周囲を見回す。

普段、自分が生活している街とは景色が違う。

“新鮮か？”と訊かれれば間違いはない。  
ただ、不思議な感じだ。

書物や会話の中では庶人の生活に關して知つても具体的な様子  
つまり、“現実”を見るのはこれが初めてになる。

街の庶人の暮らしとは違い何と言つか

「地味でしょ？」

華琳の考えを見透かす様に蓮需が笑顔で訊ねる。

一瞬 本の一瞬だが顔に動搖が出てしまった。

それを蓮需が見逃す筈など無い事を華琳はよく知つてるので取り  
繕つのを諦め小さく溜め息を吐く。

「……正直、予想外です」

華琳自身、霍琅から聞いた話を元に予想していたのは釣りや狩り、  
登山を理由に何かしらの“修行”の様な物だと思っていた。

勿論、昨夜の一見でそれも的外れだと結論付け、単純に“遊び”を楽しむと考えていた。

だから、一重に予想外。

「ふふっ、そう…

華琳、アレが何か判るの？」

蓮需は楽しそう笑うと村の一角を指差した。

指の先には、地面を掘つて何かを蒔いている人々。

華琳はそれを“畑仕事”と判断する。

「…農作、ですか？」

華琳の言葉に蓮需は笑顔で頷いて首肯する。

「私達が普段、当たり前の様に食べている農作物：街の店や市で買い付けたり屋敷に運ばれて来る貢ぎ物として手に入つているけど“最初”的姿は知らない  
そうでしょう？」

蓮需の言葉に華琳は納得。

確かに“流れ”として事の“仕組み”は知っている。

けれど、“現実”としては何も知らない。

あの鍬が何れ位の重さか…

あの地面を耕すのには何れ位の力が必要なのか…

あの時いていいる種が何れ位すれば作物に成るのか…  
あの人々が何れ程の思いで作り上げるのか…

少女は何も知らなかつた。

華琳は蓮需の言葉を聞き、ただじつと田の前の光景を見詰める。

「はい」

「……え？」

華琳は唐突に目の前に差し出された“鍬”を見る。

視線を右へズラせば笑顔の霍琅が立つていて、  
差し出したのとは別の鍬を右手に持つて。

「華琳、論より証拠よ」

そう言つたのは芹華。

彼女の手にも鍬がある。

蓮需を見れば笑顔。

「…………成る程……」

華琳は鍬を受け取ると軽く振つてみる。

先端に重心が有る為、力は自然と其処に集まる。  
ちゃんと考えられている。

「ああ、始めるわよっ」

“おーっ”と声を揃えた芹華と霍娘に華琳は少しの嫉妬を感じた。

だが、実際に畠の土を耕し始めると、そんな余裕など消えてしまつ。  
最初は一度、二度繰り返し骨を探つた。

意外に簡単。

そう思つて、身体を動かし蓮霧や芹華に負けじと土を掘り起こした。

だが、直ぐに思い知る。

力の配分は大事だと。

「華琳、休んでなさい」

芹華が苦笑しながら言つ。

本当なら“平氣です！”と強がりたい所だが…  
身体は正直だった。

予想以上に腰と肩に負担が掛かっていた。

息も上がり、乱れている。

フラフラと歩いて畠の脇の岩へと背中を預けて座るとゆうへつと深呼吸する。

先ず、呼吸を整える為に。

子供用というか、小振りな鍬だったが軽くはない。

視界の中では、平氣そつに笑顔の霍琅が鍬を振る。

その姿に闘志が湧く。

華琳にとつて霍琅は一番の競争相手だった。

単に、共に世に生を受けたからではなく…

単に、一緒に暮らしているからという訳でもなく…

単に、自分の許婚者だからといつ訳でもなく…

自分の意欲を一番駆り立て自分の才能を一番磨き上げ自分の努力を一番讃め誇り自分の存在を一番理解してくれる存在だから…

だから、華琳は霍琅に対し対抗意識が強い。

勿論、霍琅の才覚も常人の枠を越えている。

そんな一人が切磋琢磨していれば、五歳という年齢に不相応な実力を身に付けて居ても不思議ではない。

尤も、此処では知能という意味が強い訳だが。

それでも、自分と霍琅との“差”を見たまま大人しく引き下がつていられる程、華琳は大人びてはおらず、また華琳は人一倍に負けず嫌いだった。

「…………んつ…………つ……」

喉を鳴らし、夢中で竹筒を傾ける。

喉を抜けた水が染み込み、火照った身体の熱を冷ます様に感じる。

「良い飲みつ振りね」

その様子を見ながら華琳の右隣に座った蓮需は笑顔で額の汗を手巾で拭う。

「華琳、初めての畠仕事はどうだったかしら？」

華琳の左隣に座った芹華も笑顔で訊ねる。

華琳は飲み干し空になつた竹筒を傍らに置きながら、自分が耕した畠を見る。

鍬で土を掘り起こし其処に種を蒔いて土を掛けた。

その後、近くの小川に行き桶に水を汲んで担いで戻り畠へと巻いた。

力の配分云々以上に体力が持つか不安だった。

が、其処は流石といつべきだ。

四人が疲弊し過ぎない程の適度な畠の大きさを選んでいた蓮需。

だから、現在、身体に残る疲労感は寧ろ心地好い位。

何かを成し遂げた…といつ達成感も相俟つて高揚感が心に満ちている。

「まあ…楽しかつたです」

ただ、色々と“悔しい”と思つ事も有つたので素直に語つ事が出来なかつた。

そんな様子を見て蓮需達はクスクスと笑う。

「御待たせ」

其処へ霍娘が戻る。

借りていた鍬を持ち主へと返しに行つていたのだ。

クタクタになつてゐる華琳にとつて元気な霍娘の姿はちょっとだけ逞しく見え、思わず頬が赤くなる。

蓮需と芹華は霍娘が華琳の様子に気付く前に…と田で意志疎通し合う。

「それじゃあ、次は昼餉を作りましょう」

蓮需は立ち上がり、華琳の右手を掴む。

「え？」

意外な展開に驚く華琳。

「ふふつ…折角ですからね  
花嫁修行、しましよう」

左手を掴んだ芹華が耳元で囁くと更に華琳の顔が赤くなつたが、母親一人は気にせず連れ去る。

霍琅は残された竹筒や手巾を回収して後を追つた。

その後

母親達の指導の下、華琳は初めて経験する料理でありながら器用に見様見真似で包丁と鍋を使って野菜炒めを作つて見せた。

味の方も初めてとは思えぬ程の出来映えで…

「華琳、凄いねっ！」

華琳の作った料理とつても美味しいよつ  
また御馳走してね」

と霍琅が我が事の様に満面の笑みを浮かべながら誉めた事も有  
り：

華琳は素直に料理に対して真剣に取り組むと決めた。

尚、余談ではあるが

霍琅の作った炒飯を華琳は嬉々として食べていた。

昼餉を済ませると…

今度は山へと入った。

食用の山菜と、危険な物を実際に採取しながら学ぶ。

ただ、華琳は改めて思つ。

（お母様つて一体何者？）

庶人の出だと聞いているが説明出来ない点も多い。

庶人は読み書きに関しては大人でも出来る物が少ないというのに、  
祖父ですらも一目置く程に博識で有り、文面や字も読み易く綺麗。

加えて、庶人の生活振りや習慣にまで精通している。

一番不可解なのは

華琳から見ても有能なのに“役職”に就いていない事だった。

祖父も、両親も有能振りを知っている筈なのに何故か話を持ち掛け  
る事もない。

（実は皇帝の血筋とか？）

などと、考えてみたりもしたのだが答えは出ず。

不思議では有るが…

華琳にとつては“理想”の女性なのは確かだった。

実の母親には悪いのだが、赦して欲しい。

だから、蓮需と霍娘だけで出掛ける時には“一倍”の嫉妬をして  
いた。

本人は無自覚なのだけど。

そんな事を考えつつ

一刻程で山菜摘みを終え、四人の手には弓が握られている状況だつ  
た。

「よく見てなさい…」

静かにそう言った蓮需。

華琳は場の静寂に息を飲み蓮需の姿を見詰める。

ガサツ

枝葉が鳴った瞬間だつた。

蓮需の右手から矢が消え、バサバサツ！、と音を立て“それ”が地面に落ちた。

「…山鳩、ですね」

芹華が“獲物”を確認して静かに呟く。

焦げ茶色の羽をした鳩。

街中で見る白や灰色の鳩と違い、その毛色は身を隠す為なのだろう。

だが、それを一日で見付け射抜く力量には舌を巻く。

「まあまあの大きさね」

そつと蓮需は芦華から山鳩を受け取り腰に差した短剣を使い血抜きをする。

その一部始終を華琳は霍娘と並んで見て覚える。

先にした料理の経験が活き思つていた程には捌き方は難しくなかつた。

「取り敢えず　　霍娘  
華琳に弓の使い方を教えてあげなさい」

「はい　　」

蓮需に言われ、霍娘は直ぐ華琳の手を引き手頃な木に刃を付ける。一瞬だけ対抗意識からか、蓮需達を振り返つた華琳も素直に霍娘に習つ。

「やつぱり、　“お嫁”　よ

「いいえ、　“お婿”　です」

子の所有権を主張しながら蓮需達は一人の様子を眺め微笑んだ。

弓を扱い始めて四半刻程。

華琳は、持ち前の理解力と器用さで人並みに弓を使い熟していた。そして、その華琳の口から“狩り勝負”と案が出ると霍琅は二つ返事で承諾。

それぞれ』と矢を20本に短剣を一本、獲物を入れる麻袋を持って山中へと姿を消した。

「……やれやれ…

華琳といい、霍琅といい…

呆れるしかないわね」

蓮需は一人の才覚に素直に感嘆していた。

「知のみならず、武までも天賦とは…

これもあの子達の“運命”なのでしょうか…」

芹華は王朝の終端の兆しが見え始めた事も有り余計に気が滅入る。

「霍琅にも、華琳にも…

私達は“宿命”を背負わせ歩ませる事になるわ  
けれど“運命”とは自らの意志で切り開く物よ

蓮需は芹華を見詰める。

不安が無い訳ではない。

しかし、それ以上に信頼と期待が有る。

故に心は揺らがない。

「だから、私達は残された時間の全てを賭して一人に持ち得る全てを伝える

あの子達が“宿命”さえも笑つて超えられる様にね」

そう言って微笑む蓮需。

芹華は自然と笑みが浮かぶのを感じる。

彼女自身も“宿命”により翻弄されたが…

それでも今は笑っている。

「… そうですね、姉さん」

“彼女”が“姉”で本当に良かつたと芹華は思つ。

そして、改めて“義兄”が見始めた女性だと。

そう 気付けば簡単。

“それ”は私達の裡に常に在るのだから。

“心”が折れぬ限り

決して“未来”は閉ざされはしない

“生命” 在る限り。

蓮需と芹華は微笑み合う。

声にせずとも…  
形にせずとも…

“姉妹”は解り合える。

「あ、安寿様つ！  
巨高様つ！」

慌てた様子の村人 否、変装した兵士が駆け寄る。

息を切らし、切羽詰まつた様子に一人は顔を見合させ嫌な予感を覚えた。

「…………居ないわね…」

華琳は山中を歩きながら、獲物を探していた。

一度だけ雉を見付けたが

気持ちが焦っていたのか、狙いを外してしまい…  
三度射たものの逃がした。

加えて、神経質になり過ぎ五本も無駄に射っていた。

「…………はあ……」

盛大な溜め息が溢れる。

“「ひしくない」と自分でも感じている。

霍琅に対する反応が一々、自分を狂わせた。

自覚していなかつた。

いや、本当の意味で自分は知らなかつた。

私が霍琅に

“恋”している。

本当に自覚したのは今日の昼餉の時だつた。

今まで“許婚者”という事から傍に居るのが“当然”だと思つていた。

でも、本当は違う。

自ら想い望まなければ  
自ら掴み取らなければ

“それ”は簡単に零れ落ち手が届かなくなる。

失いたくない

私は“霍琅”の存在だけは何が有つても失いたくないと思つた。

「……霍琅……」

彼を想うだけで胸が、心が温かくなる。

「　　おい、見ろガキだ」

その声に華琳は我に返る。

声のした方へと振り返れば裘褐に身を包んだ男達。

髪や髭は乱雑に伸び放題、下品な笑みには悪寒が走り嫌悪感を煽る。

身なりで判断するのは些か気が咎めるが…

この男達はまず間違いなく“賊”の類いだらう。

(……不味いわね……)

華琳は冷静に相手の様子を見ながら後退する。

不用意に背中を向けたり、一気に駆け出すのは危険と判っていた。

だが、人間の眼は一つしか存在しない。

「つつか・まえ・たつ・」

「あやあつー?」

背後から両腕を掴んだ男に持ち上げられる。

無理矢理引っ張られた腕に軽い痛みが走った。

だが、そのお陰で左手には弓が有る事を思い出す。

( 放しなさいよっー )

バシッ！、と左手首を捻り弓が男の顔を捕らえた。

「 つてえつーー？」

男は反射的に手を放す。

華琳は着地すると同時に、反転し男の脇を抜けた。

「 逃がすかっ！」

「 つーー？」

だが、華琳の即席の攻撃は男に油断が有つたから顔を捕らえたに過ぎなかつた。

男は直ぐに立ち直り華琳に足を掛け地面に転がした。

華琳は前方に回転。

ただ、無意識に身体を捻つた為に横滑りする。

衣服の裾丈が長くなければ手足を擦り剥いていた。

（…いや、そんな程度じゃ済まないわね…）

華琳は男を見る。

「…」の糞ガキが…

俺様の顔を傷付けやがつてただで済むと思うなよ？」

脅せば大人しくなるとでも思つてゐるのだろう。

男は幅広の剣 柳葉刀を抜き、チラつかせる。

「…ふんつ、獸以下に身を墮とした下衆が何を…  
その言葉に何れ程の価値が有ると言うの？」

けれど、華琳は臆する所か見下し、咎める様に言つ。

勿論、現状では自殺行為に等しいが華琳の気性がそうさせた。

「 こ、このガキがあ…  
打つ殺してやらあつ！…！」

案の定、男は激昂し  
刃を振り上げた。

華琳は冷静だつた。

ゆっくりと動く世界の中で刃の軌跡を見詰める。

此処で死ぬ  
それが己の“天命”か。

そんな冷めた気持ちで。

だが、不意に浮かんだのは“笑顔”だった。

自分にとつて  
何よりも大切な存在。

手放したくない  
離れたくない

まだ死にたくないっ！

刹那、世界が加速する。

剣閃に目を瞑り

「霍琅———つ！—！」

華琳は力の限り叫んだ。

刹那

ヒュ　　ドッ！

風を切り、肉を穿つ。

「ぐあああああああつ！？」

男は痛みに叫びを上げた。

『 か、頭つ！？』

状況が理解出来ずに男達は慌てふためく。

頭目と思われる男は手から剣を落とし、無様に地面をのたうちまわる。

「 怪我は無い？」

華琳が目を開けると  
白い花が咲いている。

「 ……霍琅…」

今更に身体が震える。  
死の恐怖に怯える。

今にも涙が溢れ、泣き出しそうになる。

それでも、霍琅の掌が頭を撫でてくれるだけで…  
心が静かに安らいでゆく。

「 ……華琳、母上達の所まで真っ直ぐに走つて…」

「 ……霍琅は？」

そう訊ねるが華琳は霍琅の言葉の意味を理解している自分が歯痒くて仕方無い。

きっと霍琅は一人で残る。

「だつてほら…

“鬼”の相手をしないと

そう言って笑う霍琅。

これは“遊戯”ではない。

歴とした“殺し合い”…

“戦”と呼ばれるものだ。

それでも“生存”する為に何方らかが残る方が確率が上がるのも確かな事。

華琳は自分より霍琅の方に分が有ると察した。

「直ぐにお母様達を呼んで戻つてくるわ…  
だから…」

「うん、大丈夫」

そう霍琅が微笑み答えると華琳は駆け出した。

「 あ、待て つ！？」

華琳を捕まえ様とした男の顔を風が掠めた。

視線をズラせば木の幹には矢が刺さっている。

「 間違えては駄目ですよ？」

“ 鬼さん”達の御相手は…“ 私” です 』

そう言つて微笑みを湛える“ 少女” を前に…

男達は気圧され息を飲む。

「 さあ、始めましょうか

“ 鬼追い” を 』

少女は笑顔のままで男達の頭の落とした柳葉刀を拾い上げると一步  
前に出た。

華琳は走った。

衣服が枝葉に引っ掛けられて、肌を切りひきと只管走った。

「 華琳っ！」

不意に呼ばれ足を止めるが勢いを殺せずに転げた。

だが、直ぐに身体を起こし声を出す。

「 母様っ！、霍琅がっ！」

決して礼儀を忘れなかつた華琳の叫びに事態の切迫を感じ取る。

「 芹華、先に行くわっ！  
貴女は皆を率いなさい！」

「 母様、私もっ！」

蓮需が芹華に指示する間に華琳は蓮需に駆け寄り裾を離さない様に握り締める。

「 華琳、何を 」

芹華は直ぐ諫め様としたが蓮需が腕で制した。

蓮需は華琳の前に屈む。

「華琳、私と一緒に来れば“死”を田にする貴女にその覚悟が有る?」

蓮需の目を真っ直ぐ見詰め華琳は首肯する。

「私は霍琅の傍に居たい  
その為なら、どんな事でも乗り越えて見せます」

搖るぎ無い華琳の決意。

まだ五歳の子供の台詞ではないのだが…  
それ程迄に強い意志。

蓮需は華琳を左腕で抱え、立ち上がる。

「じつかり掴まりなさい」

華琳が首へと両腕を回したのを確認すると蓮需は地を蹴つて疾駆した。

男達は我が目を疑う。

「…？」

目の前で次々と仲間が血を吹きながら倒れて逝く。

「アーネスト、おまえが

一ひいきいああつ！」

相手はたつた一人。

それも、自分達の身の丈の半分にも満たない子供。

見た目にも“幼眇”な姿に無邪気で愛らしい微笑み。

見ていいだけで心が温かくなる様な“少女”なのに…

男達の本能が感じ取るのは“戦慄”と“恐怖”

そして“死”と“絶望”に他ならない。

では、何故逃げないのか？

否 逃げられないのだ。

「う うああああっ！」

耐えきれずに逃げ出す。

ヒュウ と風を切り裂き閃いたのは剣。

「 おがあつ！？」

ザクツー、と音を立てて、逃げ出した男の喉を貫く。

しかし、“少女”の手には別の剣が握られている。

それは当然の事。

この場に居る男達は誰しも剣や斧や矛を持っていた。

“少女”は最初の“獲物”を皮切りに、自らが屠った者達の獲物を自由に使う。

それはまるで

自らが向けた“刃”が  
自らへと返つてくる

そんな言葉の様に。

ただただ“少女”は男達に“平等”に“死”を齎す。

華琳を抱えたまま蓮需は獸の様に山中を駆ける。

芹華達など一瞬で置き去り走り抜ける。

華琳は必死にしがみつき、息苦しさに耐えながらも、視界は前を見詰める。

「 つー

すると、唐突蓮需が足を緩めて止まった。

華琳が周囲を見ると先程、自分を取り囲んでいた賊と思しき男達が“屍”となり転がっている。

蓮需はその内の一つを足で転がして角度を変えた。

（…斬り口に迷いが無い）

蓮需は屍の状態を見ると、小さく舌打ちした。

想定した中で、最も厄介な事態になつたと判断する。

「……不味いわね」

静かに呟きながら、蓮需は左腰に佩く剣を鞘ごと抜き右腰に佩き直した。

華琳は蓮需の横顔に初めて見る種の緊張感を感じた。

「この先何が有つても手を放しちゃ駄目よ」

蓮需の言葉に華琳は頷く。

蓮需は右手を柄に掛けるとゆっくつと歩き出す。

異常な程静まり返った中に蓮需の足音だけが響く。

華琳は蓮需が歩みを進める度に増える屍と…

噎せ返る程の血の臭いに、吐きそうになつた。

だが、それを必死に堪え、霍琅の姿を探す。

見れども見れども屍ばかりの光景は憂鬱な半面  
華琳は安堵していた。

（大丈夫、霍琅は大丈夫）

何度も自分に言い聞かせ、屍の中で霍琅を探した。

暫く歩くと視界が開けた。

丁度、登り道になつている先に空が見える。

蓮需は直ぐに立ち止まり、華琳を下ろした。

“手を放すな”と言つたが下ろしたとなると…  
何かしらの理由が発生した事になる。

「華琳、下がつてなさい」

そつと前に出る蓮需。

華琳は今の情報を得ようと蓮需の後を追い坂を登つて背後から顔を

出した。

前を見てみると

「……霍琅？」

広場の様な場所は死屍累々となつており、その中央に霍琅の姿が在つた。

全身を赤黒く染め  
純白の髪は深紅に染まる。

「霍琅つ！」

華琳は堪らず駆け出した。

「華琳つ！？  
待ちなさいつ！？」

霍琅に意識を集中していた蓮需は反応が遅れる。

伸ばした左手は華琳までは僅かに届かない。

同時に体勢が崩れた為に、次への動きも遅れた。

華琳は霍琅の“間合い”に入ってしまった。

（間に合わない　　）

蓮需の脳裏を最悪の光景が過つた。

蒼天を仰ぎ佇んでいた霍琅がゆっくりと顔を向ける。

「……………華琳？」

だが、目に映つたのは別の光景だつた。

「霍琅つ！」

華琳は“返り血”に全身を染めた霍琅に抱き付く。

自分が血で汚れる事なんて氣にもせずに。

霍琅は一瞬驚いた様に目を丸くしたが、

倒れない様に足を踏ん張り華琳を受け止めた。

「華琳、汚れるよ?」

霍娘は穏やかな声と微笑みで華琳に言つ。

「そんな事…  
…どうでもいいわよ…  
…心配…したんだからね…  
…ばか…霍娘のばか…  
…つ…う…うつ…」

文句を言いながら感極まり泣き出してしまつた華琳の頭を霍娘は優しく撫でる。

安心させる様に

自分は“此處に居るよ”と伝える様に

霍娘は血に染まつていない両手で華琳を抱き締めて、頭を撫で続ける。

その様子に、蓮需は右手を剣の柄から放す。

(やれやれ…)

雨降つて地固まる、ね

降つたのは血の雨だけど、などと思いながら一息吐き霍娘の様子を見る。

自分を見失わずに居る。

霍娘にとつて華琳の存在がそれだけ大きいのだろう。

(……いいえ、違うわね)

蓮需は直ぐに否定した。

霍娘にとつて華琳の存在が大きいのなら  
激昂して我を忘れて賊共を廬殺し、華琳まで傷付けていてもおかしくない。

愛情は諸刃の剣。

一步間違えば最愛の者へと切つ先が向かう。

だが、華琳は自分達の所へ“先”に戻つて来た。

つまり、霍娘が己の意志で華琳の安全を第一に考え、行動したという事。

そして、霍娘が己の意志で“殺す”事を決めた証。

華琳を先に行かせたのも、それが理由だらう。

（…貴男も、いつの間にか男の子になつてたのね…）

“産まれた時から男です”と霍娘に返されそうだ。

そういう意味ではないが、多分、霍娘には通じない。

「…華琳も苦労するわね」

“我が子ながら…”と思いながら一人に歩み寄る。

その後

蓮需の姿に安堵したのか、霍娘は氣絶した。  
同時に華琳も。

芹華達は賊共の屍の処理に追われ終わったのは日没後といつ事で急  
遽一泊。

結局、華琳と霍琅は屋敷に戻つても  
更に三日眠り続けた。

## 洛陽

古くは東周の平王の時代に戦禍で荒廃した鎬京  
現在の長安から都を移し、“洛邑”としたのが始まりとされる。

その後は長安と並んで常に重要な都として存在。

また、洛陽は東に虎牢関、西に函谷関、南北も高山が存在する事から長きに渡り軍事的な要所でも有る。

現在は第十一代皇帝・靈帝である劉宏が治めている。

その洛陽に、華琳と靈琅は来ていた。

初めて見る洛陽は

朝廷の中心と有つて街並みすらも派手だった。

通りに連なる店舗はどれも豪華絢爛で

“贅を極めてこます”と言わんばかりに。

一目見て、“榮華”という言葉が一人の脳裏に浮かんだのは言つまでもない。

だが、目に見える事だけが眞実とは限らない。

蓮需達に連れられて行つた先は所謂“裏通り”だつた。

華琳と霍琅は目を見開く。

表通りが華やかだつた分、裏通りの様子に驚きを隠す事は出来なかつた。

通りは酷く荒れていた。

まだ閑散としているのなら“人の流れかな”と考える所なのだが…そうではない。

人は確かに居る。

しかし、其処に有る氣配は“活氣”ではなく…  
“死氣”とでも言おうか。

“怨嗟”に近い“嫉妬”の類いの暗い感情の渦。

ただ、見てゐるだけなのに此方の心まで“暗がり”へ引き摺り込まれてしまつと錯覚しそうになる。

咲いてる花でさえも枯れて朽ちてしまいそうだ。

“死”的恐怖とは違う…  
もっと陰湿で嫌な感覚。

例えるのなら

“生”の中の“死” とでも言つべきか。

確かに貧富の差が激しいと思うが、それは此処だけの話ではない。  
勿論、そつ言つてしまえばそれまでの事だが…

この場所には頂点と底辺の開き以上に  
“人心”の荒廃を感じる。

「……これが…洛陽…」

華琳の“信じられない…”といつ驚きの感つ気持ちがその咳きには  
現れていた。

想像していた都とも…  
話に聞いていた都とも…

全く異なる都の

“裏の顔”が此処に在る。

「よく…見て置きなさい」

蓮需に言われ華琳と霍娘は視線を動かさず首肯した。

目の前にある光景は沛では考えられない。

しかし、これは現実だ。

統治者の“質”次第で街は善くも悪くもなる。

そして、この洛陽の姿こそ“漢”といつ名の“国”の縮図であり、  
眞実なのだと二人は理解していた。

洛陽・曹家

洛陽に有る曹家

つまり大長秋である雅信の屋敷に四人は来ていた。

華琳と霍娘は侍女の案内で屋敷の中を見ている最中。

蓮需と芹華は広間の椅子に座つて静かに待つていた。

「すまぬ、待たせたのう」

姿を現したのは雅信。

相好を崩した姿から宮中の彼を想像するのは難しい。

だが、漢が現在も國の形を留めているのは  
彼の様な存在が、少數ではあるが尽力しているからに他ならない。

「いいえ、御気遣いなく  
お久し振りです、御義父様  
御健勝で何よりです」

蓮需は笑顔で返し、芹華と共に頭を下げる。

上座に有る当主の席へ座り雅信は蓮需を見る。

その表情は一変し険しさを露にする。

「……霍琅の事は儂の耳にも入つて来てある……」

「……そうですか……」

雅信の言葉に蓮需の抱いた淡い期待は泡と消えた。

あれから一ヶ月

そう考えれば無理も無いと思つ蓮需。

四人が沛の屋敷を出たのは一週間前の事。

十日前に何の前触れも無く“洛陽へ移る”と言つたら華琳と霍琅は目を丸くし、顔を見合させていた。

二人には理由は

“御祖父様の仕事の補佐”といつ事にしてある。

だが、蓮需達は“あの日”から動いていた。

本当の要因は 霍琅。

集めた情報によれば

霍琅の“討伐”した山賊は北から流れて来たらしく、その数は凡そ三百。

賊の“質”は低かつたが、如何せん状況が状況だ。

兵士達には口止めしたが、庶人はそうはいかない。

蓮需達も手を打とうとするものの“決め手”が無い。

そういうじてている間にも、噂は広まつていった。

沛を発つ直前や道中の街で聞いた噂では

“曹家の麒麟児”だとか…“曹家の白姫”だとか…

妙な二つ名が付いていたり話の内容が誇張され…

曹家の嫡子が山賊五百人を斬り伏せたとか…

曹家の姫君が千人の山賊を手玉に取ったとか…

話が一人歩きしていた。

勿論、“ただの噂話”だと“落ち”が付けば良いが…  
そう簡単ではない。

そして、霍娘の“存在”に衆目が集まり始めていた。

霍娘“自身”が注目される事は大して問題では無い。

重要なのは“血筋”

勿論、霍娘が曹家の嫡子に間違いはないのだが…

「……“始皇帝”の血か」

雅信が咳き、瞼を閉じると蓮需と芹華は表情に苦悩を滲ませた。

“始皇帝”と言えば

あの“秦”の初代皇帝。

秦王として戦国諸国と戦い滅ぼし天下統一を果たした最初の存在。

だが、統一後、僅か十二年という短さで病死した。

後、二世皇帝となつたのは末子の胡亥。

彼により始皇帝の血族たる公子・公主は計二十一人も誅殺された。

胡亥は趙高により殺害され胡亥の死後、三世皇帝には公子・扶蘇の子供とされる公孫・子嬰が就いた。

しかし、始皇帝の死後から挙兵した劉邦と項羽により子嬰も降伏後に一族諸とも皆殺しとなつた。

史実上　始皇帝の血統は絶え滅びた。

その筈だつた。

暫しの沈黙の後…

重く閉ざしていた口を開く蓮需。

「以前、血筋に関して簡単には話しましたが…  
私の母方の血筋は秦代以前から連綿と続く“巫史”的家系です

始皇帝の血が入つても誰にも知られる事なく今に続いているのは…

一つは姓が違つていた事と当時の子供の誕生が宮中ではなかつた為  
だそうです

家系図が残つてゐる訳では有りませんが…  
証明する方法は有ります  
明言は避けますが

一族の“力”は一子相伝で“子”が出来れば“力”を失い“役目”  
を終えます

ただ、本来は母から娘へと受け継がれる女系で…  
勿論、男子も居はしますが全て第一子以降…  
長子・嫡子は必ず女子です

霍娘の様な事例は初めての事では有りましたが…  
私自身も“役目”と言われ何かをしてきた訳ではないので深く考  
えた事が無いと言つのが正直な所です

蓮需は一度言葉を切り

「見た目は“女の子”でも霍娘は“男の子”ですし

そう言つて苦笑する。

張り詰めていた空気が緩み芹華も雅信も同意する様に苦笑を浮かべ  
た。

「これは、私の推測でしか有りませんが…  
一因は“曹家の血統”ではないかと思います  
今までに無い事と言えば、交じる“血”以外の要因が思い当たります  
せん」

蓮需は真っ直ぐ雅信を見て言い切る。

雅信は蓮需と暫し見合ひと小さく溜め息を吐いた。

「今に思えば御主達の縁はあるの“出逢い”からして、不思議な事じ  
やつたな…」

「ふふつ…そうですね

私自身、我が子を腕に抱く日が来るとは想像した事も有りませんで  
した

あの人に

“雍貴”に出逢う前迄は

雅信も蓮需も芹華まで…

往昔を思い浮かべながら、目を細め穏やかな微笑みを浮かべた。

曹家の嫡子

姓名は曹朋、字は伯興。

真名は雍貴。  
よつき。

蓮需の夫で霍娘の父親。

だが、彼は霍娘の産まれる半年前に他界している。

蓮需と雍貴

二人の“出逢い”は今から十年前に遡る。

黄山

蒼天を裂き、光が流れる。

「……父上、今を御覧になりましたか？」

肩口まで伸びた金色の髪を揺らし碧眼の青年は背後に居た壮年の男に振り返る。

「…うむ、確と見た  
じゃが、白昼に流星とは…  
何とも不吉じゃな  
雍貴よ、日を改めぬか？」

男 雅信は息子を見詰め再考を促す。

「何を弱気な事を…

高が流星、気にし過ぎです

それよりも今は逃げ込んだ盗賊の残党を探し出し討つ事が重要ですよ」

雍貴は真面目な表情でそつと右腕を上げて後続の兵士達を散開させる。

「じゃが、面妖な…」

「なら、序でに私が様子を見てきましょう

妖怪の類いならば我が剣で伐ち滅ぼすまでです」

笑顔でそつと告げ雍貴は馬を降りて駆け出す。

「待たぬか 全く…

あの気性は母親譲りよな」

“やれやれ…”と頭を振り雅信も馬を降りて後を追つ事にした。

雍貴は霧の深い山中を歩き周囲を警戒する。

（父上は物事の“吉凶”を気にし過ぎますよ…）

治世を“運”になど任せていっては“民の未来”を築く事など出来はない。

現実を見詰め、理想を抑え一歩ずつ進んで行く事こそ確かな“平和”へ繋がる。

そう雍貴は考える。

「 ん？」

ふと、人の気配がした。

辺りを見渡し、気配のする茂みへと分け入る。

（…逃げ込んだ盗賊か？）

雍貴は右手を左腰に佩いた“伝家の宝刀”の柄に右手を掛け、ゆつ

くつと進む。

「　おい、見ろよ  
マジで女が居るじゃねえか  
それも、かなりの上玉だ」

茂みの隙間から、声のする方を覗いて見る。

五、六人の男達が輪を作り何かを見下ろしている。

黒い衣裳に裘褐を羽織つた姿には見覚えが有つた。

三日前に討伐した盜賊団の共通した格好  
頭は討ち取つたから残党と見て間違ひ無いだろつ。

「　お?、起きたか

おい女、何で此処に居るか知らねえが俺等の“相手”してくれよ?  
そうすりやあ、命は助けてやつてもいいぜ」

男達は一様に下品な笑みを浮かべる。

「　失せろ、下衆共め

そんな中に

凛とした声が響いた。

卑猥な笑みを浮かべていた男達の顔が固まる。

“此奴、何言つてんだ？”的な顔で互いに見合ひ。

「……おい、てめえの立場判つてんのかあ？」

男達の暫定的な頭と思しき男が手を伸ばした。

シャ ザンツ！

瞬間

男の腕が宙を舞つた。

「 は？」

男には何が起きたのか理解出来ず呆然とするが…

ドサツ…と落ちた己の腕と先端を失つた上腕を見て、何が起きたか理解した。

刹那 まるで思い出した様に鮮血が迸る。

「ぐああああああつ！……？？？  
う、腕がつ！？  
俺の腕がああ  
」

だが、叫びは途絶える。

男の首筋は斬り裂かれて、血の雨を降らせる。

いつの間にか立ち上がった女の手には男の佩いていた柳葉刀が握ら  
れている。

刃は血を滴らせ　閃く。

閃き、血の花を咲かせる。

断末魔さえ許されず

男達は物言わぬ屍と化す。

「…次は “貴方”？」

女は此方を見詰め、右手に持つ柳葉刀の切つ先を向け“ざつする?”と訊ねる。

雍貴は自分でも気付かない内に姿を晒していた。

だが、無理もない。

あまりの剣の冴え  
あまりの武の違い

あまりの朱の美に

ただただ、雍貴は魅せられ惹き付けられた。

「…………私の伴侶になつては下さいませんか?」

「…………はい?」

突拍子も無い雍貴の言葉に女は啞然として呟いた。

だが、言葉が悪かった。

「ほ、本当ですかつ!-?」

雍貴は女の間合いに一瞬で入り右手を握り締めた。

女が握っていた筈の柳葉刀を探すと雍貴の背後に突き刺さっているではないか。

女は色々な意味で驚く。

「嗚呼つ！」

何と言う巡り合わせつ！

あの“流星”は私達を導き“出逢い”を齎したつ！

これは“天命”ですねつ！？

今まで“微塵も”信じていませんでしたが今からは真摯に信じますつ！

「嗚呼つ　神よおーつ！」

「ちよつ　貴男つ！」

何を訳の判らない事を　つて、抱き付かないでつ！？

は、放しなさいつ！

放しなさいつてばーつ！」

有頂天で盛り上がる雍貴と状況が把握出来ず困る女。

後に女の拳骨が雍貴の頭を容赦無く叩くのは

まあ、当然の事だった。

その後、女性は雍貴と雅信から状況を説明され自身の置かれた状況を理解した。

女性は“行き場が無い”と答え曹家に身を寄せる事になった。

その女性　　蓮需は雍貴の求愛に戸惑いながらも…  
次第に惹かれて

やがて、夫婦となる。

それは“出逢い”から数え丁度、一年後の事だった。

「御義兄様の求愛は端から見ても熱烈でしたね」

芹華は袖口で口元を隠し、クスクス…と笑う。

当時から　　それ以前から曹家と交流の有つた芹華は雍貴の変わり様に驚き我が目を疑つたのを思い出す。

「本にのう…

真っ直ぐで真面目で堅物…

色恋沙汰には頓と縁が無いから諦めておつたが…  
ああも変わるとはなあ…」

雅信も蓮需を連れて戻つた往昔の雍貴の姿を振り返り苦笑する。

「…短い様で、永い永い…  
とても幸せな時間でした」

蓮需は瞼を閉じて俯く。

共に生きたのは四年半…  
“僅か”と言つ者は多い。  
けれど、蓮需にとって…  
“刻”は失われない。

“時”が止まり過ぎ去り、“季”が移り変わらうと…

一人の生きた“刻”は今も在り続いている。

“霍娘”といつ

確かに“生命”として。

蓮需は顔を上げて目を開き雅信を見詰める。

「私は明日、霍娘を連れて旅に出ようと思ひます

“思ひます”と言つ割りに蓮需の瞳には決意が宿る。

隣で芹華は“やせり…”と頭を伏せる。

義理とは言え、十年もの間“姉妹”として歩んで来た“妹”は“姉”考えている事など手に取る様に判つてしまつ。

「曹の家督はどうする?」

「華琳なら問題無いかと  
寧ろ、華琳にすべきです」

雅信の問いかに蓮需は迷わず返答する。

確かに華琳の才覚や気性を考えれば霍娘より適任だ。

「“お嬢さん”ですよ?」

“なら、霍娘は貰います”と芹華は暗に言つ。

「華琳と霍娘が互いを望み共に在りたいと想つのなら私が言つ事は  
何も無いわ」

そう言って微笑む蓮需。

芹華は“ズルいです…”と拗ねの入った眼差しを向け寂しそうに微笑む。

「これから来る乱世…

あの二人には幾多の困難が待ち受けているでしょう」

蓮需の言つ“乱世”

それは“群雄割拠”の時の訪れに他ならない。

雅信も芹華も重々承知。

「……御前の覚悟は判つた  
これを持つて行くが良い」

そう言って雅信は「が傍らに有つた包みを蓮需の前に差し出した。

一目で蓮需は包みの“中”に気付き、目を見開いて、雅信を見る。

「……御義父様

御気持ちは嬉しいですが、これは曹家の

「だからだ」

蓮需の言葉を遮り、雅信はいつも見せない“当主”としての姿勢を見せる。

「言いたい事は判る  
だがな、霍琅が曹家の嫡子である事は変わらぬ  
何より 既に“此奴”は霍琅を“主”と定めた  
他の者に渡す理由が無い」

そつ言いながら雅信は包みを右手で広げる。

濃紺の包みの中から現れたのは

黒と銀で装飾された剣。

否 剣といつこには奇妙に反り曲がっている。

「曹家の宝刀

名を“倚天青煌”と言つ

蓮需は知つてゐる。

出逢つた時、雍貴の佩いていた物だ。

「…曹家の家宝ですか？」

「…曹家の家宝ですか？」

初めて見る芹華は観察する様に覗き込む。

「これは“刀”と言つて、獨特の反りが特徴だ  
代々、曹家の嫡子に継がれ先代の“主”は雍貴だ」

雅信は“倚天青煌”を手に取つて鞘から抜く。

黒天を思わせる漆黒の刃に芹華は息を飲んだ。

「此奴には我等同様に真名が存在してな…  
“主”一人に“名”一つ  
己が“主”が変われば共に“名”を変える  
儂の時は“峯波洛佳”…  
雍貴の時は“空淨佳華”…  
そして

“麒麟蒼鴉”

それが霍琅を“主”とした“此奴”的“今”的名だ

雅信は静かに鞘に納める。

「……はあ…御義父様？」

それは“根回し”では？

“やられた”とこつ苦笑を浮かべて訊ねる蓮需。

「なに“偶々”屋敷の中で霍琅が“倚天青煌”を手に取つただけじ  
や  
「み

雅信は一ヤリと口角を上げ“してやつたり”と言わんばかりの満面  
の笑顔。

「…つたく、私もまだまだ“青一才”とこつ訊ね

己の“先見”の甘さを知り蓮需は溜め息を吐き苦笑を浮かべる。

だが、その表情は先程より晴れやかで  
彼女“らしさ”に溢れる。

「御主は氣負い過ぎじゃ  
氣持ちは判らんでもないがもつ少し“息子”を信じてやらんか  
御前達の“子”だらう？」

“本に、よく似てあるわ”と雅信は笑いながら呟く。

「ふふつ、そうですね」

「私達の“誇り”です」

蓮需と芹華も楽しそうに、嬉しそうに笑つ。

今は進む道が分かれても…

辿る道が違つたとしても…

歩み至る道が重なるなら…

その手は 必ず繋がる。

中庭を望む東屋。

同じ長椅子に寄り添う様に並んで座る影が二つ。

つい先程、御祖父様達から霍娘と御母様が旅に出て、自分が家督を  
継ぐ事になる旨を聞かされた。

そのまま一人で此処へ来て暫く無言で座つていた。

夜の帳が降りた深い世界を照らすは月の明かり。

黒天に瞬く星々でさえも、月の代わりは出来ない。

そう

太陽と月が互いに欠かせぬ存在である様に

私達も互いを欠かせない。

「どうしても…行くの？」

華琳は琥珀色の月を見詰めながら静かに訊ねる。

「…うん、行くね」

同じ様に月を見詰めたままはっきりと答える霍琅。

“母上が決めたから”とか“行きたくないけど”とか“そうするしかない”とか“そうしなければ”なんて言い訳は言わずに

“自分の意志で決めた”と言葉に示す。

「私が家督を継ぐのよ？」

“貴男はそれで良いの？”と華琳は挑発気味な笑みを浮かべて霍琅を見る。

本音は“行かないで…”と今にも泣き出しそうなのに必死に堪え、強がつて。

「華琳なら大丈夫だよ」

霍琅は優しく微笑み華琳を見詰め返す。

華琳“だから”ではなく…  
大丈夫“だね”ではなく…

その言葉は唯一人

“寂しがり屋の女の子”に向けられた言葉。

「……帰つて来なかつたら恨んでやるから…」

“怨嗟”的言葉。

けれど、拗ねる様な眼差しから伝わる“寂しさ”…

それだけで、霍琅の心には決して尽き絶える事の無い“炎”が灯る。

「必ず、帰つてくるよ  
此処へ 華琳の隣に…」

霍琅は左手を伸ばし華琳の左肩を抱き寄せる。

華琳も自ら身体を預けて、霍琅の胸に頭を埋める。

トクン…トクン…トクン…

乱れの無い、一定に正しく脈打つ霍琅の鼓動。

“あの日”にも感じた様に何よりも安心する。

どんなに自分の鼓動が乱れ自分の手に負えなくとも…

霍琅を傍に感じるだけで…

私は“私”に戻れる。

「当然よ、貴男は  
霍琅は私の“許婚者”  
私の“所有物”なんだからずっと私の傍に居るのよ  
判つたわね？」

そう言い霍娘を上田遣いに見上げる華琳。

「“所有物”は酷いよ…」

「つむれご、返事は？」

“所有物”発言に苦笑する霍娘を睨み付けて誤魔化し華琳は返答を促した。

霍娘は静かに目を閉じると顔を空へと向ける。

「……華琳は“未来”をどう見てる?」

そう訊く霍娘。

華琳は質問の意図を直ぐ様理解し考える。

脳裏に浮かんだのは  
昼間見た光景。

「……今日見た“洛陽”が答えでしょ?」

御祖父様の様な方ばかりが治世に携わっていれば今の“洛陽”は無かつた。

なら、皇帝も朝廷も宦官も宛にはならない。

民を守るには

大きな“力”が要る。

“力”を得るには

大きな“機”が要る。

そして“機”的“兆し”は既に“蔓延”している。

「やがて“乱世”が訪れるでしょう…  
ならば、私は世を治める為“霸道”を歩む

私は“霸王”として天下を統一し大陸を治める

華琳の言葉に微塵の迷いも揺るぎも無い。

確かに決意。

霍琅の心も揺れない。

見据える“未来”は同じ。

ならば　彼は何を見る?

「“霸道”と“霸王”…  
“霸”は抜き身の“刃”…

故に意図せず触れる全てを傷付けるもの……

霍琅は“霸”の持つ裏側を静かに説いた。

しかし、当の華琳は眉一つ動かす事無く聞き入れる。

「そうね……

けれど、それは覚悟の上  
喻え、その所為で何れ程の“痛み”を伴おうとも……  
私は“私の道”を往く  
ただ それだけよ

華琳がそう答えると霍琅はゆっくりと手を開き華琳へ顔を向け、見  
詰める。

月明かりを浴び  
髪は白銀に輝き……

紫の双眸は強く煌めく。

思わず華琳は見惚れる。

「……貴女が“霸王”的道を往くのなら

貴女が“霸道”を成した後“王道”へ至れる様に……

貴女の“心”が“痛み”に傷付き続けない様に……

私は貴女の“鞘”となり、共に在りましょ

う貴女という“刃”を抱く、貴女だけの“鞘”として

「 つ！？」

求愛・求婚とも取れる台詞を真顔で告げる霍琅。

ドキッ！、と胸が高鳴り、鼓動が速まる華琳。

勿論、霍琅に“その意”が無い事を判つてゐる華琳。

（…全く、この朴念人は…  
これで何で鈍感なのよ…）

胸中で愚痴り、高鳴る心を落ち着ける。

霍琅はただ真つ直ぐ華琳を見詰め続ける。

“答え”を待つてゐる。

そう理解し、華琳は小さく深呼吸して思考を戻す。

「私に“鞘”が必要と？」

霍琅の覚悟を試すかの様に華琳は鋭く睨み付けながら静かに問い合わせた。

霍琅は怯む事無く、華琳の眼差しを受け止める。

己の覚悟を、意志を  
心と想いを言葉に顯す。

「天を衝きたる霸者の雷に依る事叶うは霆のみ…  
如何なる“刃”も納めたる“鞘”無くしては禍…  
故に刃鞘揃いて“魂魄”は“剣”と成し  
真に“志”は宿る  
“雷霸霆依”の理と共に」

静かに、けれど、力強く…霍琅は告げる。

そして、蓮需から渡された“倚天青煌”的鞘を左手に華琳に柄を差し出す。

「我が父母より授かりし、姓名は曹皓、真名は霍琅

我は此処に“刃”に誓う  
汝が“鞘”と成る事をつ！

汝が“心”を守り、依りて共に在り続ける事をつ！』

霍琅は誓いの言葉を告ぐ。

華琳は柄を掴み、応える。

「我が父母より授かりし、姓名は曹操、真名は華琳

私は此処に“鞘”に誓う

汝が“刃”と成る事をつ！

汝が共に在る限り、決して“心”を折らぬ事をつ！』

霍琅は鞘を、華琳は柄を、互いに引き合つ。

月光を受け“倚天青煌”の黒刃が蒼く耀ぐ。

『我等は此処に誓つ！

“時”が手を別つとも  
“季”が姿を違うとも  
現が“刻”に宿す“志”は絶えず滅びず在る事をつ！

辿る道は異なれど

至る道は唯一つ

天へと掲げるは“剣”たる我等が“魂魄”也つ！

我は汝が“刃”

我は汝が“鞘”

我等は共に“刃鞘”也つ！

我等は天に永久を謳うつ！

“雷霸霆依”の理と共に…“霸王”の道を往くと  
我が“刃鞘”に誓うつ！』

宣誓と共に“刃鞘”は結い合わさり、音を響かせた。

やがて  
二人は並び立つ

金に輝く陽  
白に煌く月

互いを照らし  
互いを支えて

重ね奏で響き合ひ

遙かなる  
天へと歸つ

翌日

霍琅は蓮需と共に旅立つ。

どれだけ互いが離れ様とも“刃鞘”は誓いに結ばれ、“心”は常に  
共に在る。

“雷霸霆依”

“刀鞘常在”

青玉と紫水晶の奏す琳琅は遙かな明けの光を言祝ぐ。

## 序章 参 雷覇達依（後書き）

### 設定解説

表名：倚天青煌

（いてんせい「けい」）

真名：麒麟蒼鶻

（きりじやうあ）

全長：凡そ三尺（90cm）

刃長：凡そ一尺（60cm）

柄長：凡そ八寸（24cm）

鞘長：凡そ一尺一寸（63cm）

鍔長：凡そ一寸（3cm）

身幅：一寸程（4cm）

（元幅4cm / 先幅2cm）

反り：約一寸弱（2.5cm）

重ね：棟6mm / 鎬4mm

刀拵え：

刃文の無い漆黒の刀身。

刃先から峰にかけて平地・鎬筋・鎬地は存在。  
また峰は棟卸し。

先反り、大鋒・ふくら枯れの薙刀直造。

柄拵え：

立鼓形、柄巻は黒の菱巻。

銀細工の唐鍔に縁、冑金に猿手、麒麟の飾目貫。

猿手には濃紺帯の手貫緒と青玉の雲金。

鞘拵え：

黒地に銀の蛭巻塗。

銀細工の口金物、芝曳。

鞘口は呑口。

また栗形・逆角は無し。

代わりに同位置に銀細工の筒金を装飾。

腰帯に差すだけの形。

基本的には“南海霸王”と変わりません。

雅信の時 “峯波洛佳”

(ほづさわらわ)

雍貴の時 “空淨佳華”

(くじょうじゅういか)

と読みます。

濮陽

豫州は魯郡に有る街。  
沛国郡から見て真北。

豫州の州領の北東に位置し兗州・徐州に隣接する為に人の往来も多い。

当然、問題も少なくない。

一番多いのは喧嘩。

些細な諍い事から乱闘まで内容は様々。  
故に昔から此処の県令には“武”に長けた者が就き、力で抑え込む傾向が強い。

だが、それは過去の話。

過去にない平穏が此処には存在している。

全ては今の県令の賜。

今の県令は“武”も有るが“知”にも長け、“人”も出来ていた。

その者は

姓名を夏侯勲、字を子文、真名を魅蘭。みらん

夏侯家の現当主。

膝に掛かる程に長い黒髪は鳥の濡れ羽の様に美しく、双眸は時の流れを思わせる濃い琥珀の様な橙色。

身に纏う赤青の衣は裡より溢れ出る“勇”と“優”を表す様に似合つております…

一層に“彼女”的持つ魅力を際立たせています。

そして

彼女には娘が居た。

双子の愛娘達。

共に顔立ちは母親似。

姉は首筋を隠す程度の短い母親譲りの黒髪に…  
父親譲りの紅色の瞳。

姓名を夏侯惇

真名を春蘭。

妹は背の中程まで有る長い父親譲りの青い髪に…  
母親譲りの橙色の瞳。

姓名を夏侯淵  
真名を秋蘭。

何処にでも居る姉妹の様にとても仲が良い一人。

天真爛漫な姉のじゃじゃ馬振りは街では有名であり、礼儀正しく人当たりの良い妹の苦労人振りも然り。

ただ、どちらも…

真つ直ぐな“勇”を宿し、聰明寛大な“優”を宿すと二人を知る者は口を揃えて言つたという。

とは言え、まだ一人は子供には違ひ無かつた。

当年取つて六歳。

好奇心旺盛なれば好き嫌いにも正直な年頃。

そんな一人に魅蘭は言つ。

「近く、貴女達の“主君”となる方が来ます  
粗相の無い様に礼儀作法をしつかり学ぶ様に…  
特に 春蘭は」

名指しされた春蘭が魅蘭の退室後に文句を言つたのは想像に易いだろづ。

子供は“特別”扱いされる事を望みながら…  
不利な意味の“特別”には不満を抱く。

本当に正直なものだ。

「…まつたく、母上は私が無作法者だと思つてゐるな  
私にも礼儀は有るつ！

それを母上にもしつかりと見せてやるつゝ…」

不貞腐れて文句を言つたと思えば憤慨し…  
逆に遣る氣を出す。

「そうだね、姉さん」

秋蘭は姉の様子を見ながら“流石は母上”と感心し、姉の扱い方を  
学ぶ。

それが一人の日常だった。

ある日の事

二人はお気に入りの茶店で大好きな御菓子を食べつつ談笑していた。

とは言え、別に子供の姿は彼女達だけではない。

少し歳上になるだろうが、十歳位の子供も多い。

それだけ、この街が平穏な証拠である。

「… そう言えば、秋蘭  
母上が戻られるのは  
明後日だつたな？」

「違うよ、姉さん  
予定では明日の昼  
早ければ今日の夕刻だよ」

「そ、そつだつたな」

“あははは…”と春蘭は誤魔化す様に笑い、秋蘭は“やれやれ…”と溜め息を吐いた。

魅蘭は兵を率い近くの邑へ現れた山賊を討伐する為、五日前に出陣していた。

勿論、普段なら一人の耳に仕事の内容が入る事は無いのだけれど、  
今回は違う。

山賊と言つても二千人近い集団だという事も有つて、街中でも大き  
く話題になり一人も知る事になった。

尤も、出陣後の話だが。

「ふん、高が山賊など私が纏めて一掃してやるッ！」

鼻息荒く言つ春蘭。

子供特有の“正義感”から来る物も有るだろつが…  
彼女の場合は母親の存在が大きいだろつ。

自慢の母親だから…

大好きな母親だから…

いつか、共に並び立つ事を夢見ても不思議ではない。

「その時は私も手伝つよ」

それは妹の秋蘭も同じ。

“姉妹だから”ではなく、純粹に抱く憧憬。  
それ程に彼女達の母親への畏敬は強い。

「当然だつ！

私達はいつも一緒…

それは戦場でも同じ事だ」

春蘭は笑顔で言つ。

秋蘭も笑顔で頷く。

端からも微笑ましい光景。

ただ、それが  
“子供の理想”で有つて、“世界の現実”ではないと彼女達はまだ  
知らない。

「よし、早速鍛練だつ！  
行くぞ、秋蘭つ！」

春蘭は勢い良く席を立ち、走りだそうとする。

だが、直ぐに秋蘭が春蘭の左手を掴み引き留める。

「会計が先だよ、姉さん  
それに、追加で頼んだ品がまだ来てないよ」

冷静に言葉を並べて春蘭を席に座らせる。

「もう…仕方無いな  
御菓子に罪は無いからな」

そつ言い訳する様に呟き、まだ皿に残っていた御菓子を摘まんで口  
に運ぶ。

「そうだね」

秋蘭は笑顔で同意しながらお茶の入った湯飲みを傾け口を潤す。

そして、この後の予定へと思考を巡らせる。

姉を暴走させない様に 野放しにしない様にと気を使いながら。

街外れの小川の畔。

若緑の絨毯の中、白詰草が白い花を咲かせている。

微ぐ風に頭を揺らす先には小さな空き地。

剥き出しの地面には草一本生えてはいない。

隣り合づ地面でも

片や、緑生い茂り…

片や、不毛の荒地…

まるで、現在の国の縮図を見ているかの様。

けれど、不毛の地に希望が無いわけではない。

「はあああつー」

気合いと共に振り抜かれる右の拳。

「 ふつ！」

小さく呼吸すると同時に、迫る拳を左の掌で受け止め外側へ弾く。

「はあっ！」

左手を振った反動を利用し身体を捻って右足を放つ。

だが、畳まれた左手により難無く防がれる。

が、それは折り込み済み。

次の動作　右足の蹴りを躊躇する様に左足で地面を蹴り右横へ飛ぶ。

案の定、左足は空振り。

その隙を狙う。

密着し、無防備な左腕へと右手を伸ばし掴む。そのまま前方へ腕を引き、軸足を左足で刈る

そう考えていた。

しかし、右手はあっさりと外されてしまう。

直ぐ様隙だらけの胸を狙い右の拳を放つ。

「 甘ーつー 」

だが、今度は逆に左の掌で受けられ右手を掴まれる。

そのまま懐へと弓き込み、身体を屈め右腕の下に肩を入れながら、縮めた身体を一気に伸ばされた。

「せーいやあーつー 」

「 くつー 」

“投げられる”と囁き自ら地面を蹴つて力に逆らわず飛び上がる。

此処で身体を捻り、体勢を整えて着地

そうしたいが、まだ未熟な身体は思考に伴わない。

「スンッ！

鈍い音が響いた。

「……痛う……」

受け身を取つてはいても、鈍い痛みが背中に走る。

「ふふんつ

まだまだだな、秋蘭つ

得意気な笑顔の春蘭。

見事に決まつた“投げ”は納得行く出来だつた様だ。

「姉さん、手加減してよ

秋蘭は痛む腰を左手で擦りながら立ち上がる。

「何を言つてゐ

戦場に手加減など無い

有るのは“強さ”だけだ

春蘭は秋蘭に対し諭す様にその言葉を向ける。

その通りでは有るが……

秋蘭は微妙に納得行かず、不満気に眉を顰める。

だが、何を言つても無駄と結論着けると溜め息を一つ吐いて、構え直す。

「……次は、負けないよ」

「ふつ、私も負けんつ！」

春蘭も構え

二人は再び組手を始める。

草花の芽は生えずとも…

此処に“芽”はしつかりと育っていた。

一頃り鍛練を遣り終えると二人は小川に足を浸けて、火照った身体を冷ます。

「……なあ、秋蘭……」

春蘭は蒼天を見上げながらぽつりと呟く。

「何、姉さん？」

秋蘭は右手を小川に入れて冷たさに浸る。

「……早く、この手に剣を取りたくないか？」

何処か物憂げな声で春蘭は問い掛ける。

「姉さんは剣なんだ…

私は『』の方が手にしつくりきたけど…」

秋蘭は掌で掬つた水を水面で遊ばせながら答える。

鍛練を始めたのは三ヶ月前になる。

六歳の誕生日を迎えた事で母・魅蘭直々の指導により“体術”的基礎を始めた。

魅蘭は“槍”を得意とし、その槍捌きには子供ですら見惚れてしまう程。

愛用の槍は義姉と親友から贈られた物だとか。

愛し気に手入れをする姿に嫉妬を覚えたのは余談。

先ず走り込みから始まり、腕立て伏せ、腹筋、倒立、その後柔軟を熟し準備運動とする。

鍛練で行う組手は…

打撃・蹴撃・投げに限定、関節や絞めは禁止。

“一人は未熟故“加減”が出来無いから”との魅蘭の言に春蘭は不満を覚えたが秋蘭は安堵した。

次第に組手が様に成ると、自然と“崩し”や“防ぎ”も身に付き…

“流れ”や“造り”が判る様になつてくれる。

それらを理解し、実戦にて体現出来る様になれば鍛練内容も充実してくる。

御互いの動きを読み合い、意図を隠し、態と悟らせ、時に誘い、時に騙し…

身体と共に思考を鍛える。

まあ、一人が其処の真意に気付くには、まだ早いが。

初めて武器に触れたのは、つい一週間前の事。

魅蘭が用意した武器は様々だった。

その中で…

春蘭は剣に  
秋蘭は弓に

それぞれ惹かれた。

“天賦の才”を持つて世に生まれとしてても…

“縁”無ければ芽生えず、“機”無ければ活かせず、“磨かれず、“志”無ければ道も無し。

少なくとも一人には…

“縁”と“努”が有つた。

蒼天を流れる白雲が春蘭の瞳に影を落とす。

「…でも、姉さん

母上も言つていた様に今は一步一歩進むしかないよ」

秋蘭は静かに言つ。

だが、秋蘭にも春蘭の抱く“焦燥感”は有る。

原因は二つ。

宦官の暴政と匪賊の横行。

予見される“乱世”に備え少しでも“力”が欲しい。

そう思つてゐる。

勿論、六歳の子供の何人が“それ”を見据えられるか聞かれれば：  
答えられる者は極僅か。

“天賦の才”と“環境”を生まれ持つた一握りだけ。

しかし、二人はその一握りの中に居る。

場所柄、街中に居るだけで商人や旅人の話から情勢は耳に入つてくる。

そして、才あるが故に世の行く末も見えた。

「……………判つてゐる

判つはてゐるが…」

春蘭は納得出来ず　否、“歯痒さ”が悔しい。

“まだ子供だから”といつ理由で何も出来無い事が。

抱く想いが真つ直ぐな故に知つた…もどかしさ。

「……早く一人前に……」

静かに春蘭は咳き…  
そつと右の掌を空に翳す。

陽光を浴びて赤く染まる。

赤い光ではなく  
肉と血の赤。

自分達が生きている証。  
身に宿る 生命の色。

「……血初め……」

春蘭は咳きながら  
魅蘭の言葉を思い返す。

“初めて“戦場”に立ち  
恐怖を知つて先ず一步

初めて“死”と向きて  
乗り越えたなら半人前

初めて手を血に染めて  
“兵”としては一人前

そして“命”を背負い  
“志”を持つて歩むが  
“武人”の往く道なり”

「……まだ、私達は最初の一歩にさえ届かない……」

同じ様に魅蘭の言葉を思い返していた秋蘭が呟く。

火照っていた筈の掌も…  
水の流れに熱を拐われた。

熱に当てられ、昂つていた思考も冷静さを取り戻す。

「…私達はまだ未熟だよ  
武器が有れば戦える訳じやないんだ…  
焦つて怪我でもしたら何の意味も無いんだから…ね」

そう言って、秋蘭は春蘭を見詰める。

蒼天を仰いでいた春蘭は、ゆっくりと顔を秋蘭へ向け見詰め返す。

互いの双眸に映り込むのは自分の姿。

その瞳は“鏡”と同じ。

“己”を映す“鏡”という名の自分の見る瞳。

“双子だから”なんて事は関係無い。

真摯に向き合えば心裡まで理解し合える。

そして、己自身が客観的に見て“どう”かも。

「……そうだな、秋蘭

今は焦つても仕方無いな」

「今はしつかり鍛練をして前に進もう、姉さん

「ああつー」

姉妹は笑顔で見合つ。

いつか共に並び立つ

その日を夢見て。

既に日課な鍛練を終えて、街中へ戻った一人。

“お茶でも飲んで帰る?”などと話していると

「ああーっ！」

春蘭姉様見付けたーっ！」

県令の御息女である春蘭を真名で呼ぶ者は街でも僅かしか居ない。

家族を除けば

魅蘭の直属の部下の一部と歳の変わらない“妹”だ。

振り返つて見れば

肩口程の長さに切り揃えた橙色の髪の少女が手を振りながら駆け寄つて来る。

右の目上で分けた前髪が小さく揺れている。

円らな中紅色の瞳は怒氣を孕み此方を見詰めていた。

その後ろにはよく似た顔に中黄色の瞳をした少女。髪は長さも色も同じだが、此方は前髪の分け目が左。

「理奈、玲奈

どうした？」

春蘭は空氣を読めないまま一人の少女に声を掛ける。

横で秋蘭が溜め息を吐いたのは言つまでもない。

「 “どうした？”じゃないですよーー！」

今日は一緒に遊んでくれる約束じゃないですかーー！」

そう怒鳴つて、大きく頬を膨らますのは中紅色の瞳の少女

理奈。

「……」

春蘭は田を閉じ腕を組んで此処数日を振り返る。

一昨日、そんな会話をした 様な気がする。

「ほーー、いつも行つてる“豚々軒”で 」

「……おおっ！

確か、焼豚麺を食べながら言つたなっ！」

店の名前と食べた品を介し田当への記憶へ至る。

流石の秋蘭も呆れて大きな溜め息を吐いた。

「……姉さん……」

「すまん、すまん  
すっかり忘れてた」

「酷いですよー…」

苦笑しながら頭を搔く春蘭だが悪気が無いし…  
“こういう人”だと知っているから赦してしまう。

「二人共、悪かつたね」

「いいですよ、秋蘭姉様  
春蘭姉様の事ですし」

春蘭の非を詫びる秋蘭。

それに対し“謝らないで”と言つ様に首を振つて答え苦笑する中黄  
色の瞳をした少女 玲奈。

理奈が姉、玲奈が妹。

容姿が似ているのも当然。彼女達も双子の姉妹。

春蘭達を“姉様”と呼び、慕つてている理由の一つには同じ双子という事もある。

他には

歳が一つしか違わない事や春蘭達が面倒見が良い事、母親同士が幼

馴染みな事、生まれは四人共に“沛県”だつたりする事等…

彼女達の間には言葉以上に不思議な“縁”が存在し、出逢いから育んだ“刻”が確かに“絆”を成した。

妥協案として夏侯家の庭で何かしようと決まり、近道していく四人。

「それじゃあ、今日の鍛練も春蘭姉様の方が勝ち越したんですね？」

「これで三日連続ですよっ！」

春蘭姉様、流石ですっ

「

「ふふん、当然だ

私は“姉”だからな」

上機嫌の春蘭。

理奈が上手く調子付かせた様にも見えるが…

実はこの二人は“いつも”こんな感じ。

共に双子の“姉”だという事から気が合つ。

序でに言えば、共に素直で春蘭は“乗せられ上手”、理奈は“乗せ上手”という相乗効果な関係。しかも“天然”の。

「秋蘭姉様、すみません」

「事実には違いない…  
気にしなくていいよ」

対して“妹”組。

姉の“手綱”を握る者同士苦労も似ている。

言動に悪気が無い事を知る故に氣苦労は絶えない。

お互いに“お姉ちゃん娘”なのは暗黙の了解。

「 ん？」

ねえ、春蘭姉様：

“あれ”、何でしょ？」

横道へと差し掛かった時、理奈が一方を指差し呟く。

春蘭、秋蘭、玲奈と其方へ視線を向ける。

すると、長屋の一角の前に屯している男達が居た。

「何だ奴等は？」

春蘭は眉を顰め呟く。

「……あまり、良い予感はしないよ」

秋蘭は場所を考慮に入れ、静かに“回避”を促す。

今、四人が居る通りは所謂“裏通り”になる。

勿論、他の場所に比べれば危険度は低い。  
しかし、“物騒”な事には変わりない。

避けて然るべきだ。

「よし、注意してやる」

「そうですね」

春蘭と理奈は、意氣揚々と“正義は我に有利つー”と言わんばかりの態度で男達の方へ歩き出す。

「姉さん」

「お姉ちやさん……」

秋蘭と玲奈は溜め息を吐き後を追う。

「玲奈、様子が妙なら理奈を連れて逃げる様にね」

「…姉様達は？」

「少し位なら時間を稼げるだろ？から…  
その間に警備の者を呼んで来て欲しい」

「…………判りました」

悩んだが、玲奈は秋蘭から言われた事に頷く。

（…さて、これで最低限の対処は出来るかな…）

秋蘭は一人の安全を優先に考え、事態を想定する。

“逃げるだけ”なら…  
自分達は大丈夫だと踏み。

「おい、貴様等つ！」

其処で何をしているつー…」

ただ、春蘭の“言い方”に気が回らなかつた事だけを秋蘭は即座に悔いた。

春蘭の言葉に男達が一斉に振り向く。

「何だ… ガキじやねえか」

「つたく…

「ビビりせんじやねえよ…」

「おら、ガキ共、散れ」

男達は手をヒラヒラさせ、 “シッ、シッ！” と春蘭達を追い払おうとする。

秋蘭は幸運だと思った。

男達の格好は街中では見る事が少ない物  
宛ら、猟師が山に入る時の様な装い。

裘褐の上に枯葉色の外套を着ているのが、目立たない様にする為な  
ら…

“賊”の可能性が高い。

自分達の手には負えないと判断する。

だが

「我が名は夏侯惇つ！  
県令・夏侯子文が一子つ！  
何一つ疚しい事が無いなら我が問い合わせよつ！」

春蘭が名乗りを上げた。

男達は一様に驚き  
不適な笑みを浮かべた。

「へええ…

“県令様”の御息女、か  
それはそれは…」

恭しく頭を下げる男。

その後ろに居る男達の顔はニヤニヤ笑っている。

春蘭と理奈は頭を下げた男の態度に油断していた。

「…秋蘭姉様…」

玲奈は気付いた様で秋蘭に小声で話し掛ける。

「…判つてゐな、玲奈…」

「…はい…」

秋蘭の静かな確認に玲奈は迷わず答える。

同時に秋蘭は春蘭の隣 理奈の前へと移動し、背に姿を隠す。

玲奈は春蘭の背中に隠れ、理奈の手を掴んでゆっくり後退しようとしました。

「 おつと、嬢ちゃん  
此方は“行き止まり”だ」

「 つ…?」

しかし、理奈と玲奈の肩を誰かが掴む。

「理奈つー、玲奈つー」

「くつ…」

その声に振り返った春蘭は驚き、一人の名を呼んだ。

秋蘭は予期せぬ“伏兵”の出現に唇を噛む。

「お頭あつ！」

「無事だつたんすねつー!？」

「馬鹿、騒ぐんじゃねえ  
しつかし、お前等なあ…

こんなガキ相手に隙見せて逃げられてどうする?  
警備の兵士呼ばれても見る一貫の終わりだぞ?」

そう言って男　頭らしい瘦せ顔の男は玲奈の襟首を掴んで春蘭達の前へと突き飛ばした。

「あやあつー?」

『玲奈つー!』

春蘭は反射的に腕を広げて玲奈を受け止めた。

秋蘭は男を睨み付ける。

「尤も…“交渉材料”には好都合みたいだがな」

一ヤリと嫌な笑みを浮かべ頭目の男は玲奈の首に左腕を回して持ち

上げた。

「…うく…」

理奈の表情が苦しみに歪み宙吊りから逃れ様と手足を暴れさせる。

「大人しくしねえかつ！」

打つ殺すぞつ！？

男は左腰に佩いた柳葉刀を右手で抜き切つ先を理奈の頬に突き付けた。

秋蘭は悩む。

このままでは自分達の為に魅蘭を危険に晒す事になる可能性が高い。

だからと書いて、理奈達を“犠牲”に巻き込む訳にはいかない。  
自分達は別にしても。

(どうする…  
どうすれば良い…)

最低限の“犠牲”に止め、目の前の賊を倒す為に何をすれば“最善”なのか…  
必死に思考を巡らす。

「……私と しろ」

秋蘭が悩む中、春蘭が口を開いた。

「何んだと？」

「私と“決闘”しろ…  
私が勝てば私達を解放…  
貴様が勝てば無駄な抵抗はしない  
煮るなり焼くなり…  
好きにするがいい」

春蘭は臆する事無く男達を前に“覚悟”を示す。

頭田の男は春蘭を見据え、口角を上げる。

「…いいだろう

おい、此奴に剣をやれ  
丸腰じや“不公平”だろ」

男の言葉に一人が腰に佩く柳葉刀を抜き、春蘭の前へ放り投げた。

（何が“不公平”だ…

体格差が有り、人質を取る奴の言つ台詞じゃない…）

秋蘭は唇を噛み締めながら胸中で毒付く。

男達のニヤけた顔を見れば春蘭を舐めている事など、一目瞭然だつた。

だから、好機だと悟る。

「“不公平”と言つなら、彼女を放して貰えます？  
それとも “人質”無しでは勝つ自信は無いと？」

秋蘭は“余裕”を顔に貼り男を“挑発”する。

“侮辱”と取られたなら、可能性は消える。

だが、秋蘭には“確信”が有つた。

この男は必ず此方の要求に逆らわないと。

「生意気なガキだ…  
ガキを放してやれ」

男は素直に理奈を解放し、此方へ返した。

確信の理由は“情け”でも“誇り”でもなく  
男の“余裕”と“慢心”。

自分で言つて置きながら、男は“子供”と侮つた。

それは何故か？

自分が優位に立つてると感じた故の“慢心”：

慢心したが故に“人質”を解放しても“問題無い”と“錯覚”し：

尚且つ、子供相手の決闘に“余裕”だと思い込んだ。

更に言えば…

逃げられたとしても人数で上回るから“包囲”すれば楽勝だと考えたから。

“人質”は“一人”よりも“四人”的方が良いと考え欲張つたから。

（けど、実際は逆…

僅かでも“隙”が生じれば此方の勝ち…）

理奈と玲奈の身の安全さえ確かに自分達の力量でも活路を見い出せる

此処まで秋蘭の思い描いた筋書き通り。

後は春蘭の決闘次第。

其方らにも秋蘭には勝算が見えていた。

春蘭は目の前に転がされた柳葉刀の柄を右手で掴む。

（…やっぱり、重いな…）

柳葉刀は子供が片手で持つには厳しい。

以前、魅蘭が用意していた剣は小振りな直剣。  
それも名の知れた鍛冶師の作品だった。

賊の持つ剣とは  
まるで“質”が違う。

（だが、扱えなくはない）

春蘭は左手を添えて持ち、正眼に構える。

「これはこれは…

流石は“県令様”的御息女と言つべきでしうか  
様になつておりますな」

頭目の男は揶揄う様に言い態とらしく感心して見せ、右手に持つ柳葉刀を右肩に担ぐ格好を取る。

「いつでもいいぜ？」

そして、それが“構え”と言つ様に開始を告げる。

「夏侯惇、参るつー！」

春蘭は正眼に構えたまま、右足で地面を蹴る。

それは何の捻りも無い  
真っ直ぐな突撃。

男は力任せに担ぐ柳葉刀を振り下ろし、春蘭の突きに横から当てる。

「フンッ！」

ガソッ！、と鈍い衝突音は剣よりも“鉄塊”的それを思わせた。

だが、春蘭の体勢は崩れず刃先が逸れただけ。直ぐ様後方へと飛び退き、距離を取る。

(「の程度なら……やれる）

春蘭は初撃を使い男の力を推し量つた。

体格差は有るが十分やれる範囲内に居る。ただ、長期戦は禁物。

持久力では不利になる。

「おおおーっ！」

春蘭は再度突撃。

男は軽く横に移動し避け、春蘭は左足を滑らせながら身体を捻り方 向転換。

また真っ直ぐに突撃する。

「おいおい、猪が居るぞ？」

早く“御山”に帰んだな

男は軽々と躲しながら言い春蘭は愚直に突っ込む。

その様子に賊共は哄笑。

理奈と玲奈は悔しそうに、心配そうに春蘭を呼ぶ。

だが、一人だけ

秋蘭だけは冷静だった。

何故なら

彼女は知っている。

彼女だけが知っている。

（まだまだ…

姉さんの有する“天賦”は此処から…

“思考の先”に在る）

秋蘭は静かに周囲の様子を気付かれない様に観察し、来たるべき“機”に備えて“路”を探す。

己が裡の感情を抑え…

仮面の様な“心配”を顔に貼り付け…

喧騒の中、唯一人…

静かな水面の様に全神経を研ぎ澄ませる。

姉の造り出す“機”を信じ活かし切る為に。

実際に単純な、愚直な突撃を繰り返す春蘭。

次第に男は顔に“飽き”が浮かび、苛立ちが覗く。

最初は子供だからと余裕で相手していたが、突撃するだけの単調な攻撃。

“少しさは考える”と口から出ても可笑しくない。

男は興醒めしていた。

「はああつ！」

何度もになるか忘れる程の春蘭の突撃。

男は右手に持った柳葉刀を横から当て、力任せに打ち飛ばそうと右腕を振った。

だが、柳葉刀は空を切る。

「 なつー？」

愚直に突っ込むだけだった春蘭は左の踵で地面を抉り一瞬だけ間を外した。

そして、右足を踏み込んで柳葉刀に勢いと体重を乗せ男の身体を突いた。

「…うぐ…う、あ、…」

息は詰まり、声は途切れ、男は苦痛に顔を歪める。

春蘭は両手に伝わってくる肉の感触と血の匂い。  
恐怖と嫌悪感に身体は震え出しそうになる。

無意識に足は後ろへ下がり切つ先が男の身体から抜け鮮血が滴つた。

男は膝から崩れず落ちる。

( よし、今だ! )

秋蘭は玲奈を見やり理奈を連れて逃がそつとした。

しかし

「くつ…やつてくれたな」

「 つー?」

ゆっくりと起き上がる男の声に秋蘭は焦った。

春蘭の切つ先は確かに男の腹を捕らえていた。

だが、男とて仮にも死線を乗り越えて生きてきた。

咄嗟に身を捩り、致命傷を避ける位は出来る。

序でに言えば、用心の為に裘褐の下に着けた皮の鎧が大分威力を殺していた。

春蘭に体重がもう少し有り脚力がもう少し強ければ、避ける事も難しかつた。

“子供”という事が戦局を不利にさせた。

「こ」の糞ガキ共が…

手前え等、皆殺しだつ！」

『へいっー』

男の声に賊達は一斉に腰の剣や斧を手に取った。

秋蘭は理奈と玲奈を傍らへ抱き寄せる。

「させらるものかつ！」

春蘭は持つていた柳葉刀を左右に振り回して牽制し、秋蘭達を背中に庇いながら壁際へと移動する。

一見、追い詰められた様に見えるが…

前後左右の全てを警戒するよりも前だけに集中出来る此方の方が“攻め易い”と春蘭と秋蘭は“遊び”から学び、知っていた。

そして“群”を散らすには“頭”を倒せば良い事も。

春蘭は柳葉刀を正眼に構え再び男に対峙する。

確かに状況は不利。

だが、幸いした事もある。

未熟だった一撃。

覚悟が足りなかつた一撃。

その一撃が春蘭を

“少女”を一人の“士”へ成長させた。

人を　　“生命”を断つ。

その感覚が春蘭の心に強く刻み込まれる。

恐怖は有る。

だが、怯まない。

今、三人の事を守れるのは自分だけだと判つてゐる。

（…そう、私は“姉”だ

“妹”達を守るのが私…

臆するな、心を奮い立て、ただ“敵”を倒す事だけに集中しろつー）

春蘭は“雑念”を捨てる。

「気に入らねえ目だな…

先ずは手前えからだつ！」

男は取り囮む者達には手を出すなと言つ様に一步だけ前に出て柳葉刀を振り上げ春蘭に襲い掛かつた。

春蘭は柳葉刀の刃に左手を添え横にして頭上に構え、男の一撃を受け止める。

ガギンッ！

鈍い金属音と同時に身体を重い衝撃が襲う。

春蘭は腕は曲げず膝を使い衝撃を和らげる。

男は逆上していくも春蘭を“子供”と侮つてゐる為か柳葉刀を右手のみで握り、振るつてゐる。

攻撃には体重が乗り切らず“押し”も弱い。

「はあああっ！」

春蘭は右足を一步踏み込み押し返す。

「くっ！？」

男は押し返された事に対し動搖した。

自業自得とは言え…

己の“慢心”が“油断”を生んでいふと考えられるのならば、春蘭  
達は文字通り“子供扱い”だろう。

だが、現実は違う。

彼は過ちに気付かれない。

故に思考は乱れ、集中力は散漫となり、剣は鈍る。

男は腕力で無理矢理押さえ付け様とするが春蘭は左腕だけを曲げて  
力を往なす。

男の柳葉刀は刃腹を滑り、その体勢を崩す。

「しまつ

」

「はああああああつ…………」

「…

がら空きとなつた男の胴を横薙ぎにしようと、春蘭が踏み込んだ。

その瞬間

「動くんじゃねえつ！」

“背後”からの声に春蘭は動きを止めた。

柳葉刀の刃は男の着ていた裘褐を裂き、皮の鎧を少し斬つていた。

流石に胴を両断するまでは行かないだろうが……止まつていなければ間違ひ無く男は死んでいた。

「……卑怯者め……」

怒りに声を震わせたのは、春蘭ではなく秋蘭。

理奈と玲奈、そして秋蘭は腕を掴まれ、喉元には刃が突き付けられている。

取り囲んでいた筈の賊達の数人が独断により秋蘭達を“人質”に取つていた。

賊達は全員が一人の様子に見入つてゐるだらうと思い秋蘭は春蘭に武器を渡した男を“突破口”として定め隙を窺つていた。

結果、他の者達への警戒が疎かになり“機”を掴み損ねた。

春蘭は静かに息を吐き出し柳葉刀を手放す。

ガシャンッ！と音を立て地面に転がつた刃には赤い“一度”の痕跡が残る。

男は自分の腹の傷を触り、右手に付いた血を見て肩を震わせる。

「山戯んじやえねえつ！

この糞ガキがああつ！……！」

男は血の付いた右手を握り春蘭の左頬を殴つた。

ドゴッ！と鈍い音と共に春蘭は倒れる。

「姉さんつ！」

『姉様っ！』

秋蘭達は声を上げるが腕を掴まれ動く事が出来ない。

「…ぐあっ…」

痛みに春蘭の口から苦悶のは声が漏れる。

「手前えつ！

誰の身体に傷付けたんだと思つてんだつ！？  
言つてみろっ！？」

男は怒りに任せ、倒れ込む春蘭を力任せに蹴り回す。

男自身、その怒りが何から来るのが理解していない。

いや、本能的に判つているのは間違ひ無い。

それは“憤怒”ではなく、“恐怖”による行動。

自身の生命を脅かす春蘭を“排除”しようとしているだけに過ぎなかつた。

「うぐっ…、う、あ、っ…、がはっ！、ぐあっ！

男の右足の爪先が、甲が、踵が容赦無く身体を叩く。

激しい痛み。

秋蘭との鍛練でも味わった事の無い、響く鈍い痛み。

瞬間的な痛みではなくて、じわりと身体を侵していく様な嫌な広がり方の痛み。

（…あぐつ…い、痛い…）

蹴られ、踏まれ、突かれ、身体は痛みに沈む。

感覚が徐々に薄れ始めると意識も朦朧とする。

遠くの方で秋蘭達が自分を呼んでいる気がするけれど身体は動かない。

確かめる事さえ出来無い。

ぼんやりと脳裏を過るのは魅蘭の笑顔と怒り顔。

秋蘭達、“妹”達の顔。

そして

見た事の無い筈の父の顔。

(……父……上……?)

秋蘭と同じ青い髪……  
自分と同じ紅い瞳……

顔は精悍と言つよう温厚な知的な印象で……

けれど“武人”と比べても遜色の無い凜々しさ……

何より、魅蘭と同じ……  
優しい眼差し……

(……父上……)

魅蘭よりも大きな掌が頭を優しく撫でる。

たつたそれだけの事なのに身も心も温かくなる。

とても心地の好い感覚。

しかし、その掌は離れる。

表情は変わらず、穏やかに微笑んでいる。

ただ、その眼差しには強い“意志”が宿り……

“別れ”だと悟った。

離れたくないと思った。

一緒に居たいと思った。

けれど、それは叶わず……

世界は白く霞み、解けた。

左腕に響いた痛みに意識が呼び起こされる。

「弱ええ奴は大人しく俺に従つてろつー！」

男の右足が放たれる。

だが、春蘭に痛みは無い。

「なつ！？」

男は驚愕する。

されるがままだつた春蘭が男の右足を両手で捕まえて抱え込んでいた。

「…………」

春蘭は小さく呟く。

ゆつくりと男を見上げた瞳には鋭い輝きが宿る。

「な、何だよつー?」

男は気圧された。

それは、六歳の“少女”の眼差しではなく  
“覚悟”を持つ“戦士”的眼差しだった。

春蘭の心に父の声が

別れ際に自分へ向けられた最初で最後の言葉が響く。

……大切なものを守れ……

麻痺していた四肢の感覚が戻つてくる。

闘争本能に火が点く。

“熱”が身体を動かす。

「……私の……妹”達に…手を…出すなあああつ！」

春蘭は抱えた男の右足」と身体を回転させる。

「キツ!、と鈍い音が鳴りブヂツ!、と何かが千切れ男の右足首は機能を失う。

「ぐあ、あ、あ、あ、あつ!？」

『か、頭つ!?』

男は倒れ、右足を抱え込みのたつ。

賊達は秋蘭達から離れ男の回りに集まる。

僅かな“隙”が生じた。

「秋蘭つ!、逃げろつ!」

これが最後の好機だと思い春蘭は身体を起こしながら秋蘭に向け叫ぶ。

茫然としていた秋蘭は直ぐ我に返り理奈達の手を取り駆け出そうとする。

「逃がすかっ！」

しかし、賊も“切り札”を簡単には手放さない。

秋蘭達の逃げ道を塞ぐ様に立ちはだかる。

「殺せつ！、殺せえつ！  
県令なんて関係無えつ！  
逆らう奴は全て殺せつ！  
住人全て殺し死くせつ！  
」

男は叫ぶ。

感情に任せ。

賊達は従う。

判り易い命令に。

“獸”以下の“狂氣”へと身を任せ、気の赴くままに凶刃を振るつ。

それは、彼等の“日常”と何ら変わらない事。

故に躊躇いは微塵もない。

「やつは… セないつ…」

春蘭は最後の力を振り絞り秋蘭達の前に立つて庇う。

広げた両腕は支持する事もやつとの状態。

両膝はガクガクと震えて、気を抜けば今にも崩れ落ち倒れてしまいそうだ。

余力なんて無い。

今の自分に出来る事…

それは、唯一つ。

氣力だけで支え  
文字通り“盾”になる。

「るせえつ！、死ねつ！」

賊の一人が春蘭の頭に向け手斧を振り下ろした。

春蘭は視界の中、迫り来る凶刃を目を閉じる事も無く見据え、微動だにしない。

“出来無い”とも言えるが田を閉じる位は可能。しかし、田を逸らせば心も逸れてしまいそうだった。

だから、身も心も不動。

“妹”達を守る為に生きた的になつて時間を稼ぐ。

それが今の春蘭に残された唯一の戦い方。

(さよなら )

“死”を覚悟する。

凶刃は春蘭の眼前に迫り、陽光を反射した。

「 生命を諦めないで」

視界の中から凶刃は消え、白く染まつた。

否、春蘭の田の前には“白い髪”をした“誰か”が立つて居た。

「 なつ！？」

「 誰だつ、手前えはつ！？」

賊徒の斧を右手で受け止め春蘭を背に庇つ者。

身長は春蘭達よりも低く、声色から察するに“少女”だろつか。

秋蘭より少しだけ短い位の雪の様な純白な髪が小さく揺れている。

「 え?、名ですか?  
名は…ですね…え…と…」

“少女”は生真面目に賊の問いに考え込む。

春蘭の視界の端に別の賊が近付いてきたのが映る。  
しかし、疲弊からなのか…声が出ない。

“少女”を捕まえ様と手が伸びた。

が、その手は何も掴む事が出来ず、賊徒の身体が宙を舞つた。

ドサッ!、と音を立て地に落下した賊徒はピクリとも動かない。

「申し訳有りません

一身上の都合により名乗る事は出来ません」

“少女”は微笑み、丁寧な言葉遣いで答えた。

同時に對峙していた賊徒が膝から崩れ落ちる。

此方も微動だにしない。

どうやら一人共、氣絶しているらしい。

何方らも一瞬の出来事。

春蘭達や賊達は勿論、

当の本人達でさえ理解すら出来ず、意識を手放した事だらう。

加えて

“何時、何処から現れ”、“何故、此処にいるのか”全く判らない。

春蘭が秋蘭の方を見れば取り囲んでいた筈の賊達が三人の回りに倒れていた。

秋蘭達も、ただ茫然とし、“少女”を見詰める。

当然ながら、賊達には訳が判らない。

そんな状態で“平静”など到底不可能といつもの。

そして

生まれた“静寂”の間にも“少女”は動き続ける。

棒立ちになつてゐる賊達が次々と畠を舞い、崩れ落ち地に伏していつた。

“少女”は舞う。

風が落葉と戯れるかの様に軽やかに、緩やかに。

その光景は正に“舞踊”を見ている様だった。

過去に“剣舞”を見た事は有つたが、まるで比べ物にならない。

ただただ、春蘭は魅入る。

初めて知つた“暴力”：

初めて知つた“恐怖”：

初めて知つた“生死”：

初めて知つた“無力”：

故に焦がれる。  
故に惹かれる。

故に見惚れ、魅了される。

“少女”の“武”に。

「な、何なんだよ?...  
一体...何だつてんだよ...」

頭田の男は茫然と呟く。

我が“兵”が次から次へと倒されている。

それも、まだ幼い“少女”たつた一人によつて。

気付けば、自分以外は既に戦闘不能な状態。

男の視界の中を“少女”がゆっくりと近づく。

「ひつ く、来るなつ！

此方に来たら殺すぞつ！」

尻餅を着いた格好のままで男は“威嚇”をしながら、必死に右腕を振り、左腕で身体を引き摺つて後退る。

あまりにも不様な姿。

他人の事など考えもしない愚か者は“獸以下”に落ち“恐怖”に怯える。

“弱肉強食”を謳いながら自身は“強者”だと溺れ、目の前の“強者”によつて“弱者”に落とされる事を認め様ともしない。

何処までも傲慢に。

けれど、それは春蘭達には“戒め”として映る。

自分の力量を過信した事…自分の立場を軽視した事…

それにより自分の言動から血の首を絞める結果へと繋がった事…

“傲慢さ”を持つていた事は同じ。

卷之三

“少女”が来なければ今頃四人の命は散ってしまった。  
倒れている賊達の様に。

「さあ…貴男で最後です」

212

“少女”は男を壁際へ追い詰めて告げる。“弱肉強食”的の理の如に。

# 逃げ場を失つた男。

だが、その目が傍らに在る剣を捕えた。  
右手を伸ばし掴み取る。

「し、死ねええーつ！！！！！」

## 男の最後の抵抗。

右腕を精一杯に伸ばし剣を“少女”に向け突き出す。

しかし、刃は空を突く。

男の右手首には“少女”的左手が添えられていた。

その手を見た瞬間

トンッ…と軽い衝撃。

刹那、意識が薄れる。

崩れ落ちる男の目が最後に見たのは  
折れ曲がった自分の右足。

男は僅かに残る意識の中で自分を“弱者”にしたのは“白髪”ではなく

自分が“子供”だと侮った“黒髪”的少女だった事を漸く理解した。

“少女”は慣れた手付きで賊達を近場に有つた荒縄で縛り上げた。

氣絶している様子から見て起きるとは思えなかつたが念には念を入れてだらう。

その間、秋蘭達は負傷した春蘭を見て泣きじやぐる。

当の春蘭は疲労と痛みから身体を動かすのも厳しく、また腫れた左頬と蹴られた打撲後が熱を帯び、意識が朦朧とする。

春蘭は宥める事も出来ず、静かに瞼を閉じた。

すると、春蘭の頭が優しく持ち上げられた。  
次いで、後頭部に柔らかな感触を感じる。

何事かと瞼を開いて見れば“少女”の顔が近くに在り自分を見下ろしていた。

“どうやら“膝枕”をされている様だと理解する。

「楽にしていて下さいね」

そう言つと“少女”の掌が腫れた左頬に触れる。

“痛い”筈なのだが感覚が麻痺して判らない。

ただ

“少女”の掌は温かく…  
まるで“陽溜まり”の様にぽかぽかと心地好い。

春蘭は温もりに誘われるがままに意識を手放した。

「…ね、姉さん?…」

その様子に秋蘭は恐る恐る声を掛ける。

「大丈夫、眠つただけです

安心して下さい

そう“少女”は秋蘭に答え優しく微笑む。

春蘭を見れば、胸が上下し穏やかな寝息を立てているのが直ぐに判つた。

（…良かつた

顔の腫れも引いた様…で……“引いた”つ…？）

赤く晴れ上がっていた筈の春蘭の左頬。  
だが、今はその痕跡らしき痕は見当たらない。

春蘭の下腹部に触れている“少女”的右手へと視線を向ければ  
掌が淡く輝いている。

「あの…それは一体…」

秋蘭は思わず指差しながら“少女”に訊ねた。

「“これ”ですか？  
つい先日、旅の医師の方に教えて頂いた“五斗米道”といつ“医術  
”です」

「「J、「Jビベニビツ?」

「いえ、そうではなくて、“「Jヒトウエイドー”です  
少し発音が特殊らしいので慣れないと難しいかと」

「そ、そうですか…」

見た目は完全に年下なのに纏う雰囲気からか  
つい敬語で話す秋蘭。

発音云々の事は脇に置き、春蘭の様子を窺う。

“少女”に膝枕されて眠る寝顔は安らか。

春蘭は大丈夫。

何故か、理由は判らないが秋蘭にはそう思えた。

「理奈、玲奈

至急、警備の者を頼む」

『あ はいっー』

秋蘭の両脇から恐々ながら興味津々に覗き込んでいた一人は拗つて  
返事をすると駆け出して行つた。

暫くすると、『少女』の掌の輝きが消えた。

小さく息を吐く、『少女』の額には汗が滲む。

びつやうり賊達を相手にした立ち回りは疲れるひじへゆつへり深呼吸する。

息が整うと秋蘭を見た。

「私の力量では応急措置が精一杯ですので…  
起きられても数日は安静にする様に伝えて下さー」

「判りました

姉と家族に代わって御礼を申し上げます  
私達の命を救つて下さり、治療までして頂き、本当にありがとうございました

秋蘭は深々と頭を下げる。

「どうか、家の方に御越し頂けませんか?  
御持て成しさせて頂きたいのですが…」

ゆつやうりと頭を上げると、秋蘭は『少女』に訊ねた。

しかし、『少女』の表情に“困惑”が浮かぶ。

「折角の御好意ですが…

私は“言い付け”を破つて“此処”に居ますので…」

そつ言つて頭を下げる。

「いえ、事情が有るのなら無理にとは言つません  
他に何か出来る事は?」

秋蘭は“少女”に訊ねる。

「御気持ちだけで……あ

出来れば、私が此処に居た事は内緒にして下さい」

断りつした“少女”だが、“名案”とばかりに笑顔でそつ言つた。

「貴女がそう望むのなら

「ありがとうございます」

秋蘭が笑顔で承諾すると、“少女”は春蘭の上半身をそつと起こし  
秋蘭に預け、足早にその場を離れた。

その後

理奈達が呼んで来た兵士達により賊達を連行された。

秋蘭は一人に手伝つて貰いながら春蘭を背負つて家に帰つた。

夕方には魅蘭も戻る。

また、魅蘭の腹心でもある一人の母親・那奈ななの頼みも有つて家に泊まる事になつた。

秋蘭は一人にも口止めし、大丈夫だと思つたが…

翌日、肝心の春蘭に事情を話し忘れた事を後悔する。

翌日

結局、春蘭は眠つたままで今朝まで目を覚まさず…  
起きてみれば、“普通に”元気だつた。

「本当に大丈夫ですか？」

「ああ、この通りだつ！」

理奈に心配そうに訊かれ、春蘭は庭に有る大樹の枝に両手を掛け、ぶら下がつて見せる。

理奈は“流石ですっ！”と無邪気に拍手する。

秋蘭と玲奈は半ば呆れて、溜め息を吐いた。尤も、二人が安堵したのは言つまでもない。

暫くすると、侍女が遣つて来て魅蘭達が呼んでいると伝えられた。

四人は

主に春蘭と理奈だが

身形を整え、母親達が待つ広間へと向かつた。

「失礼致します

夏侯惇以下三名、御呼びにより参りました」

春蘭を筆頭に四人は丁寧に挨拶して入室する。

「四人共、此方へ」

そう言つたのは腰まで有る理奈達と同じ橙色の髪に、若草色の瞳の女性。

姓名は韓快、字は公薬。

真名は那奈。

理奈達の母であり、魅蘭の親友で姉妹同然の腹心。

那奈に言われ四人は彼女の隣に順に並ぶ。

ただ、視線は自然と一点に向けられていた。

魅蘭の対面に立つ女性。

碧眼が此方に気付き優しく細められる。

思わず照れてしまい四人は俯いてしまう。

「蓮需様、此方側の一人が私の娘達で…

その隣は那奈の娘達です」

魅蘭が“様”付けの敬語で話す様子に身分の高い方と四人は判断する。

「四人共母親似だし将来は美人に成るわね」

「そう言いながら春蘭達へと向き直る。

「私は曹昊、字は安寿

曹家の嫡子、曹朋の妻よ

此方は私達の子供で」

蓮需が身体を動かすと陰になつて見えなかつた存在が露になる。

雪の様な白髪の“少女”が静かに立つていた。

「ああああーつーーー！」

蓮需の言葉より早く春蘭は驚き叫んだ。

口をパクパクさせながら、その者を指差す。

隣の秋蘭は過失に気付き、右手で顔を覆つて俯く。

理奈と玲奈は顔を見合せ、“どうするの？”と小声で相談する。

「春蘭…貴女、霍娘様の事を知つてているの？」

「知つてゐるも何も…

母上も聞いているでしよう

昨日、私達を賊から助けて下さつた方ですっ！」

魅蘭の問われ、興奮気味に春蘭は答えた。

“少女”に対し大人三人の視線が注がれる。

「昨日は私達を助けて頂きありがとうございます  
私の事も治療して頂いたと秋蘭から聞きました」

春蘭は姿勢を正し、深々と頭を下げた。

彼女に悪気は無い。

心の底から感謝している。

ただ…

彼女は今の場の“空気”を読めていない。

「……霍娘、どういう事が説明しなさい」

蓮需の纏う霧因気が冷淡に変わった事に魅蘭と那奈が息を飲んだ。

霍娘は小さく息を吐く。

蓮需を見て口を開いた。

蓮需達は此処に来る途中に賊討伐に出でていた魅蘭達に会つて霍娘だけが先に街へ向かう事になつた。

その際、宿で大人しく待つ様にと言い付けられた。

ただ宿の外から喧嘩の声が聞こえ、出で見ると殺氣を撒き散らす男達が居て…と霍娘は説明した。

霍娘には“非”が無い様に思える。

しかし、蓮需の表情は未だ厳しいままだった。

「…私が何を言いたいか…

霍娘、判るわね？」

「はい…

己の行動に対し“責任”を“放棄”した事…  
深く、反省しています

そう霍娘は答える。

蓮需の怒りの理由は行動を隠そうとした事に対して。

恥じる事が無いなら堂々としていると言いたいのだ。

だから、霍娘は蓮需に頭を下げはしない。

隠していた事は反省しても行動に後悔は無い。

「霍娘、親子の仲と言えどこれは“命令違反”…

何一つも弁解しないの?」

「命に背いた事は偽り無い確かに事実です

しかし、命に従うだけでは人形も同然です  
私は私の考えによる行動に恥じる事も、悔いる事も、何一つ有りません

霍娘は臆する事無く蓮需を真っ直ぐに見詰める。

暫し、沈黙が場を支配し、春蘭達は固唾を飲む。

すると、不意に蓮需の纏つ霧囲気が和らいだ。

「なら、罰として帰つたら芹華の手伝いをする事いいわね？」

「はい、判りました」

蓮需に合わせ霍娘も笑顔を浮かべて答える。

「そ、自己紹介しなさい」

蓮需の言葉に従い、霍娘は春蘭達に向き姿勢を正す。

「姓は曹、名は皓…  
真名を霍娘といいます」

「霍娘様、失礼ですが…

私の娘達にまで真名を呼ぶ事を許されるのですか？」

そう訊ね返す那奈に霍娘は笑顔で頷く。

「勿論、魅蘭様や那奈様の娘だからでは有りません  
彼女達自身を信頼出来ると私が思つたからです」

霍娘は春蘭達を順に見詰め那奈に視線を戻す。

「それに…“家族”となるのなら尚更です」

そう言い霍娘は嬉しそうに顔を綻ばす。

「霍娘様、娘達は“家族”ではなく“家臣”です  
霍娘様とは“主従”的関係になりますので…」

「いいえ、魅蘭様

私達の“家族”です

母上や御母様達、貴女達がそうで在る様に

霍娘は隣の蓮需を見る。

それだけで、言いたい事は自然と伝わる。

「貴方達の関係は貴方達で築いて行くものよ  
私達に気を使う必要は無いのだから好きになさい」

蓮需は片手を閉じて笑顔でそう言った。

未来へ共に歩むからこそ、“関係”の枠に縛られない“絆”を結ぶ。  
“家族”で、“主従”で、“朋友”でも在る…  
そんな大切な“絆”を。

蓮需達、母親組と別れると春蘭達は霍娘を案内し庭の東屋へ場所を  
移すと四人は霍娘の前に並んだ。

「姓は夏侯、名は惇  
真名は春蘭です  
春蘭と呼んで下さい  
此方は私の双子の妹で…」

「姓は夏侯、名は淵  
真名は秋蘭と申します  
秋蘭と御呼び下さい」

一人は揃つて一礼する。

「私は姓は韓、名は浩  
真名は理奈です

で、此方が双子の妹の」

「姓は韓、名は当

真名は玲奈とあります  
宜しく御願いします」

此方も同じ様に一礼。

同じ血の繋がりは無くとも“姉妹”だと感じる。

「霍琅様、私の配慮が行き届かなかつた為に御叱りを受けてしまい…  
本当に申し訳有りません」

秋蘭は深く頭を下げる。

「いいえ、あれは私の心に“疚しさ”が有つた為…  
貴女が気にする事など何も有りませんよ」

「しかし」

「それに母上が怒つておられたのは事を“隠蔽”しようとした  
からです

私が正直に遭つた事を話し貴女達の事を最後まで送り届けていたなら…

叱られませんでしたよ」

霍娘は秋蘭の右手を両手で優しく握る。

「生命は唯一つ…

今、こうして触れ合う手に温もりを感じられる事…  
それは当たり前の様ですが生命とは脆く、儚く、壊れ易いもの…  
だから、貴女達をこうして感じられる事は尊く…  
本当に喜ばしい事です」

そつと瞼を閉じ、微笑みを浮かべる霍娘。

その言葉の意味を春蘭達は子供ながらに理解する。

いつも同じ様に四人一緒に笑つて居られる事…

それが何れ程幸せな事で、何れ程難しい世の中なのか知つていたのに…

“守り保たれている常”を当然の事だと思つていた。

けれど、現実は違つ。

私達の生命は常に“死”と隣り合つていて…  
何時、誰かが欠けても何も不思議ではない。

それを理解してしまって、身も心も“恐怖”に怯えて震え出し、涙が溢れる。

「泣く事も、怖れる事も、恥じでは有りません…  
在るが僕、感じじる僕に…」

霍娘が秋蘭を抱き締める。

秋蘭は霍娘にしがみ付き、春蘭も、理奈も、玲奈も…霍娘に縋り泣いた。

誰の目を気にするでもなく素直な僕の素顔で。

霍娘は穏やかに、静かに、優しく全てを受け止める。

降り頻る“雨”は軽て止み大地を潤す。

幼い心を濡らした“雨”も軽て“勇”と“優”といつ花を咲かせる“種”を育む“恵”と成る。

“雨”を糧に、“種”達は少しだけ成長した。

その様子を離れた場所から見守る影が三つ、柱に身を隠していた。

「……“王の器”ですね……」

三つの影の内の一つ  
那奈が静かに呟く。

「“王の器”には二種類の気質が有るわ

一つは調和を以て統治する“徳”高き“王道”……

一つは武勇を以て統治する“誇”高き“霸道”……

霍琅は“王道”的気質で、華琳は“霸道”的気質ね」

「夫婦共に“王の器”……

そして、一対にして両道を極め天に至る……  
まるで御伽噺ですね」

蓮需の言葉に魅蘭は小さく溜め息を吐く。

「……あの娘達も大変ね……」

他人事の様に吐く魅蘭。

“あれ”で見たままの姿の“少女”ならば“主従”で済むのだろう  
が……

実は“彼”なのだから後々“面白い事”に  
いや、“困った事”になる可能性は少なくない。

「華琳てば、大変ね～」

同情する様な台詞とは逆に蓮需の表情は樂しきだ。

それは一人を繋ぐ“絆”を知つてゐるからの余裕。寧ろ、並大抵の“障害”は一人の想いをより強く燃え上がらせるだけ。

そんな蓮需の様子に魅蘭と那奈は小さく苦笑した。

「それにしても…」

じつ…と霍琅を見詰める。

懐の深さといふか…

底無しの魅力といふか…

「…良く似ていますね…」

嬉しそうに魅蘭が呟く。

「ええ、本当に…」

那奈も穏やかに微笑む。

「鈍感な所まで似なくても良かつたんだけどね~」

そつ言つて苦笑する蓮需。

魅蘭と那奈は顔を見合せ、そつと笑う。

蓮需は亡き夫である雍貴を霍琅に重ねるが…  
魅蘭達が思い浮かべたのは彼とは違つた。

蓮需に気取らぬ様に見詰め目を細める。

(違いますよ“姉上”…)

(似てこるのは他の誰でも有りません…)

(（…“貴女”にですよ…））

一人の心の声は重なる。

かつて、自分達にも娘達と同じ様に“運命の出逢い”が有つた。

その人は自分達の手を取り笑いながら言つた。

“一人で立てないのなら  
私が貴女の手を取つて  
立ち上がらせる

だから、私が立てない  
時は貴女が手を取つて  
私を立ち上がらせて

互いに繋いだ手と心で  
支え合ひ歩みましょう”

その時から私達は“姉”の背中を見詰め、傍らに在り共に歩み続ける。

そして、“次代”もまた、永く絶える事無き“絆”を此処に結ぶ。

“血”は遙かな時を遡り、過去へと繋がり…

“命”は悠かな時を越え、未来へと繋がり…

“絆”は果て無き時の中、時を繋ぎ 現に在る。

四つの人影が曹家の廊下を並んで歩く。

「いい加減機嫌を直したらどうなんだ姉者？」

首筋を隠す程度の青い髪を後ろに流し、右側だけ前に下ろした髪型の少女。

橙の瞳は“やれやれ…”と気苦労を滲ませる。

「そうです！

春蘭姉様も姉さんも此處は曹家なのですよ？

しつかりして下さいっ！

気持ちは判りますけど…」

背の中程の長さの橙の髪を右横で纏め、前髪は左側を下ろした髪型の少女。

黄中色の瞳は、怒っていたかと思えば哀しそうに曇る。

「うう…  
判つてゐるナゾ…」

肩に掛かる程度の橙の髪を後ろへ上げて髪帶で止めた髪型の少女。  
中紅色の瞳は涙で潤む。

「五年だぞ、五年つ！」

今になるまで私達には何も知らされていなかつたのだ簡単に納得出来るかつ！」

そして

美しい長い黒髪を後ろへと流した髪型の少女。紅の瞳は憤りと悔しさから目尻に涙を浮かべる。

あの日から六年

春蘭と秋蘭は十一歳に成り理奈と玲奈は十一歳に。

四人は唯一人の“主君”に霍娘を選んだ、あの日から鍛錬に勉学にと励んだ。

霍娘に仕え、支え…

その傍らに在り、共に歩む事を夢見て。

漸く、その時が来た。

だが、その霍娘は五年前に家督を放棄し、蓮需と共に旅へと出でいた。

知られたのは洛陽に着く直前の事。

護衛役の兵が顔見知りではなかつたから踏み止まれたけれど顔見知りだつたら…間違ひ無く殴つていた。

悪い冗談にしか聞こえず、我が耳を疑つた。

しかし、既に洛陽に着き、曹家に先触れも出でていた。

我が儘を言い、引き返せる状況では無かつた。

渋面のまま侍女に案内され中庭へと出る。

四人の視界には静かに佇み蒼天を見上げる者。

風に揺れる金色の長い髪が陽光を浴びて煌めく。

自分達より小さい筈の背はとても大きく映り…

思わず四人は見惚れた。

風と戯れていた髪が静かに納まると時が動く。

その背中がゆっくりと回り“彼女”は振り向いた。

強い輝きを放つ青玉の瞳が此方を見詰める。

「遠路、御苦労様

我が名は曹操

貴女達は乱世の“未来”に何を志し、何を想つ?」

一言で心を射抜かれた。

唯一だつた筈の“主君”が“双君”となる。

一つの双花は誓う。

“陽”と“月”に寄り添い在り続ける事を  
永久に、永久に。

星の巡りは不变なれど  
人の巡りは常変なれば  
逢別は偶も必も故然り

巡り逢いも巡り別れも  
変の波の中に常に在り  
人の意介さぬ自然の理

されど其が会離なれば  
人の意は及び道現れて  
縁と繋がりて絆と至る

人会い道重なり交わり  
志集いて史は紡がれん

如何に素晴らしい史も  
過去無くして始まらず

其は世を導く始端なり

冀州勃海郡

南皮から西北西に位置する楽成近くの山岳。

凡そ場に似つかわしくない剣戟が響く。

金色の甲冑に身を包む兵が隊列を成し  
掲げられた“袁”の旗。

金色が蒼天に揺れる。

「槍隊は壁を作つて後退、弓隊は敵陣中央に済射つ！  
少しでも敵兵数を減らして追い詰めますっ！」

肩口に届く位の長さに切り揃えた青み掛かつた黒髪に赤橙の瞳をし  
た女性が隊に指示を飛ばす。

姓名は顏良、字は季柔。  
真名は斗詩。

冀州は勃海郡の太守である袁紹に仕える武官。

まだ仕官して間も無いが、千人隊の隊長に任命されるだけの実力を  
持っていた。

そんな彼女は現在

主君である袁紹の命により“賊”討伐の真っ最中。

とは言え、“賊”的兵数は三百程度。

対して、此方は約二千。

質を無視しても圧勝出来る兵力差である。

「が、顔良様つ！」

左翼、突破されました！

朱靈將軍の隊は瓦解！

苟或隊は援護しながら後退するとの事！

如何致しますかつ！？」

慌てて来た伝令兵が戦況が不利な事を報告した。

「ええつ！？」

朱靈將軍が瓦解つ！？」

斗詩は戸惑つた。

“賊”を相手に袁紹陣でも指折りの猛将である將軍が瓦解するなど  
有つてはならない事だ。

「何が遇つたんですか？」

斗詩は一息吐き、伝令兵に冷静に訊ねた。

「はつ、それが…

伏兵に奇襲されたと…」

言い難そうに答える。

「伏兵の奇襲…」

左手を右肘の下に入れ支え右手で顎を触りながら呟き斗詩は考える。

伏兵の奇襲で態勢を崩され被害が出るのは判る。

しかし、そんな事は一時の混乱に過ぎない。

将軍ならば直ぐ様立て直し反撃に出るだらう。

だが、実際には瓦解した。

考えられるのは一つ。

将軍の身に何が起きたか…

(……荀或さんの指示?)

“普段”との唯一の相違点である存在に意識を向け、“瓦解”が何等かの“策”的可能性を考慮する。

ただ、考えられる時間は、そつ多くはなかつた。

討伐隊は三つに別れ作戦を展開していた。

先ずは前衛たる本隊。

朱靈將軍が率いる千人隊。

次いで遊撃隊。

顔良の率いる五百名。

敵側面・後方へと回り込み挾撃を仕掛けた。

そして、後衛の補助隊。

率いるは 無名の文官。

「顔良隊に伝令つ！

我が隊は朱靈將軍の部隊を援護しながら後退する！」

肩よりも少し長く、毛先が波打つ様に緩く曲線を描く薄茶色に近い茶金の髪。

碧緑の瞳は戦場を俯瞰する様に見極める。

姓名は荀或、字は文若。  
真名は桂花。

普段は一文官として政務を熟している。  
軍務には携わっていない。

そんな彼女が戦場に在り、部隊を指揮している。

当然ながら兵士達は不満を抱えている。

一介の文官に従わなければならぬのだから。

だが、彼等とて戦場で死にたくはない。

だから、従う。

主君である袁紹の命に。

そして、彼女の指揮に。

「誰か有るつ！」

「はつー！」

桂花が声を上げると一人の兵士が側に来る。

「それ以上、私には近寄らないでよねつ！  
これだから男は嫌いよつ！

「氣を遣いなさいよなー！」

そう言つて怒鳴り、兵士を下がらせる桂花。

兵士の顔が引き攣つたのは言つまでもない。

「隊を二つに分けるわよ！」

アンタは兵一百を率い敵に横撃を仕掛けなさい！

一撃当てたら戦場を離脱し本隊に合流！

以後は將軍の指揮下に入り行動しなさい！

判つたわね！？

「はーっ！」

桂花の言葉に兵士は即答しその場を離れる。

“解放”の喜びからなのか兵士の口角が上がつていた事には気付かない。

今は、そんな些細な事などどうでもいい。

（どうなつてゐるのよつ！？

どうして“本隊の情報”が何一つ入つて来ない訳つ！？

一体何が起きてるのつ！？

桂花は苛立ちに歯を噛む。

朱靈將軍が瓦解する事など想定外もいい所だ。

だが、問題は其処ではなくその後に有る。

本隊の情報が皆無。

斥候も帰つて来ない。

如何に優秀な軍師であれ、戦場の情報無くして献策は不可能と言つるもの。

捕殺されてる可能性なんか考えたくはないが……  
それに備えるのが軍師。

加えて、嫌な予感がする。

「……生存が確かな顔良と合流すべきね……」

桂花は小さく舌打ちすると兵士を呼び指示を出す。

朱靈將軍が無事で在る事と予感が杞憂に済む事を願い顔良の下へと向かつた。

果たして誰がこんな事態を予想出来ただろうか。

「貴様等…

自分達が何をしているのか判つてゐるのか?」

金色の鎧に身を包む女性。

前髪はそのままで後ろだけ御団子にした銀朱の髪。  
鬚髪は太股に届く程。

白茶色の瞳は槍刃の群れを突き付ける者達を睨み付け静かな怒りを宿す。

姓名は朱靈、字は文博。  
真名は夕羽。

袁紹陣営でも突出した武を誇る猛将である。

「判つてゐますよ?

私達は“強者”にのみ従い自らの利を優先せぬ  
ただ、それだけです」

ククッ…と“金色”の兜を右手で直しながら答える。

その者は自分の副官として討伐に従軍した男。

仕官の経緯は知らない。  
だが、関係者に心当たりが有つた。

「……貴様、確か許攸の推挙だつたな？」

許攸 字は子達。

袁紹の軍師の一人で策謀に長けた瘦せ顔の細身の男。

袁紹の前では御機嫌取りに徹しているが……  
普段は何を考えているのか読めない。  
正直、軍務でも組みたくはない相手だ。

「ええ……まあ……」

許攸様には昔から御世話になつていまして、ね……」

何處か含みの有る言い方。

許攸は時折、独自に人材を見付けては袁紹に推挙して採用されていった。

それなりに有能な事も有り特に問題は無かつたが……  
結果、この有り様だ。

(… そう言えば苟或の事を気にしていたな……)

ふと、脳裏に浮かぶ光景。

夕羽は“現状”での抵抗は“無駄”だと判断し原因を探る事にする。

今回従軍した文官の荀或の様子を常日頃から、許攸は伺っていた。

男が気になる女の事を見る様な可愛いものではなく、“監視”に近い感じの嫌な視線で、だ。

“普通”は気付く。

ただ、荀或は“男嫌い”で“普段”がそうな為、逆に気付かなかつた。

(……何か因縁でも?)

荀或は“荀子”で知られる荀況の十三世の子孫。

祖父・荀淑（字は季和）は、八代皇帝・順帝の時代から十一代皇帝・桓帝に仕え、“神君”とまで称され…

八人の息子達は“八龍”と呼ばれた。

荀或の父・荀根もその一人である。

また母・荀攸（旧姓は齊）は時の大長秋・曹騰に仕えた才女でもありました。

彼女自身はまだ無名だが、その血筋と才覚は確か。

袁紹の元で花開ぐか否かは別にしてもだ。

（才を妬んで　にしては大掛かり過ぎるか…）

“恋愛”と“嫉妬”の線を捨てて別の可能性を求めて夕羽は思考を深めた。

今回の討伐で解せない点は荀或の従軍だ。

彼女に軍師の経験は無い。

しかし、彼女には討伐軍に従軍しなくてはならない、理由が有った。

（“帳尻合わせ”か…）

荀或の失態　ではないが“アレ”が切つ掛けで従軍している訳だし…

そうなると“アレ”自体が許攸の仕業か?）

荀或といつのは荀或の二つ年下の妹。

姉の荀或同様に文官として袁紹に仕えている。

まだ見習いに近い扱いでは有るが才能は姉と比べても遜色無い。

事が起きたのは五日前。

南皮

「何ですって…？」

湯上がりの袁紹は侍女達に身体を拭かせながら叫ぶ。

「城内に賊が侵入…」

“袁家の宝剣”を奪取し、逃走したと…  
既に城内外を搜索中ですが吉報は期待薄かと…  
尚、賊を発見したのは荀叡との事です…」

布の幕越しに状況を説明し恭しく頭を下げる許攸。

焦げ茶色の髪は頬良に似た髪型で彼女より少し長い。

濃茶色の双眸は何を考えているのかさえ読めない。

少し離れた所で片膝を着き控える夕羽は報告を聞き、袁紹の次の発言を予測。

「荀叡とやらを斬首に…」

それと直ぐに討伐隊を出し宝剣を探しながら…

袁紹は布の幕を払い除けて顔を出すと命令を下す。

「御待ち下さい！」

声を張り上げて現れたのは荀或だった。

「……貴女は？」

袁紹は眉を顰め荀或の顔を見ながら訊ねる。

「荀叡の姉、荀或です

袁紹様、妹が賊を見たのは廊下から庭を挟んでの事  
武官ではない妹には大声を上げて報せるのが精々…  
斬首は御無体です

仮に妹が裁かれるのならば城内の警備を總統括される許攸殿も同罪  
かと」

そう言つて荀或は許攸へと視線を向ける。

釣られて許攸を見る袁紹に許攸は笑みを返す。

「確かに…

荀或殿の言が道理かと…  
如何なさいますか?」

許攸は臆する事も無く答え袁紹に判断を委ねる。

「や、そういう事でしたら仕方有りませんわね  
斬首は無しですわ」

御気に入りの許攸を斬首にしたくはない袁紹は命令をあつさり撤回する。

荀或の表情を覗き見れば、安堵の色が窺えた。

「ですが、袁紹様…

私も荀縗も無罰では示しが付きません…」

だが、許攸は自ら必罰だと袁紹に申し出た。

荀或の表情が強張ったのが夕羽には判った。

暫し、袁紹は許攸と視線を交えて考える。

夕羽には袁紹が許攸の言を呑むだらうと判つていた。

「……良い覚悟ですわ  
では、許攸は現地位を解き文官に降格とします  
そして、荀叡は…………許攸、貴男に任せますわ」

荀叡に関する情報不足から袁紹は決断を放棄。  
許攸へ丸投げにする。

「え、袁紹様っ！」

荀或は慌てる。

頭は回るが、御機嫌取りは苦手な様だ。

「荀或殿、御静かに……」

許攸は荀或を諫める。

荀或は馬鹿ではない。

此處で騒げば事態が悪化し余計な反感を買つてしまつ事を理解する。

「妹君には剥奪する地位が存在しない…

かと言つて、鞭打ちなどの拷問は心苦しい…  
其処で、こういうのはどうでしょうか…  
貴女が賊の討伐に参加し、宝剣を取り戻す…  
その功績の“褒美”として妹君の“罰”を無くす…  
如何ですか？」

許攸の提案は荀或にとつて悪い物ではない。  
寧ろ、彼女の才能を袁紹に示す好機でも有る。

だが、腑に落ちない。

そんな眼差しの荀或。

許攸に“利”が無いが故の“軍師”的な勘繹り。

勿論、夕羽にも判る。

しかし、夕羽はこの時 “許攸も慈悲は有るのか”  
ていた。

と感心し

「……討伐軍の編成は？」

荀或は静かに訊ねる。

「そうですね…

朱靈將軍、賊討伐を御願い出来ますか？」

「私で良ければ」

いきなり話を振られるが、断る理由は無い。

夕羽は即座に答えた。

「では、御願いします…  
それから一人…  
仕官して日は浅いですが、顔良といつ武官を同行させ経験を積ませ  
て下さい…」

許攸の口にした名前を聞き、“成る程、あの娘か…”と夕羽は察しが  
付く。

確かに良い実戦の機会だと心中で同意する。

「編成は此方でしても?」

「将軍に御任せします…

私が編成するより的確だと思いますので…」

そつ許攸は答えた。

苟或も異を唱える事も無く決定を受け入れる。

その後、兵一千名を選出し苟或・顔良と共に楽成へと向かって出陣。

楽成に到着後は陣を敷き、活動拠点とした。

直ぐに賊の足取りを掴み、追つて西進する。

そして賊共の根城とされる廃村が有る山岳へと入り、討伐作戦の為に展開し

副官の“謀叛”により隊は瓦解し、夕羽は包囲され、現状へと至った。

桂花は自分の目を疑いたい気持ちに駆られていた。

「ア、アンタ達…」

剣が、槍が、矢が  
自分の率いる兵を襲いつ。

実戦経験は無いとは言え、桂花は“戦場”に立つのは“初めて”で  
はない。

では、何を戸惑いつのか？

答えは田の前に有る。

「すいませんねえ…」

貴女と違つて、我々は頭が悪いんで“強い者”にしか従わないんですよ」

そう答えるながらの嘲笑。

金色の鎧を“同胞”的の血で赤く染めながら答えたのは桂花が“別動隊”を命じた男だった。

横撃を掛ける筈の別動隊に背後から奇襲を受けた。

“味方”だという安心感も少しは有つただろう。  
そんな事も判らないの?  
気付いた時には兵の半数が地に伏していた。

「此處で謀叛を起こしても袁家の怒りを買つだけよ?  
そんな事も判らないの?  
」

桂花は挑発的な態度で男に指摘する。

此處で心が挫けてくれれば色々と楽になるのだが……

「クツ……ククツ……  
“我々”が“謀叛”?  
それは違う

生憎とコレは“謀叛”じゃなく“肅正”……  
“逆賊”たる“苟或”達を我々が討つ  
そういう筋書きなんだよ」

そつと微笑みに満ちた。

桂花は“誰”の“筋書き”なのか直ぐに判つた。

怒りに奥歯を噛み締める。  
ギリギリ…と歯が軋む。

妹の事が有つたとは言え、相手の掌で踊られた事は屈辱だった。

「さて、此方も片付いたし“本隊”に合流するか…」

男は“部下”に命令を下し移動の準備を始めた。

桂花は殺された兵士達へと視線を向ける。

無念と失意の中で息絶えた物言わぬ屍達。

自分達を嵌める為に許攸に“捨て駒”された者達。

(巻き添えで死ぬなんて…  
運が無かつたわね  
別にアンタ達が死んだってどうでもいいけど…  
せめて、怨みなんか抱かず成仏しなさいよ…)

桂花は心中で彼等に対し最後の言葉を手向ける。

死んだ彼等は悪くない。

だが、こんな世の中だ。

“強者”に従う事も決して悪い事ではない。

苟或自身、妹の為に危険を承知で従軍し…  
兵の命を“私情”で使っているのだから。

“弱いから死んだ”なんて言つつもりは無い。

しかし、血口の“弱也”を言い訳にもしない。

(…まだ朱靈將軍も頬良も生きてる筈…

將軍なら“機”を窺つてる所でしょうな…)

故に桂花は先へ進む。

彼等の死を“無駄”な事にしない為に。

妹を助ける為に。

そして、許攸に“借り”を返す為に。

拘束された桂花。

連れて行かれた先は盜賊の根城とされる廃村。

其処には予想通り朱靈達が捕まっていた。

「荀或さん！

良かつたあ、無事だつたんですね……」

此方を見て頬良は安堵し、小さく息を吐く。

彼女に悪気は無く、純粋に心配してくれていたのだといつ事は直ぐに判る。

「コレが“無事”な訳?」

そう言って桂花は後ろ手に縛られた両手を見せる。呆れた様子で。

「あ……いえ……」

「やうやくやるな荀或」

返答に困つた頬良に朱靈が助け船を出す。

桂花は朱靈に向き直る。

「朱靈將軍、今回の編成は將軍の仕事でしたね？この事態、どう責任を取る御積りですか？」

“全ての責は貴女に有る”と言わんばかりの桂花。鋭い眼差しで朱靈を睨む。

「苟或さん！」

朱靈將軍の責任では

「

「顔良、構わない  
苟或の言つ通り部隊編成をしたのは私だ  
部下の“野心”を見抜けず謀叛を許したのは事実…  
責められても仕方無い」

朱靈は反論仕掛けた顔良を制止し、桂花の発言を肯定した。

顔良は何処か腑に落ちない様子だが、上官で当事者の朱靈がそう言うので黙る。

「だが、苟或

献策した君自身にも責任が有る事を忘れるな  
軍師を志すのなら尚更に」

朱靈は桂花を見据えながら静かな声で付け加える。

桂花は“判つてゐるわよ”と小さく呟く。

三人の信頼感に“亀裂”が生じた事は端で見る彼等にさえ判つただ  
るつ。

事実、桂花は一人に背中を向けてしまつてゐる。

「仲間割れなんかしてても仕方無いだろ?  
どうせ、一緒に死ぬんだ」

三人を見張る賊徒の誰かが言つと同意する様に嘲笑が起つた。

顔良は悔しさから俯き歯を噛み締め…

朱靈は瞼を閉じたまま黙り無反応。

桂花は苛立ちを堪えながら屈辱に肩を震わせる。

「ああ、そうそう…

安心しな、苟或様

可愛い妹も直ぐにアンタの後を追つて逝くからよ  
ハハハハハハハハッ！！！！！」

耳障りな嗤い声。

だが、それさえ些細な事と今だけは感じる。

身体の中　心か魂の奥で“何か”が音を立てた。

「ハハ　はう、あ、つー？」

嗤つていた男が呻く。

見れば桂花の頭が男の腹に減り込んでおり、男は後ろへとゆっくりと倒れる。

「雑魚は黙つていなさい」

冷たく、怒りを孕んだ声で桂花は悶える男を見下ろし吐き捨てる様に呟いた。

桂花の行動　反抗に対し周りの賊徒は一瞬、呆気に取られるが我に返り怒りを露に仕掛けた。

だが、誰も動けなかつた。

朱靈が無言で放つた殺気に気圧されたからだ。

拘束している筈なのに…

動けば斬られる気がして、脳裏を過った“死”に対し賊徒は息を飲んだ。

桂花は“序でに”と蹴りを一、二発喰らわせると元の位置へと血ち戻る。

同時に朱靈の殺氣も消え、賊徒は安堵した。

桂花は薄田で周囲の様子を観察し情報を集める。

賊徒の数は軍から寝返った者を含めても千足らず。訓練された軍兵とは違つて統率力に欠ける賊徒。

また軍兵と言つても袁紹の陣営の兵士は潤沢な資金を元手にした装備品に依り、練度は今一である。

（… そう言えれば朱靈將軍がその事で許攸と意見が対立してたわね…）

練度を高めたい朱靈。  
兵装を重視する許攸。

許攸の狙いが袁家の財力に有るのなら納得が行く。

謀叛を起こし戦つのならば兵装に依つた敵の方が楽に事を運べる。

( だけど、其処に付け入る隙が有るのみ…… )

兵装に依つてゐる雑兵など幾ら群れても恐くない。

兵法の常道は相手より多く兵を揃える事に有る。

早い話が数に物を言わせて押し切る訳だ。

しかし、それには“質”が伴わなければならぬ。

兵の練度、兵装、士氣…

そして、率いる将や軍師。

これらが一定以上の基準に達していなければ常道には程遠い。

實際、朱靈隊は瓦解した。

朱靈の実力は確かだが…

討伐軍の兵は実は主力ではなかつた。

袁紹軍の主力は審配將軍が渤海沿岸に現れた海賊団の討伐に率いて出陣中。

また主君の身辺警護の質は必要との郭図の進言も有り使えたのは新兵よりはマシとこう程度の兵士。

つまり、許攸に従つてゐる兵士の質も同程度。  
ならば、十分に機は有る。

（幸い、とは言えないけど手勢は無し…  
脱するだけなら三人の方が動き易いしね…）

桂花は一瞬だけ朱靈に目を向け直ぐに戻す。

此処に連れて来られた時、桂花と朱靈は目を合わせた瞬間に同じ意図を抱く事を感じ合つた。

だから、態と仲違いを演じ頗良をも欺いた。

全ては伏線。

現状を打破し許攸の謀略を崩壊させる為。

桂花は静かに天を仰ぐ。

白雲の流れる蒼天は日没へ向けて夕輝に染まりゆく。

桂花は目を閉じて俯く。

待つは夜の闇。

闇の訪れこそが好機。

陽は既に落ち、辺りは闇が包み込む。

廃村も松明と篝火無くして見通すのは不可能。

予め用意されていた牢屋に三人は入れられていた。

見張りは二人。

“仲違い”を見ているから警戒が薄い。

「顔良、貴女は何で仕官をしたの？」

桂花は唐突に訊ねる。

顔良は一瞬だけ躊躇するが俯き加減で口を開く。

「…私が生まれ育ったのは山奥の小さな集落でした  
私は幼少の頃に父が仕官し集落を離れましたけど  
ある日、父が山賊の討伐で訪れたのですが：  
集落は山賊に荒らされ誰も生き残つてなかつたと後で聞かされました」

其処で顔良は言葉を切り、顔を上げて桂花を見る。

「仕官した理由は一つ

私は同じ様な目に遇う人を減らしたいからです」

顔良の真つ直ぐな眼差しに宿る意志を感じ取る桂花。

正直、少しだけ胸が痛む。

「…トらないわね」

「…………え？」

吐き捨てる様に咳く桂花。

顔良は予期せぬ反応に田を丸くする。

「何かと思えば…

ただの“偽善”じゃない

「偽善つて…違いますつー

私はただ

「“自分と”同じ悲しみを味合わせたくない」と、そう言いたい  
のでしょ？

それが偽善だと詰つのよ

貴女はそうする事で自分の“傷”を癒したいだけ  
自分の悲しみを他人を救い喜ばせる事で拭う…  
貴女が本当に救いたいのは“過去の自分”よ

桂花は軽薄な眼差しを向け顔良を嘲笑する。

顔良が俯き、唇を噛む。

「貴女の様な“志”なんて乱世の現在なら其処等中に転がってるわ

その一言が顔良を動かす。

顔良は桂花に向かい頭から突っ込む。

桂花を押し倒し、馬乗りになると睨み付ける。

「取り消して下さーっ！」

「嫌よつ！」

アンタみたいな馬鹿の持つ安っぽい正義感なんて何の価値も無いわ  
っ！

「取り消しなさいっ！……！」

顔良は噛み付く様な勢いでゴヅツ！、と鈍い音を立て桂花の額に頭

突きする。

鈍痛に顔を歪めるが桂花は顔良から田を逸らさない。

「手前え等つ！」

何やつてんだつ！」

「退けつ！、離れろつ！」

牢を開いて見張りの一人が慌てて桂花達に近寄る。

彼等は失念していた。

最も危険な存在を。

「がつ  
「ぐつ  
「

そして“彼女”を認識する間も無く意識を手放した。

静かにし、徹底して存在を意識から外させていた。

だから、牢内へ踏み込んだ見張りの背後を取り一撃で気絶させる事ですら両手を後ろ手に拘束されていても容易かつた。

崩れ落ちる見張りの向こうには事態に着いて行けない顔良が目を丸くしている。

「名演技だったな、荀或」

クスッ…と朱靈が笑う。

「顔良、早く退きなさいよ  
重いじゃない。」

「…あ、はい…」

桂花の声に顔良は反射的に桂花の上から退く。

「じゃなくって！  
あの、演技って…」

四 惑つ顔良は朱靈を見る。

「脱出の為の隙を作るには“仲違い”を演じて見せるのが最も簡単  
且つ効果的と軍師殿は考えた訳だ」

したり顔で朱靈は桂花へと笑顔を見せる。

桂花は“ふんっ…”と鼻を鳴らして外方を向く。

「それじゃあ…  
す、すみませんっ！

私つたら何も知らず」

「…別に良いわよ

貴女の意志を侮辱した罰と思えば軽いものだしね」

頭突きを受けて赤くなつた額を隠す為に俯き加減で、桂花は苦笑を浮かべながら顔良に答えた。

それが“照れ隠し”な事は朱靈には判つた。

「それより、さつさと外に出ましょ  
う將軍、期待しますよ？」

“余計な事は喋るな！”と言いたげな眼差しで朱靈を睨み付ける桂花。

朱靈は小さく肩を竦めると意識を切り替えた。

見張りを身体を探り小刀を見付けると器用に後ろ手で縛つていた縄を切る。

桂花、顔良の繩も同じ様に切り落とす。

「…繩の跡が付いてる…」

顔良は手首を擦る。

ふと、視線を朱靈に向けてみると倒れている見張りの傍らに屈んだ。

「…え？」

ズブッ！

呆然とする顔良の目の前で朱靈が小刀を突き刺した。

「…う、あ、…」

心臓へと突き立てたられ、一瞬だけ正気を取り戻すがそのまま絶命した。  
もう一人も同じ様に。

「連中に情けは無用よ」

顔良は桂花を見る。

理解は出来ても感情が異を唱えていた。

それでも、桂花の眼差しに込められた“覚悟”を感じ顔良は感情を抑え込む。

今は余計な事を考えている余裕は無い。  
許攸の謀略を阻止する事が最優先される。

「苟或、顔良、行くぞ」

朱靈の言葉に桂花と顔良は静かに頷き、木格子を潜り牢屋を後に再び“戦場”へ向かった。

牢屋を出て上階へ上がる。

慎重に周囲を見回すが…

倒した見張りの一人以外に敵兵の姿は見当たらない。

どうやら苟或の策は相手に大きな油断を与えた様子。

後続の苟或・顔良を先導し夕羽は屋内を進む。

周囲を警戒しながら夕羽は感心していた。

実戦経験は無に等しい筈の苟或だつたが…  
期待以上の才氣を見せた。

（一、一年も経験を積めば世に名立たる名軍師に成るだらうな…）

彼女の指揮を受け己が武を振るつてみたいと思つ。

しかし、それは“未来”が有つての事。

“現状”の果てに待つのは汚名を着せられた死。

その未来を打破しない限り別の未来は掴めない。

（さて、“得物”も無しに何処までやれるか…）

現在、手元に有する武器は見張りの持つていた小刀と棍が一つずつ。

夕羽が一つずつ持ち、残る小刀を苟或が、棍を頬良が持つてゐる。

苟或に戦闘での活躍は期待していないので護身用。

実質、戦闘になれば一人で切り抜ける事になる。

相手の武器を奪つて戦えば済む話ではあるが…

（私は兎も角として…  
まだ頗良には難しいか…）

交戦中　それも対多戦闘となれば以下に格下相手と言つても隙は命取りだ。

（…先に武器を探すか？）

出来るなら、得意な得物を使いたい所だし。

「朱靈將軍、この先は左に曲がつて下さい」

考えていると後から荀或が声を掛けてきた。

「左?、外へは」

「武器の調達です

左の通路の先が連中の倉になっています」

肩越しに見た荀或の表情は軍師特有の凜々しさを纏い自信に溢れている。

「了解」

夕羽は短く答える。

自然と口元が緩み、笑みが溢れてくる。

“流石”と感心させられ、同時に“その先は”と期待してしまう。

“苟或”という原石の才が如何な輝きを放つのか…  
想像しただけで心が踊る。

（その“輝き”の為なら、袁紹の陣営から離れるのも悪くはないか  
…）

この窮地を脱したとしても袁紹の陣営では冷遇され、苟或は伸びないだろ？

彼女の“才”を活かすには相応しい“主君”が必要。

残念だが袁紹では力不足。領主は務まつても主君 即ち“王の器”では無い。

（湧き立つ瑞雲を纏うのに相応しきは蒼天を翔る龍…  
乱世といつ時を得て天へと至る“霸王”こそが…）

夕羽は其処で思考を止め、胸中で自嘲の声を溢す。

その為にも成すべき事へと意識を戻した。

武器庫にて捕縛された時に奪われた得物を回収の後、屋外へと脱出した。

月は雲に隠れ、日の頼りは松明と篝火の灯りのみ。

しかし、賊の根城とは言え日が落ちれば、廃村の姿が露になる。

人気も生活感も感じ無い、閑散とした廃墟の影。

揺れる灯りが人魂を思わせ背中に冷たさを覚える。

「……妙だな」

慎重に行動してはいたが、随分簡単に運ぶ事に朱靈は違和感を感じ呟いた。

桂花は記憶を手繰る。

此処に来るまでに遭遇した敵の数は十七…見張り・見回り役にしてはやや少ない気がする。

「……罷?……」

桂花の溢した独り言を肯定する様に朱靈が身構えた。

「夜間、念には念を　　と言われてはいましたが、まさか、本当に動くとは」

そう言つた声が聞こえた方へと視線を向ける。

雲が切れ月明かりが射すと暗がりの中に入影が浮かび上がつた。

「…やはり、な…」

副官だつた男の姿が現れた事を皮切りに包围する様に敵兵が物陰から出でくる。

朱靈は小さく溜め息を吐き桂花は周囲に目を遣つた。

敵数は二百程か。

三人を中心に出た人垣は五重、六重になつてゐる。

(…將軍達なら一 点突破でどうにかなる　　)

「…苟或、犠牲は無しだ」

「　　」

思考を読まれ桂花は思わず朱靈を見詰めた。

現状の様な小規模な戦闘に於いて自分は“足枷”だと桂花は理解している。

だから、最も“効率的”な選択をしようとした。

「軍師らしい考え方だが、此処まで来たら一蓮托生  
誰かが欠ける位なら全滅の方が清々しい」

「でも、それでは」

「姉を犠牲にして助かつて苟縗が喜ぶと思うか?」

「……」

朱靈の言葉に桂花は黙る。

自分が苟縗の立場なら納得出来る訳がない。

身勝手な正義感や使命感は自己満足でしかない。

それは桂花が頬良に対して言つた言葉である。

「一緒に、ですよ

頬良が力強い眼差しを向け見詰める。

“三人一緒に生きて帰る”そつ言つてゐる様に桂花は感じ取つた。

「…………馬鹿ばっかりね」

桂花は呆れた様に溜め息を吐きながら咳く。

それが彼女なりの照れ隠しだといつ事を朱靈と頬良は判る様になつてゐた。

「さて、続きを後だ  
取り敢えずは……」

会話を纏め、朱靈は周囲の敵を見据える。

「田の前に有る“塵芥”を片付けるとしようつ

獰猛な光を眼に宿す朱靈は不敵に微笑んだ。

「雄々しい恋愛小説」

雄叫びと共に朱靈は両手で握った蛇矛を振るつ。

二才ラッ！ と喰ひを上に群かる賊徒を薙き倒す

蛇矛特有の蛇の背を思わず波打つた刃が切り裂いて、柄と石突きが打ち弾く。

「はあああああーっ！……！」

気合いと共に顔良は金色の巨大な大鎧を振り下ろす。

ドグオオオンッ！、と轟音を響かせながら地面を凹まし賊徒を打ち潰す。

数にすれば、たつた一人。

しかし、その強さは数字に直結しない。

桂花は一人の中間に位置し家屋の壁を背にして小刀を右手に握り身構えながら、戦況を見詰めていた。

自分に出来るのは身を守り足手纏いにならない事。

だから、周囲への警戒には細心の注意を払っていた。

それ故に 背後に対して油断が生じた。

バベギイツ！

背後から音がした。

同時に壁の板が砕け散り、壁穴から腕が伸びた。

「武器を捨てろつー」

その声に朱靈と頬良が振り向けば副官だった男の腕が桂花を捕らえていた。

「…ハハハ…」

首に回された左腕で強引に吊り上げられ呻く桂花。

身長差から足は地に着かず足掻いて男を蹴つてみても上手く力が入らない。

足手纏いになりたくないと思っていたのに…  
結局は足を引っ張る結果になってしまった。

自害しようにも…

既に小刀は地面に落ち…

顎を動かせず舌を噛み切る事も出来無い。

細やかな抵抗は男の左腕に爪を立てる程度。

それも厚い服の袖に阻まれ大して意味を成さない。

悔しさに視界が濡れ滲む。

背後に居る筈の男の声すら遠くに聞こえる。

首元を締め上げられる為、必然的に顔は空を仰ぐ。

厚い黒雲が覆う空はまるで今の心境の様だった。

全ての“希望”という光を奪い去られ…  
ただ、“絶望”という闇が全てを呑み込む。

桂花の瞳の奥から“光”が消え掛ける。

それは一瞬の事だった。

黒天に一筋の光が流れた。

無意識に追つた先には月。

頬を伝い、瞳から溢れ出た涙が地面へと落ちる。

儚い玉響の輝き。

その輝きに導かれる様に、月光の中に影が落ちた。

天に在る皓月の清影よりも明澄に輝く“白い影”が。

軍声が支配していた戦場は一転した事態に沈黙した。

そんな中

“それ”は桂花の目の前に木の葉が落ちる様に静かに緩やかに現れた。

静まり返った場に響くのは鳥の羽撃きに似た音。

それが外套のはためきだと田の前で揺れてから判る。

ふわり…と軽やかに広がる一点の曇りも無い白い髪。

それはまるで、白鷺の翼の様で“髪”だと気付く迄に幾何かの間を要した。

小さな屈伸と共に白い髪は翼を閉じるかの様に纏まり清影を浴びて煌めく。

天より落ちた“白い影”は“白い髪”的人影。

闇夜に在つて、目立つなと言う方が無理な存在感。

しかし、身体を包む外套はそれとは真逆の漆黒。

宵闇を纏つたかの様な姿は見る者に恐怖の念を抱かせ同時に魅了する。

正にそれは“月”の如く。

誰一人として動けない。

時間が停止したかの様に、誰も彼もが佇む。

ただ、その存在を見詰め、ただただ、立ちぬく。

「 会いたいですか？」

静寂の中、凜とした美しい声が響いた。

主語の無い問い掛け。

その場に居た殆どの者が理解出来なかつた。

しかし、桂花だけは直ぐに理解した。  
誰に対する言葉なのかを。

脳裡に浮かぶのは妹の姿。

無邪気に笑い掛けながら、“お姉ちゃん”と呼ぶ。

時に自分の前を走りながら振り返って笑う…

腕を絡ませながら隣を歩き甘える様に笑う…

布団の中で手を繋ぎながら安心しては笑う…

いつも、傍に在った笑顔。

「……あ……い……たい……」

必死に声を絞り出す桂花。

“会いたい”

その想いが桂花の心の中に強く、強く、響く。

感じていた筈の死の恐怖も無力な自分への憤りさえも想いが全てを塗り潰す。

“生きたい”

あの娘に会つ為に。

会つて腕の中に抱き締め、あの笑顔を見る為に。

その為には

今、死ぬ訳にはいかない。

だから、彼女は希づ。

再会を切望して涙を流し、生への渴望を声に乗せ。

「…たす…つけ…」

僅かな風音にも搔き消えてしまいそうな脆弱な声。

直ぐ側に居ても聞き逃してしまってそうな儚い声。

けれど、静寂の闇夜に在り“月”だけには桂花の声がはっきりと聞いていた。

“絶望”といつ空に輝く、“希望”といつ“月”に。

その想いに応えるかの様に“白い影”が舞つた。

人間は理解の範疇を超えた事態に直面した場合…  
どうするのだろうか。

ただ茫然とする?

訳も解らず逃げ惑う?

ただただ笑う?

何れも正であり誤もあるだろう。

では、彼は

元副官の男はどうしたか。

彼は“考えた”。

何が起きているのか把握し対処しようとして考えた。

それは、ある意味必然的な行動だった。

彼は賊徒の頭目

つまりは“指揮官”故の。

では、彼はどの様な理由で指揮官をしているのか。

彼は朱靈や頗良の様に武に長けている訳でなければ、苟或の様に知

に長けている訳でもない。

家柄や血筋が良い訳でも、高名な師匠を持つ訳でも、有名な流派に属す訳でも。

ならば、人心を惹き付ける魅力や徳などが有るのかと聞かれれば  
否。

彼が指揮官をしているのは偏に“許攸”といつ力有る“伝手”に依る。

つまり彼は“他人”的権力によつて指揮官と成り…  
その繋がりを“後ろ楯”にしていたに過ぎない。

許攸の言つ通りに動いて、結果が伴つてきた。

だから、彼は自らが指揮し成果を上げてゐるのだと、“錯覚”して  
いた。

伝手が意味を成さない今、指揮官に“必要な能力”を何も持たない  
彼は

“無意味”な思考を試み、出口の見えない“迷宮”でただ立ち廻く  
す。

視界の中で“白”が舞う。

いつの間にか消えた灯火。

闇夜を照らすのは厚い雲の切れ間から覗いている月の薄明かりのみ。

薄暗い世界の視界は悪い。

時が止まった様に佇む兵の輪郭は判つても、顔までは判別出来無い。だが、その白き輝きだけははつきりと見える。

決して見失う事は無い。

緩やかに、艶やかに…  
軽やかに、馴やかに…

“白”が舞う。

そして“白”に戯れる様に“紅い花弁”が吹雪く。

闇夜の中

月下に花が咲く。

赤い、紅い

鮮やかな“血の花”が。

闇に咲いては瞬きに散り、虚空を染める。

月下に刃閃は見付からず、然れど人影に花は咲く。

狂い咲き、乱れ舞う。

“白”に恋焦がれる様に…

“白”を追い求める様に…

“白”へ惹かれ捧ぐ様に…

“花”は命を散らす。

あまりにも美しい光景。

彼の陳腐な思考など無視しいとも容易く虜にする。

ただ見入る事しか出来ず、“死”的恐怖など抱く事も無いままに…

彼は命の花を散らした。

咲き乱れる“死”と戯れる“白い髪の少女”的存在に身も心も奪わ  
れたまま。

闇夜に咲いた“花”は散り大地を赫く染めた。

降り積もる“花弁”の中に“少女”は静かに佇む。

斗詩は目を奪われた。  
美しく舞う、その姿に。

夕羽は心を奪われた。  
流麗な戦の、その武に。

桂花は“死”を奪われた。

思わず左手を添えた胸元。

掌に内側から脈打つ鼓動をはつきりと感じ取る。

尽き果てる筈だった生命は確かに“現在”も  
“此処”に在る。

“生きている”

“助かつた”

安堵と喜びに身体は震え、急に緊張が解け力を失い、桂花は膝から崩れる。

抗いたくとも抗う余力など残っていなかつた。

しかし、地面に倒れる事はなかつた。

視界を染めたのは漆黒。

淡い、桜の香が薫る。

柔らかな、日溜まりの様な温もりが包み込む。

瞼を閉じれば誘われるまま眠つてしまいそうな程の、優しく、穏やかな安らぎが桂花の五感を染める。

「彼女が待つていますよ」

けれど、その一言が現実へ意識を引き戻す。

桂花は眼を開いて顔を上げ“少女”を見詰めた。

美しい紫水晶の双眸。

月明かりは無くとも闇夜で輝きを放つ。

瞳に映り込んだ自分の顔。

瞬間、其処に姿が重なる。

「あの娘は！？」

妹は無事なのつ！？」

掴み掛かる様な勢いで声を張り上げる桂花。

自分の足で立つてゐる事も難しいのに…  
心だけは急き、焦る。

“少女”の外套を握り締めその胸に縋り付く。

想像などしたくは無いが…  
自分達が“こう”だ。

平穀無事とは考え難い。

冷静さを保つ為に思考から遠避けていたが…

一度でも考えてしまつと、不安が抑えられない。

たつた一言

たつた一言で崩れてしまいそうな程に脆弱な心。

それは砂の山の様に…

たつた一粒が欠けただけで壊れてしまいそう。

問わずには居られないが、堪えられるかは判らない。

聞きたく無い事の方が多く望む言葉は唯一つ。

“少女”の双眸を見詰め、桂花は答えを待つ。

瞬きすら忘れ

ただ静かに、じっと。

逸る気持ちが不安を煽り、僅かな間さえも長く思え、両の掌と噛み締めた奥歯に力が籠る。

言葉より先に桂花の不安を拭い去つたのは“少女”の浮かべた微笑み。

「大丈夫、安心して下さい  
彼女は無事です」

そう“少女”が言ったのと同時に桂花は心底安堵し、残っていた気力も尽き果て静かに意識を手放した。

河間郡

渤海郡・安平郡との郡境が重なる郡南部の山間。

その山の麓には五百人程の小さな村がある。

外れの高台には眼下に村を見下ろす様に建つ家。

否、“家”と言つより“小屋”と言つた方が的を射ているだろう。

生活感は殆んど窺えない。

誰か住んでいる訳ではなく“見張り台”としての建物なのだから当然の事。

そんな場所に人影が在る。

窓辺に立ち、開いた窓から空を見上げる者。

癖の無い、腰元に届く程の黄土色に近い金茶の髪。  
碧緑の瞳は空の青を映して紺碧の色を成す。

姓名は荀蓁、字は友若。  
真名は茉莉花まりか。

荀或の妹である。

「…お姉ちゃん…」

ぽつりと呟く茉莉花。

無意識に胸元に有る左手をキュッ…と握り締める。

心配するなと言う方が無理ではあるが…  
心は落ち着いていた。

脳裏に浮かぶのは雪の様に白い“少女”的姿。

三日前

私は牢の中に居た。

自分のした失態を考えれば当然かもしれない。

但し、私が居るのは南皮の城の牢ではない。

私が居るのは

渤海に浮かぶ奴隸商人達の商船の牢屋。

「おつ？、随分と大人しくなつたじやねえか漸く諦めたか？」

髭面の男がニヤリと笑う。

“諦めた”と言つよりも、それしか無かつた。

無闇に叫んだり足搔けば、それだけ体力を消耗する。

だから、今は“休む”事に専念する。

孰れ来る“機”を待つて。

そんな事を考えていると、トン、トン、トンと足音が上から下りてくる。

「ガキ共の様子は？」

そう聞いたのは商船の主。

中肉中背の中年男。

見張りをしている龜面とは着ている服から違つ。

見た目に判り易い格付け。

「へい、特には何も

子達の旦那から受け取つた娘も大人しくなりやした」

そう男が言つと商人は私へ顔を向ける。

私は抵抗する気力も無く、俯いている様に見せる。

「そうか、しかし…」

商人は私を品定めする為か舐め回す様に見る。

(ちょっと！

その穢らわしい田で此方を見ないでくれますっ？！)

ゾワリ…とした嫌悪感から鳥肌が立つ。

身震いしそうになる自分を必死に抑え込む。

「…田那は良い品を流してくれるな  
これ位の女になる前の方が需要が有るからな」

「ああ…自分好みに調教、でやすね？」

ニヤつゝ男の言葉に商人は口角を上げた。

「……う……ん……」

小ちく揺れる感覚に身体が反応し意識を呼び起しき。

ほんやりとした視界。

惚けていた意識が整う。

暫く眠っていたらしい。

(案外、寝れる物ですね)

自分の置かれた状況を考えながら己の神経の図太さに感心する。

通氣の為の小窓に目を向け様子を見る。

黒天には朧月。

普段なら視界に心許ないが眠っていたからなのか…  
それで十分に視界は利く。

壁にくつ付く様にして外の状況を観察する。

有効な視界の端には入江の突端らしき岬。  
どうやら停泊中の様だ。

逃げ出すには好条件。

問題は牢屋の格子と手枷。

武官ではない己の腕力ではびくともしないだろう。  
どうしようかと悩む。

「逃げたいですか?」

不意に声を掛けられた事にビクッと身体が強張る。

ゆっくりと顔を向けた先に居たのは“少女”。

船と一緒に乗せられたから居るのは当然。

しかし、その表情は余裕を感じさせる微笑み。

不思議と不安が拭われる。

「… そうしたいですが…」

私は小さく溜め息を吐き、両手を縛る手枷を上げる。

「逃げて、どうします?」

“少女”は氣にする様子も見せずに訊いてくる。

“逃げた後”

其処までは考えてない。

逃げ出せるかも判らない。

だが、“少女”は私が既に“帰る場所”を失っている事を知つてゐる。

自分と見張りの男の会話をずっと聞いていたから。

「…………判りません  
許攸によつて私は“死人”扱いにされていますから、南皮には戻れ  
ません  
それに……」

言葉を切り、唇を噛む。  
悔しさに、憤りに、俯く。

“貴女は運が良い……  
奴隸商に売られても、  
“生きていられる”……  
姉君達は……フフッ……  
気の毒な運命ですね……”

許攸の言葉が頭を過る。

姉は無事だらうか。  
無事で居て欲しい。

そして

「…………会いたい……  
つ……お、お姉ちゃんに……会いつ……たい……」

……うつ……会いたいです……

私は声を詰まらせながら、想いを吐露する。

いつの間にか涙が溢れて、頬を濡らしていた。

「会いに行きましょ、」

「…………え…………？」

涙でぐしゃぐしゃになつた顔を呆けた様に上げた私に“少女”は微笑んだ。

私は睡然とする。

木製とはいえ、頑丈な箸の手枷から“少女”は樂々と自由になる。壊した訳では無い。

手首を通す穴から掌を引き抜いただけ。

私も試みては見たが……  
無理だった。

と言つよりも、手首の大きさは掌を窄めてみてもそれよつ小さい。

“少女”の行動は奇術師の技の様だった。

「直ぐに戻ります

少し待つていて下さいね」

“少女”はそう言ひつと牢の格子に右手を掛ける。

ギイイ…

「 え？」

最初から鍵自体が掛かっていなかつたかの様に自然に静かに音を立てながら開く牢の出入り口。

ただ茫然とする私を他所に“少女”は階段を上がり、姿を消した。

「……」

“少女”の消えた入り口を見詰めながら考える。

あの奇術師の様な技を直に見せられたら鍵を開ける位造作も無いと思える。

しかし、鍵が開いていたとしたら話が変わる。

もしも、連中の仲間ならば自分は無事では済まない。

だが、矛盾もある。

“少女”が私に聞いた事は普通に考えれば判る。

誰も好き好んで奴隸になどなりたくない。  
だから、逃げたいと思う。  
それが当然だろ？。

つまり、連中に見て見れば判りきった事。

仮に、希望を持たせて置き脱出を阻止する事で絶望を「え様と画策  
していても、私には意味が無い。

帰る場所を、姉を失つた今これ以上の絶望は無い。

いや、まだ姉の死が確かに成了た訳ではないけど。

私には失う物が無い。

どの道、自分の力では逃げ出す事は不可能。

諦めてはいながら  
覚悟はしている。

舌を噛み切る等、自害する方法は少くない。

しないのは姉の安否が未だ定かではないから。

それさえ判れば

「……お姉ちゃん……」

死んでいれば後を追う。

生きていれば何をされても生き延びて会いに行く。

私の選択肢はそれだけ。

私の心は折れない。

私は心を折られない。

そんな事を考えていると、不意に“少女”的微笑みが脳裏に浮かんだ。

それだけで不安が消える。  
それだけで疑念が消える。

無条件で人を信じる事など出来る訳がない。

更に、自分は軍師を目指し研鑽を積んできた。

常に“最悪”を想定して、“最善”を仄めくす。

故に“疑う事”は自分自身でさえも例外ではない。

なのに 私は“少女”を信じてしまつている。

「御待たせしました」

そして、“少女”は戻り、私に微笑み掛けた。

“少女”を見ると先程まで着ていた服  
ボロボロの如何にも奴隸と言う格好 ではなくて、黒い外套を羽  
織つている。

右手には牢の鍵が握られ、左手には私の為と思われる灰色の外套を  
持つていた。

“少女”は鍵を開けると、予想通り私に外套を渡す。

「では、行きましょうか」

「行きましょうかって…  
此方は一人ですよ?  
どうするつもりですか?」

私は“少女”に訊ねる。

「船」と燃やします」

笑顔で言つて、少女に私は目を見開いた。

確かに火計は有効だ。

しかし、連中とて馬鹿ではないし素人でもない。  
易々と許す筈がない。

そう私が考えている内に、『少女』は油を撒く。

どうやら本氣の様だ。

私は急いで階段へと向かい走った。

階段を殆んど上がつた所で油を撒く水音が止んだ事に振り返つて見る。

階段の下に、少女は佇み一つだけ有つた灯火の盞を右手に持つていた。

『少女』は撒いた油を確認すると盞を足下の油溜まりへと落とす。

ゆつくりと、時間その物が流れを緩めたかの様に：

赤い灯火が揺らめきながら落下して行く。

力チャーンッ！、と盞が音を立てるに灯火が油に引火。

まるで水面を滑るかの如く一瞬で視界が赤に染まる。

薄暗かつた船室内は明々と燃え広がる炎に照らされ、その光景に目を奪われた。

「さあ、急ぎましょ」

思わず茫然としていたが、“少女”と田が合い正気に戻ると、慌てて階段を駆け上がった。

船はそこそこ大きいのだが船内に人影は無かつた。

船を降りて宴でもしているのかも知れない。

この時、私はそう思った。

だが、甲板に出た所で私は目を疑う。

月下に広がるは赤。  
無造作に転がる屍。

不気味な程の静寂が包む。

目の前の光景は現実なのか聞いたくなる。

「…………う、う、つ…………」

噎せ返る様な血の臭い。

船室に火を放つた為なのか生暖かい風が肌に絡み付き全身を悪寒が走る。

額を、首筋を、背を冷たい嫌な汗が伝う。

初めて間近で目にする死。

不意に込み上げる吐き気に思わず顔を逸らした。

同時に、へりり…と意識が揺れて視界が霞む。

本能的に危険だと判る。

(駄目…堪え…ない…と…お…ね…ちや…)

しかし、私の意思とは逆に身体は抗えず

私の意識は闇に飲まれた。

気が付くと見知らぬ天井。

「……此処は？……」

「気が付きましたか？」

その声に頭を向ける。

“少女”が此方へ歩み寄るのが見えた。

その姿を見ると朦朧としていた意識は直ぐに覚醒し、自分の身に起きていた事を思い出す。

“少女”は私の様子を見て理解したのだと感じたのか優しく微笑む。

「此処は河間郡・渤海郡・安平郡の郡境が重なる南の山間にある村です

村の方に“事情”を話し、使っていない見張り小屋を御借りました」

“事情”というのは適當なそれらしい理由…

“旅の途で連れが倒れた”とでも言つたのだろう。

“少女”は穏和な見た目と違つて強かな様だ。

「……あの船は？」

私は“少女”に訊ねる。

恐らく、乗員は全滅。

船も炎上し沈んだだろ？

間違い無く

“少女”の手によつて。

それ位は判る。

それでも“少女”の口から真実を聞きたかった。

「彼方へと、逝きました」

“少女”は目を瞑りながら穏やかな声で答えた。

(…ああ )

それを見て私は理解した。

“少女”は殺す事になんて慣れてはいない。

“命”を奪う事に躊躇いを持たないだけ。

けれど、それは我欲による“無意味”な行為ではなく“生きる”為に。

そして、奪つた“命”が、“無意味”にならない様に“生きる”事で示す。

その“命”は自らの血肉と成つて此処に在る。

“糧”とした“命”の分も“生きる”と。

だから“少女”はこんなに穏やかに呟つのだらう。

悲哀や憤怒や憎怨ではなく“感謝”的から。

（私と歳は変わらない様に見えるのに…）

“少女”の生き方が眩しく不謹慎にも私は羨ましいと思つてしまつた。

“少女”とて望んで殺人をしている訳ではないのに。

それを判ついても…

“少女”には心を魅了し、惹き付ける“力”が有り、私は魅せられた。

「 以上です

では、私は貴女のお姉さんを探しに行つてきます」

この家屋 見張り小屋の説明と食糧などの事を話し“少女”は出

て行く。

“連れて行つて”と言える状態でない事は自分自身が良く判つていた。

憔悴した身体は頼り無い。

だから、私は信じる。

「お姉ちゃんを  
宜しく、御願いします」

そう言つて頭を下げる私。

「はい、確かに承ります」

“少女”の言葉に顔を上げ私は笑顔で見送る。

私に出来るのは唯一つ。

信じて、帰りを待つ。  
ただ、それだけ。

グラグラ…と身体を揺らす振動に意識が反応する。

「…………う…………」

まだ焦点の合わない視界に映るのは一面の土色。

「苟或、気が付いたか？」

頭の後ろ 上の方からの声には聞き覚えが有る。

「…朱靈將軍？」

桂花は彼女に答えながら、自分の目に映つていてるのが地面である事を認識する。

同時に揺れが止まる。

蹄の音からして馬の様だ。

手足が動かない事を考え、縛られているのだろう。しかも、馬に荷物も同然に載せられた状態で。

まあ、氣を失つている者を運ぶのなら私も同じ様にするだらうな  
ど。

「今解いてやる」

朱靈將軍は私を持ち上げ、自分の前に座らせる。

急に体勢を起こされたからなのか頭がフタフタべ。

軽く頭を横に振つて意識をはつきりさせる。

顔を上げると顔良と

あの“少女”を見付ける。

視界に映る景色は廃村とは関係の無い平野。

蒼天に有る太陽の位置から考えて夜明けから一刻程。

彼処に留まる理由は無いし別段不思議ではない。

だが、桂花は周囲の景色に見覚えが有つた。

「將軍、此処は？」

「南皮へ向かう途中だ」

見覚えが有る筈だ。

此処は行軍中に通つた道。

位置としては楽成の南東に三十里程だろ。

「……と、『これでよ』」

身体を縛っていた縄が緩み私の足の上に落ちる。

それを纏めて掴み、頭上へ持ち上げて潜る。

そのまま縄は捨てようかと思ったが…

何かに使えるかも知れないから纏めて結んで置く。

「それで?、私達の状況が判らないんだけど…  
どうこう事なの?」

縛られていた所為だらけ。

痛む両手首を動かしながら桂花は“少女”を見る。

“少女”は妹の所に行くと言っていた筈…  
なのに、どうして革皮に?…

「妹さんは無事です

奴隸として売られる所では有りましたけど…」

「ちよちつ 奴隸つー?」

私は“少女”的言葉を聞き身を乗り出す。

「落ち着けっ！」

「無事だと言つていろつ！」

それを朱靈に抱き抱えられ諫められる。

つい、カツとなつた自分が冷静さを欠いた事に気付き氣不味くなる。

「少し憔悴していましから今は休んでいますよ

“少女”は此方の気持ちを読み取つた様に微笑む。

その微笑み思わず見惚れ、心は穏やかになる。

余計な不安も消え失せた。

桂花は小さく深呼吸する。

そして、改めて“少女”を見詰めた。

“少女”は桂花の目を見て準備が出来た事を悟る。

「妹さんに関しては心配は要りません  
それよりも問題は貴女達の置かれた状況です」

今までずっと微笑んでいた“少女”の表情が変わり、真剣な面持ちになる。

それ程に切迫している事を桂花は読み取る。

朱靈、顔良の顔にも緊張が浮かんでいる。

「事情は把握します

ただ、彼方の方は貴女達を“謀叛”的首謀者として…  
既に此方へ行軍中です」

その言葉に振り返り朱靈を見れば悔しそうに頷く。

桂花は右手親指の爪を噛み悔しそうに露にする。

許攸が自分達を“謀叛”的首謀者としてでっち上げ、始末しようとしている事は既に判っていた。

だが、行軍して来るなんて思っても見なかつた。

許攸という男は強かだ。

袁紹の機嫌を損なう真似は決してせず、己に悪感情を抱かせる事は

しない。

だが、慎重で臆病。

小心者とも言えるが…

強かさを持つが故に他者を利用して策を弄する。

だから自ら動く事は無い。

そう決め付けていた。

(…いえ、臆病だからこそ確実に仕留める為ね)

桂花の推測は正しかつた。

許攸は最初から“手駒”を信頼などしていない。

だから、自らが動く形でも一手を打つて来た。  
計画を確実にする為に。

仮に失敗したとしても…

切り捨てる事で献策により自らは功を得られる。

袁紹の機嫌も上手く言葉を選んで損ねないだろう。

つまり、どう転んでも彼は損をしない。

己の保身と我欲を満たす事だけに練られた計画。  
実際に小心者の許攸らしい。

だが、それも袁紹が相手で有るから可能な事。

名門袁家の本家当主といつ市井に知られた地位。

それにより袁家へと集まる財力と兵力。

そして、自尊心の塊で有りながら“我が儘な小娘”に過ぎない袁紹自身。

甘言により、易々と操れる袁紹という名の傀儡。

許攸にとって袁紹程都合の良い人物はそうな居ない。

悪政を敷いても…  
裏で悪事を働いても…

その機嫌さえ損ねなければ何をしても問題無い。

私利私欲を何よりも求める世の宦官達にとつて袁紹は正に“理想”的の主だった。

桂花は深く溜め息を吐く。

許攸と袁紹の組み合わせがこれ程迄に相性が良いとは考えた事もなかつた。

「…雲を得た龍ね」

思わず呟いた一言。

端から見れば“龍”は袁紹だと思つだらう。

だが、それは違う。

此処で言つ“雲”は袁紹、“龍”は許攸だ。

勿論、許攸が“王の器”と言つつもりはない。  
飽く迄も比喩としてだ。

それでも、流れは許攸。

「最初から袁紹を動かして来るつもりだったか…」

朱靈が静かに呟く。

既に彼女にも袁紹に対する忠誠心は無いだらう。  
当然、頗良にしても。

「付け加えるのなら…

計画が成功しても“賊”的討伐は既定でしょう

今回の計画の“絡繰り”を知っている“危険因子”は“賊”として

排除出来…

自らは大きく功を立てられ主の信頼を得られます  
最初から“謀叛”その物が餌に過ぎません  
その証拠に

「

そう言い“少女”は外套の下から一本の剣を取り出し此方へ見せた。

桂花は 朱靈も顔良も、目を見開く。

それは盗まれた宝剣。

「これは賊の頭田の部屋に置いて有りました  
とても無造作に、です」

“少女”はそう言つと剣を外套の下へ仕舞つ。

「……………そういう事ね……………」

桂花の中で全てが繋がる。

許攸にしてみれば宝剣などどうでも良い事だろう。

しかし、失つてしまつたら袁紹の機嫌を損ねる。  
だから手元に置いていると思っていた。

しかし、最初から取り戻す事を前提にしているのなら先程の“少女”の言葉通り行軍は当然の事。

後で“見付かりました”と渡すよりも“賊”を討伐させて自分で“取り戻させる”事により自尊心を満たさせる。

当然、袁紹は上機嫌になり細かい事は気にしない。

妹が奴隸商人へと秘密裏に売られていても。

そして、自身は献策を含め功を上げ地位を高める。

自分や朱靈、顏良といった袁紹の“抑え役”を排除し権限の専横を達する。

（本当、腹が立つわね…）

私は妹の事に目先を奪われ冷静さを欠いていた。

勿論、それも許攸の計算の内だつたかも知れない。

互いへの想いを利用され、崩されたのだから。

故に読み切れなかつた。

こんな単純な謀略を。

そんな自分に憤る。

冷静さを失わなければ策を看破する事は出来た。  
それが悔しくて仕方無い。

「あ、あの…

結局の所、私達はどうなるんですか？」

恐る恐る顔良が訊ねる。

桂花も朱靈も 顔良自身“答え”は見えている筈。

それでも、訊ねるのは否定して欲しいから。

「…」そのまま死んだ様に見せ逃亡したとしても…  
今後、表に立つ事は無理になるでしょう

そう、生き延びたとしても田の下は歩けない。

只の武官・文官の自分達に袁紹の地位を揺るがす力は無いのだから。

私達に残された道は一つ。

命懸けで潔白を証明するか戦つて未来を勝ち取るか。

だが、何方にも勝ち田すら見えて来ない。

（…既に詰んでるわね…）

桂花は胸中で敗北を認め、身の振り方を考える。

妹と何処かで静かに暮らすのが一番良いだろ？。

朱靈と顔良も一緒に賊に襲われても戦えるだろ？し袁紹も何時か忘れる筈。

（未練は有るけど、ね…）

乱世を戦い、新たな時代を築く王に仕えたかった。

未だ見ぬ“主君”に想いを馳せて笑みを浮かべる。

朱靈や顔良も同じ様に。

“理想”と“現実”を思い描きながら。

「其処で、ですが」

しかし、“少女”的告げる言葉に私達は目を見開き、“天命”を感じた。



## 準章 弐 月咲舞影（後書き）

次回更新時に消えます。

かなり御待たせしました。 m(—) m

準章は次話で終了。

漸く本編（1章）へ。

無駄に長くてすみません。

次話の後書きには朱靈さん荀藻ちゃんの設定を入れる予定です。

それでは、また（^ - ^）／

南皮から樂成へと続く道を金色の鎧を来た人の行列が行進していく。

それはまるで金色の龍。

一見しただけでも万を下る事は無いだろう。  
高が“賊”を相手に率いる兵数ではない。

「おーっほっほっほっ」

蒼天の下、甲高い女の声が響き渡る。

軍列の中段の稍後方。

派手な装飾の金色の御輿の中に有る椅子に座る者。

黄みの強い金色の長い髪はクルクルと螺旋を描く。  
碧緑の双眸には嬉々とした満足感が浮かぶ。

姓名は袁紹、字は本初。

袁本家の現代当主であり、渤海郡の太守である。

「ところで、許攸さん

“賊”の居るという場所は後何れ位ですか?」

「こまま順調に行ければ明日の夕刻には…  
明後日の朝には討伐を開始出来ると思います…」

恭しく頭を下げながら言い袁紹に見解を示す。

勿論、事前に釘は刺した。

“相手は賊、無理に急いで兵を疲労させる事はせず、万全の状態で  
圧倒し倒せば袁紹様の勇名は轟く”

などと、言つて。

袁紹は許攸に信を置く。

それは自分を誰よりも敬い満足させてくれる為。

許攸の真意になど気付きはしない。

「私が、この手で、宝剣を取り戻す

華麗な私に相応しい舞台が待ち遠しいですわね」

悦に入った様に頬を緩め、妄想の中の自分に酔つ。

大方、自分の命令によつて兵士が賊を討伐した後に、高々と宝剣を  
掲げる所でも想像しているのだろう。

許攸はそれを見ながら間を計り、增長を煽る。

「袁紹様の前では賊徒など塵芥も同然でしょう…  
ですが、それ故に圧倒的な勝利を庶人へと知らしめる事で人心は袁紹様こそ主に相応しいと思い知り…  
尊敬する事でしょう…」

許攸の言葉を聞き、袁紹は全てを見下す様に微笑む。

「当然ですわ！  
名門袁家の本家当主である私こそが民の主！  
その事を民に思い知らせてあげますわ！」

袁紹は自分の発言が危険な物だとは思っていない。

一步間違えば皇帝に対する“謀叛”と取られ兼ねない浅慮な言葉。

許攸はそれに呆れながらも内心で北叟笑む。

「御意に…」

ただ、その一言で、許攸は自分は袁紹に忠誠を誓うと刷り込ませる。

「さあ、皆さん！

私の威光を庶人に示す為、華麗に進みますわよ！

おーつほつほつほつ！

おーっほっほっほっほっほっ！

おーーつほつほつほつ！

遮る物の無い平野へ彼女の高笑いが広がつていつた。

袁紹軍の行軍する様を丘の上から見下すハ」の瞳

端から見て初めて判る。

あの金色の鎧の滑稽さか

そして、無遠慮に響き渡る甲高い笑い声を聞き二人が顔を顰める。

「……あの馬鹿な高笑い」

「間違ひ無く居る様だな」

「… そうみたいですね…」

苟或、朱靈、斗詩が呴く。

“少女”は特に変化も無く笑顔を浮かべている。

「で、どうするんだ？」

まさか正面から突っ込む訳じゃないんだろ?」

朱靈は“少女”へ顔を向け訊ねる。

「そのまさかですよ」

「はあつ!?

貴女、馬鹿じやないの!?

“謀叛”を起こした主犯の私達が正面から行ける訳がないでしょっ!

!」

思わず、苟或が非難するが“少女”は揺るがない。

「“謀叛”を起こしたならそりでしょ!」

「だつたら

「ですが、貴女達は潔白

そして、彼方では貴女達は“まだ”身内ですよ」

その言葉に私達は驚く。

「先ず貴女達を“謀叛”的首謀者として排除する事は簡単ですが…  
それでは自君に対する兵や民の不信感を招きます

ですから、 “戦死” させる事が一番良い形になります

“謀叛” と “肅正” を餌に “賊” を踊らせる事により貴女達を全滅させます

しかし、殺さなかつたのは自分達が “味方の救出” の大義名分を得る為であり、裏切られた “賊” が怒りで貴女達を殺す事を計算していましたからです

官軍を倒す程に危険な敵を討つた事で勇名を轟かせ、貴女達の “戦死” を称えて主や兵の信頼を勝ち取り、全ての “証拠” を口の手を汚さず消し去る…

その為、貴女達を “敵” にする事は出来無い訳です

そつ言つて微笑む “少女” だが、その思慮の深さには感嘆するしかない。

見れば、苟或も朱靈も田を丸くしている。

「だから、正面から堂々と “乗り込み” ます  
きっと、彼は驚きますよ」

“少女” は無邪気な笑う。

確かに許攸からしてみれば予想外以外の何物でも無い状況だらつ。

それに “戻る” や “帰る” とは言わず “乗り込む” と “少女” は言った。

つまり、私達に“決着”を着けろと言つ事だらう。

「…面白そうじゃない

彼奴がどんな顔をするのか楽しみだわ」

「全くだな

確りと押ませてもらおつ

我等の命、預けたぞ」

苟或と朱靈が笑う。

私も一緒に笑う。

“少女”も微笑んだ。

整然と行軍していた。

だが、急に前方が騒がしくなつた。

「何か有りましたの？」

袁紹が顔を顰める。

進行の邪魔をされたからか不機嫌になつてゐる。

「今、伝令を出しました…直ぐに判るかと…」

セツニヒト一礼する。

こんな所で無意味に機嫌を損ねられては困る。

「し、失礼しますっ！」

息を切らした兵士が走って来て姿勢を正す。

「何が有った？」

「はっ…、朱靈將軍達が今御戻りになられました！」

「…っ…？」

思わず声を出しあうになるのをどうにか堪える。

「あ、ひ、やうですの？」

袁紹はお氣楽な声で兵士に聞き返す。

騒がしさの理由が判つてか表情に不機嫌では無い。

「袁紹様、朱靈以外三名、只今、戻りました」

いつの間にか朱靈達が兵が開けた道を通りて目の前に遭つて来ていた。

（ そんな、馬鹿な… ）

返り血や土埃などの汚れは目立つが…  
外傷は見当たらない。

あの状況を、たつた三人で覆された。  
現実がそれを物語る。

袁紹に背を向けたまま俯き苦虫を噛み潰す。

「 戻つたと言う事は…

今回の賊の討伐は終わつた訳ですの?」

袁紹が不満を露にする。

だが、今はどうでも良い。

「その事に関しての報告を致したいのですが…長くなる為、先に陣の構築をして宜しいか？」

「そうなんですか？  
なら、仕方有りませんわね  
貴女に任せますわ」

「はつ…伝令つ！」

行軍中止、急ぎ陣の構築に取り掛かれつ！」

『はつ…』

朱靈が言つと伝令の兵達が軍列の前後へと走る。

不意に朱靈と目が合ひ。

朱靈は不適に笑う。

“全てを知つているぞ”と言わんばかりに。

見れば苟或も、頬良さえも穢い存在を見る様な侮蔑を浮かべている。

（…不味い、不味過ぎる

このままでは今迄の苦労が水の泡だつ…）

焦る。

どうしようもなく焦る。

（何か  
何か無いのかつ！？）

思考は冷静さを失う。

彼女達が此処に居る時点で計画は失敗したも同然。  
彼女達の口封じは無理だ。

苟或を相手になら取り引き出来る“材料”は有る。

だが、朱靈と顔良には何も“材料”が無い。

部隊の全滅も“謀叛”だと言わればそれまで。  
追及すれば墓穴を掘る。

（…此処までなのか　）

そう思つた時だった。

その事に気付いたのは。

つこつとい嬉しさから口元に笑みが浮かんだ。

平野の中には不釣り合いな巨大な天幕が立っていた。

「さて、朱靈さん  
報告して下さる?」

袁紹は玉座に座り正面にて傳ぐ夕景を見る。

「はつ…

先ずは我が方の兵は我々を除いて全滅しました」

「 なつ…?

どつこつ事ですのつ…!?

袁紹は玉座を立ち上がり、怒りを露にする。

「袁紹様、まだ途中です…  
落ち着いて下せ…」

「そ、そつでしたわね…」

脇に控える許攸が宥めると袁紹は平静を装つて玉座に座り直す。

「…全滅、と言いましたが実は兵の半数が“賊”側の仕込みだった

らしく…

内から“謀叛”を起こされ瓦解し敗れました

夕羽は悔しそうに俯く。  
まあ、半分は演技だが。

「それでは貴女達は賊から逃げ戻った訳ですか？」

「いえ、“賊”に捕まりはしましたが機を見て脱出し殲滅に成功しました」

“任務は達成しました”と頭を下げる夕羽。

チラツ…と許攸を見れば、先程とは違い余裕を何処か余裕を感じさせる。

「袁紹様…

此度の件は致し方無い事と思います…

朱靈將軍達には非は無く、有るとすれば人事の担当の田豊殿の方かと…

ただ、亡くなつた兵の家族には恩赦を…  
袁紹様の深い慈悲を庶人に示す時かと…

「成る程…判りましたわ

許攸さん、其方らは貴男に任せますわ」

「御意に……」

態とらしい位の恭しゃ。  
見ているだけで腹が立つ。

（田豊の奴も災難だな……）

特に関係は無いが……  
とじぱつちりを受けた事には僅かだが同情する。

「それで、朱靈さん?  
“私の”宝剣は何処に?」

袁紹がそう言つた瞬間に、許攸の口角が僅かに歪んだのを見逃さなかつた。

（　掛かつたか……）

夕羽は内心で北豊笑む。

勿論、対外的には申し訳が無さそうな雰囲気を装つ。

「その事ですが…」

「まさかとは思いますが、『無くしました』なんて事言いませんわよね?」

袁紹の顔が険しくなる。

脇に控える許攸は涼し気に静観している。

(何時まで静観出来るか、見せて貰うぞ?  
さて、真打ちの登場だ!)

夕羽はゆっくり立ち上がり一歩、左側へ避ける。

「いえ、有ります が、  
その前に袁紹様に紹介する者が居ります」

「私に?」

袁紹が首を傾げたのを見て夕羽達の後ろに控えていた黒い外套を着た者が前へと進み出た。

顔を隠していた頭套を外し姿を晒す。

後は背の中程、前は鼻まで届く長い濃茶色の髪。  
それは変装した“少女”。

「御初に御目に掛かります袁紹様：  
姓を為<sup>い</sup>、名を口字を人<sup>じん</sup>夕<sup>ゆう</sup>」

商いをしながら大陸各地を旅している者<sup>です</sup>」

そう言つて“少女”は頭を下げて挨拶する。

（肝が座つてゐるわね……）

桂花は“少女”の大胆さに驚くしかなかつた。

為、口、人、夕

その四字を並び替えると……

人、為、夕、口。

つまり、“偽名”だと直<sup>す</sup>ぐ名乗つてゐる訳だ。

勿論、あの袁紹が相手なら氣付かれる事は無い。

許攸にしても同じ。

“少女”の名乗りが自然で疑う事さえしていない。

「…朱靈さん、これは一体どういった事ですか？」

「はつ…

先ず一つ曰ですが“賊”を討伐した後、力尽き倒れた我等を助けて頂きました

「あら、そうでしたのか？」

良かつたですわね」

「…

袁紹の言葉に許攸の表情が変わった。

びつやら氣付いた様だ。

「一つ曰、連中は謹慎中の荀彧を拐い、奴隸商人へと売り飛ばしています」

「…………誰ですの？」

袁紹の言葉を聞いて本氣で殴り殺したくなる。

「…此方の荀彧の妹です」

「あら、そうですの？」

それは可哀想な事ですわね

それで、宝剣は？」

もう我慢出来そうに無い。

「…お、抑えて下せ…」

右隣に並んだ顔良が右手を握つてくれなければ袁紹に殴り掛かっていた。

朱靈もチラッ…と振り向き田で“堪えろ”と言ひ。

「…三つ田、連中は宝剣も売り払つています」

「なつ…？」

どういう事ですのつ…？

貴女、さつき

「袁紹様、お静かに  
まだ、続きが御座います」

「つ…？」

わ、判りましたわ

朱靈の殺気に当たられて、袁紹は大人しくなる。

まあ、馬鹿だから殺氣より氣迫に圧されたのだらう。

「そして、最後ですが…  
此方に居る人夕殿こそが、売り払われた荀藻と宝剣の“所有者”になります」

そつ言つと朱靈は一礼し、“少女”の後ろへ下がる。

これで舞台は整つた。

後は“少女”を信じ全てを託すだけ。

私達は“少女”の紡ぎ出す寸劇の観客となつた。

袁紹は目の前の“少女”を訝しむ様に見詰める。

「……貴女…為口さん、と仰有いましたか？  
貴女が私の宝剣を？」

そう問われると“少女”は外套を退け、右の腰に佩く一本の剣を見せる。

藍色の地に金で装飾された白い柄の剣。

“袁家の宝剣”である。

「 それですわつー。」

袁紹は立ち上がりつて宝剣を指差しながら叫ぶ。

“ 少女 ” は氣にもせずに、再び外套を戻す。

「 ちよつと、貴女？  
何をしているのですか？  
早く私に返しな 」

「 袁紹様、 “ これ ” は今は “ 私の物 ” です 」

袁紹の巫山戯た言葉を遮り “ 少女 ” は言つ。

「 な、何を 」

「 “ これ ” は “ 私が ” 買い取つた物です  
貴女の物では有りません 」

はつせりと “ 少女 ” は誰が所有者かを告げる。

幾ら馬鹿の袁紹でもこれは判らない訳がない。  
納得するかは別として。

だが、予想より早く袁紹は“少女”の言葉を理解し、笑みを浮かべた。

「成る程、判りましたわ

なら、私が貴女から買えれば問題有りませんわね？」

得意氣な笑顔。

実に滑稽だ。

自ら虎口に飛び込んだとも知らないのだから。

「ええ、構いませんよ

それでは、袁家の総資産の八割で御売りしましょう

「 は？」

「おや？」

聞こえませんでしかたか？

袁家の総資産の八割でなら御売りすると言いました

“少女”は抑揚の無い声で淡々と言葉を紡ぐ。

「 なつ

誰が剣一本にそんな大金を出しますのつーーー？」

袁紹は気付いていない。

既に自分の返答如何で剣の価値が変わる事に。

「私は構いませんよ？」

どうしても、売らなければならぬ訳では有りませんからね」

此処で“少女”は初めて、言葉に抑揚を付ける。

「それなら私に」

「“袁家の宝剣”は随分と価値が低いのですね」

「……」

漸く気付いた様だ。

本当、馬鹿を相手にすると苛々して仕方が無い。

「“私は”売らなくても、構いません  
“買い手”は、まだ他にも居ますしね」

「……」

此處で言ひ“ 買い手 ” とは袁家筋の者であり  
中でも派閥争いをしている“ 袁術 ” は絶好の相手。

“ 袁家の宝剣 ” が渡れば、間違い無く袁紹は当主から追われる事に  
なる。

当然、袁紹は避けたい。

故に今、袁紹に出来る事は唯一つだけ。

“ 買い取る ” 以外の選択肢は存在しなかつた。

袁紹は黙つたままだ。

まあ、簡単に答えられない事だから当然だろ？。

黙つているのは許攸も同じ。

判つてゐるのだろう。

一つ目、臣下を助けた事に対する借りが出来た。

二つ目、施政者的人身売買という汚名が出来た。

三つ目、袁家の宝剣という “ 切り札 ” の所有権。  
この三つが袁紹を縛る。

仮に袁紹自身が理解出来ずとも許攸は理解している。

下手な言い掛かりは名聲を貶めるだけ。

許攸も自身の保身を第一に考えるのなら、此方の出す条件に沈黙するか賛成するしかないのだから。

許攸に打つ手は無い。

袁紹の盤面は詰んだ。

後は“少女”が要求内容を操作するだけ。

「とは言え、私も商人  
此方としても、袁紹様との“伝手”が出来るのならば後の利が有る  
でしょ？」

そつ言つて軟化する姿勢を見せて誘つ。

「…袁紹様、為口殿の様な商人なれば懇意にして損は無いかと…」

「そ、そうですね

貴男の言つ通りですわ」

許攸は逃さず話に乗る。

袁紹も結局は流された。

“少女”は口元に微笑みを浮かべているだろ？。

「 ですが、私が此方で“値下げ”をしてしまつと“袁家の宝剣”の価値をも落としてしまいます」

“少女”は言葉を切る。

一旦、間を溜める事により相手を心理的に追い込み、優位に立つ。

「其処で こりうのは如何でしよう

私の後ろの三人の身柄と、従軍している兵士の一部…

それから現在、手元に有る武具・兵糧・軍馬・荷車を三分の一…

これ等と“袁家の宝剣”を“交換”というのは「

“交換” 此処に大きな意味が有る。

売買では価値が変わるが、この場合は違つ。

何も市場価値が“等価”で有る必要は無い。

飽く迄も“両者”の間で、取り引きが成立すれば良いだけなのだから。

何より

袁紹は兎も角として許攸にとつては朗報だらう。

此処で私達を引き渡せば、邪魔者を排除出来る。

下手に突つ突つかなれば、己の立場が危ぶまれる事は起きないのだから。

(… 一体、何者なのよ?)

私達三人だけでは不可能な策では有るが、誰か一人が加われば思い付くという物ではない。

少なくとも

今の私には思い付かない。

だから、思う。

だから、望む。

この“少女”と共に行き、多くを学び、成長したい。

この“少女”を

我が“主”を支える為に。

夕羽は感嘆していた。

余りにも見事な手腕に。

既に自分達の身の安全と、潔白は保証された。

後は成り行きを見守る。

「為口殿、兵数は如何程を御望みですか？」

許攸は袁紹を放つて置いて連れていく兵数を訊く。

まあ、袁紹に交渉や調整は不可能だから仕方無い。

（従軍は一万程  
荷を考えれば二千位か？）

夕羽は話を聞きながら数を予想してみる。

「千……いえ、七百です」

「随分と少ないですが  
宜しいのですか？」

許攸が聞き返す。

夕羽ですら思わず聞き返したくなつた。

「私は商人ですからね

人数が大きく成り過ぎれば動きが鈍くなります

それに“元”兵士であれば人足と護衛を兼ねられて、雇用費が浮きますので

言われて見れば納得。

だが、それなら千人の方がより安全に思つ。

チラッと許攸の顔を窺う。

思案顔だが、その表情には“少女”に対する警戒心は見て取れない。

(……ああ、成る程な)

敢えて数を刻んで見せて、“讓歩”したと思わせる。

そうして“暗黙の了解”を“勝手に”抱かせる。

“不可侵なればの不可侵”

許攸の考えを言葉にすればこんな所だろう。

実際には、そんな約束事は存在しないので、此方には誓約が無い。

許攸自身が己を縛っているだけに過ぎないが……

その“楔”は私達の安全を今だけでなく、当面の間は保証してくれるだろう。

（良く考えつくる物だな…）

その小さな背中が誰よりも大きく頼もしく見える。

「袁紹様、宜しいかと…」

そんな事を考えている間に許攸は話を纏めに掛かる。

“少女”は兎も角としても袁紹の気が変わつては面倒だからだらう。

「判りましたわ

為口せん、これで取り引き成立ですわね?」

袁紹は“少女”を見て確認する。

「はい、確かに

私も良い商いをさせて頂き感謝致します」

そう言つて恭しげ一礼する事により、袁紹の血尊心を満足せらる事も忘れない。

「ああ、そうでした  
出来れば“彼女”に兵士の選抜を任せたいのですが、宜しいでしょ  
うか？」

そつと左手を荀或へと向ける。

「ええ、構いませんわよ」

「あつがどつじれこまわ」

袁紹と“少女”が微笑む。

「つして、取り引きは無事終了した。

私達は“少女”と共に何の負い田も無く、堂々と歩きながら袁紹の  
下を去了た。

“少女”が村を立つてから5日日の事だった。

金色の鎧を着た兵士らしき人達が列を成して來た。  
それには見覚えが有つた。

いや、忘れられる訳が無いその姿は袁紹軍の兵装。

私は絶望を覚えた。

これからどうすべきかと、窓から様子を窺つていると見知った人が居た。

「…朱靈…將軍?…」

姉と共に賊の討伐隊として遠征した筈。

その彼女が“無事”此処に居るという事は

私は外へと飛び出す。

村の入り口へと向かって、手入れされていない山道を一心不乱に駆け下りる。

少しでも早く  
一瞬でも速く

その思いから茂みを抜け、並ぶ木々の間を潜り抜け、道無き道を直走る。

其処に居る筈の村人達も、金色の鎧を着た兵士達も、建物や生活道具や風景すら視界の中から消え去る。

双眸に映るのは唯一人。

肩よりも少し長い薄茶色に近い茶金の髪が振り向いた拍子に小さく揺れる。

私と同じ碧緑の双眸が私を見付け大きく見開かれる。

「 お姉ちゃんっ！……！」

私は勢いのままその胸へと飛び込んだ。

「 ちよっ

きやあああああーっ！…？..？」

姉が悲鳴を上げた気がしたけれど気にしない。

漸く 漸く、感じる事が出来た温もり。

もう一度と感じられないと一度は覚悟した。

それが、今、此処に在る。

ぎゅーっ、と抱き付いて、全身で感じ取る。

“ 生きている ”  
その喜びを。

「痛たたたた…  
ちょっと、茉莉花?  
いきなり飛び付いたりして危ないでしょ?」

姉が何か言つている。

「はっはっはっ!

「これ位に元気ならば荀躉は問題無いな」

朱靈が何か言つている。

「あ、あの、荀或さん…  
大丈夫ですか?」

誰かが何か言つている。

でも、そんなの関係無い。

今は 今だけは。

ただただ

姉の存在を感じていたい。

「お姉ちゃん！？」

お姉ちゃん…、お姉ちゃん…お姉ちゃん…おねえ、ちやん…お姉ちゃん…

姉ちゃん…つ…つ…つ…う…あ…つ…」

今まで堪えていた不安や寂しさ、「喪しみやらが壇を切った様に溢れる。

それでも嬉しが、喜びがそれ以上に溢れる。

ぐずぐずになつた心から溢れ出す感情は涙を彩り、キラキラと輝く。

私は泣いている。  
でも、私は笑っている。

この大切な温もりと共に、これからも在り続けられる“未来”があるから。

村に着き、兵士達に指示を出していくときなり妹に飛び付かれ、そのまま押し倒された。  
お尻と背中を軽く打つたが抱き止めた腕は放さないでしっかりと抱き締めた。

言葉にはせずとも、互いに生きて再会出来る可能性が低い事は覚悟していた。

だから、奇跡の様だつた。

妹に釣られ、思わず自分も泣きそうになつたが…  
“人目”を気にする程度に冷静な自分に内心で苦笑。

尤も、“人目”と言つても朱靈達や兵や村人ではなく“少女”の前  
だつたからに他ならないのだが。

既に日は落ち、辺りは夜の帳に包まれている。

今は茉莉花が療養する為に使つていた見張り小屋にて休んでいた。

「…つたぐ、この娘つてばはしゃぎ過ぎなのよ…」

台詞とは裏腹に、穢やかな眼差しで茉莉花を見詰め、自分の膝を枕  
に疲れて眠るその頭を撫でる。

思いつ切り泣いて  
思いつ切り笑つて

まるで子供の様に無邪気に“少女”との出逢いを興奮気味に喋り、  
三人から話を聞いては一喜一憂した。

朱靈と頬良が微笑まし気に此方を見ているのが微妙に恥ずかしい。

「…それで？」

“貴女達は”これから先はどうするつもりなの？」

氣を逸らす意味も兼ねて、そう訊ねると一人は揃って笑顔を見せる。

訊かずとも“私達”と同じ答えだろうが。

「決まつてるだろ」

「一つしかないですよ」

その言葉で十分。

私達の歩む先は同じだ。

それでも、確かめなければならぬ事もある。

「先に言つとくけど…  
簡単じゃないわよ?  
半分以上賭けなんだから

と言つてはみるが、内心は不思議と落ち着いていた。

簡単ではない　　のだが、多分、成否の鍵は唯一つ。

それさえ読み切れば勝利は間違いない。  
読み切る自信は有る。

「選択肢は多々あるが…

全てを賭すに値する選択は唯一つだ」

「このままで終わる訳にはいきませんしね」

二人はそう答える。

負けず嫌いというか…

機を逃がさないというのは武人としての本能の様な物なのかも知れない。

「じゃあ、決まりね」

「ああ、頼むぞ軍師殿」

「信じてますよ」

私達は顔を見合せ笑う。

これ程迄に心躍る“戦”は初めてだった。

夜の明けぬ薄暗い空。

私達は村の外

兵士達が昨夜過ごした陣が有つた跡地に居る。

そして

“少女”を前に私達四人は横一列に並び…  
七百の兵士達が後ろに整列している。

兵士達の格好はバラバラ。  
だが、一人として“鎧”を身に付けた者は居ない。  
袁家の 金色の鎧を。

それは“訣別”の現れ。

「御早う御座います」

桂花は“少女”を見詰め、笑顔で挨拶する。  
勿論、若干の皮肉の意味も含まれている。

多分“少女”は“一人”で村を出るだろうと予想し、見事に的中した。

半分驚き、半分呆れを顔に浮かべる“少女”は小さく溜め息を吐いた。

「……何となく判りますが  
一応、訊きますね  
どうこうつまりですか？」

“少女”は私達に袁紹から得た全てを委ねた。  
七百の兵達の扱いも含め。

何處かに仕面するのも由、静かに平穏に暮らすも由、全ては自分達  
で決める様に“少女”は言った。

だから、私達は決めた。

運命とは実に気紛れだ。

時に非情な迄に全てを奪いに廻くすのこ  
時に過剰な迄に全てを『え齎す事がある。

逢遇と別離は常に有る。

だが、その中のどれだけに価値を見い出せるか。  
そして、偶然に秘められた必然に気付き掴めるか。

今が正にその時。

「御覧の通りです」

桂花の言葉に応える様に、ザツ…と一糸乱れぬ動きで兵士達が跪き頭を垂れる。

“少女”の瞳が真っ直ぐに私達の“志”を見る。

一度は諦めた“命”

「姓名は荀或、字は文若  
真名は桂花…」

一度は失った“忠”

「姓名は朱靈、字は文博  
真名は夕羽…」

一度は絶えた“道”

「姓名は顏良、字は季柔  
真名は斗詩…」

一度は離した“掌”

「姓名は荀纂、字は友若  
真名は茉莉花…」

けれど、私達は“此処”に生きて在る。

ならば

今一度、賭してみよ。

『我が歩みは此処より道を天へと至らす為に  
この身、この心、この魂、この命尽きるその一瞬まで我が全てを捧  
げます』

我が　主が為に。

私達は“少女”の前に跪き頭を垂れ、臣従を誓つ。

“遇”は“必”へと至り、“縁”は“忠”と交わりて“道”を生む。

此処より始まる“史”へと歩み往く“道”を。

## 準章 参 謀劇崩影（後書き）

### キャラ紹介 其の壱

姓名字：朱 靈 文博  
真名：夕羽

武器：蛇矛・紅芭蕉

（べにばじょ）

年齢：26歳

容姿：

白茶色の瞳。

銀朱の髪。

前髪はそのままで後ろだけ御団子にした髪型。

鬢髪は太股に届く。

身長・スタイルは愛紗並。

性格：

基本的には面倒見が良く、姐御肌です。

酒好き一ズみみたいに仕事をサボったりはしません。

ただ、下戸で酔うと性格はぐるに豹変します。

備考：

袁家では突出した武を誇る猛将として知られた。  
曹家でも重責を担つ。

姓名字：荀 蕉 友若

真名：茉莉花

武器：双円月輪・芙隼

（ふしゅん）

年齢：17歳

容姿：

碧緑の瞳。

黄土色に近い金茶の髪。  
癖の無いストレート。

腰元に届く長さ。

身長は桂花と風の中間位。

実は胸は姉より大きい。

姉を気遣いサラシを巻き 誤魔化している。

性格：

兎に角、お姉ちゃん娘。

“姉は私の嫁”的な程だが霍琅には譲歩する。  
基本的には姉そつくり。

備考：

袁家では一文官。

曹家では軍師見習いとして経験を積んでいく予定。

姓名字：荀 或 文若

真名：桂花

武器：小弓・快燕

（かいえん）

年齢：20歳

容姿：原作を参照。

性格：

原作より稍軟化（？）。

妹や仲間にに対する気遣いは毒舌とは裏腹に人一倍。

備考：

本作では弓を扱う様に。  
“華琳&霍琅”命です。

姓名字：顔 良 季柔

真名：斗詩

武器：斬馬刀・醉天窮

（すいてんぐう）

年齢：21歳

容姿：原作を参照。

性格：

原作よりは熱血寄り。

基本的には母姉体质なので世話好きです。

備考：

袁家では大槌・金光鉄槌を曹家では斬馬刀を使用。  
また知能もレベルup。  
字、付きました（笑）。

## 一章一話 壱 広暉天遣

司隸州河南尹

洛陽より東北東に位置し、太行山脈を西に望む卷県。

荒れ地が多いが山脈沿いは森林が広がっている。  
ただ、切り立つた崖も多く虎や熊も少なくない。

そんな森の中に

金色の髪が揺れている。

「読みが甘かつたようね」

溜め息と共に呟く。

その青玉の双眸に映るのは“自分達”に忠誠を誓った四姉妹の内の  
一人の姿。

「……申し訳有りません」

青い髪の少女の橙の瞳には悔しさが滲む。

彼女が番えた鎌は自分へと向けられていた。

「……や……の……しゅ……ん……」

美しい黒髪は地面に広がり弱々しい声で少女は咳く。

右目は血で塞がり…

左目は矢で光を失つた。

紅の双眸は自分と妹を見る事は叶わないだろつ。

身体を染める様に流れ出す血量は素人目にも危険。

「……春蘭姉様……」

肩に掛かる程度の橙の髪を後ろへ上げて髪帶で止めた髪型の少女は中紅色の瞳を涙で潤ませる。

「……秋蘭姉様……」

背の中程の長さの橙の髪を右横で纏め、前髪は左側を下ろした髪型の少女もまた黄中色の瞳に涙を湛える。

しかし、一人の少女は何も出来無い己の無力さに唇を噛み締め、俯く。

何の為に強く成りたかったのかと胸中で叫ぶ。

それでも、少女達に出来る事は無かった。

「…早くしない秋蘭

貴女達を失つてしまつては会わせる顔が無いわ

“誰に”なんて言わずとも私達の間では理解出来る。

秋蘭が奥歯を噛む。

そして、覚悟を決めた。

「華琳様 御覚悟つ！」

秋蘭が右手を矢から離すと鎌が風を切る。

見れば、秋蘭は目を閉じて顔を背けていた。

（駄目じゃない秋蘭…

戦場に於いて一瞬でも目を逸らす事は命取りよ？  
そう、教わったでしょ？）

死の迫る状況下で考える事ではないのは判つてゐる。

恐怖が無い訳が無い。

田を瞑つてしまえば少しほ楽になれるだらう。

けれど、やうはしない。

最後の一瞬まで

私は全てを見詰める。

全てから田を逸らさない。

それが、私の覚悟。

喻え、此処で私自身の命が潰えるとしても…

それも一つの結末。

勿論、諦めはしない。

しかし、逃げもしない。

僅かでも“隙”が生じたら私は“勝機”を見い出す。

それを掴む為には、決して目を逸らしてはならない。

緩慢にさえ思える不思議な感覚の中で、迫り来る矢を見詰め続けた。

「邪教徒、ですか？」

洛陽は南宮の一室に華琳は呼び出されていた。

目の前には飴色の長い髪を首の後ろ側で一括りにした鈍色の瞳の女性。

「ああ、そういうじ

聞き返してはみたが返事は曖昧な物。

まあ、調査も兼ねてという意味での話なのだろうが…  
ただ“らしい”という点が引っ掛かる。

「本当なら私自身が出向き真偽を確かめたいんだが…  
この有り様でな」

そう言つて執務用机の上に積まれた書簡の山を見て、苦笑を浮かべた。

同性から見ても凜々しいと思つ美貌を破顔させると、子供っぽい雰囲気になる。

その姿を知る者は少なく、信頼を勝ち得た者だけ。

心を許されていいると思つと少しの優越感を覚える。

「出来るなら手伝いたい所ですが、内容的に無理だと思いますので…  
頑張つてね、棗姉さん」

クスッ…と華琳は微笑み、彼女を“応援”する。

姓名は**皇甫嵩**、字は**義真**。  
真名は**棗**。

左將軍の地位に有る女性で「**き母**・芹華の愛弟子。  
洛陽に来てから実姉同然の付き合い」。

武勇で名を知られがちだが文官としても優秀。  
秋蘭や玲奈と同様に文武を兼ね備えた希少な才媛。

可能なら、直ぐにでも引き抜きたい人材だ。

「本当、芹華様に似てきて厳しいわね…  
年寄りは敬うものよ？」

「誰が“年寄り”よ？」

それに

立つている者は親でも使えが、お母様の教えなの」

机に突つ伏し、上目遣いに見てきた棗を、小さく息を吐き笑顔で一蹴。

“黙つて、働きなさい”と暗に命む。

棗は大きく溜め息を吐くと一度顔を伏せた。

暫し、動きを止めてから、ゆっくりと身体を起こす。

抜けた気合いを入れ直した様で、表情には凜々しさが戻っていた。

「愚痴は彼奴に吐くか…」

矛先を向けられるであらう人に直ぐに思い至り胸中で“御愁傷様”と呟く。

「今回の任務は調査が主体になるからな…

小規模な編成で一百以下の兵数が妥当な所だろう

兵の方は県令が用意する様手筈を整えてある

詳しい事は

畢嵐に聞いてくれ

その名に、思わず顔を顰めそうになるが堪える。

「…確と、承りました」

そう言つて華琳は一礼し、退室しようと背を向ける。

「華琳様、お気を付けて」

何かを危惧するかの様に、棗が静かに呟く。

華琳は何も答えず退室し、次の場所へと向かった。

「よく来てくれたな」

入室した華琳に笑顔を見せ“歓迎”の雰囲気を漂わす赤茶色の短髪の男。

姓名は畢嵐。  
ひつらん

四十過ぎにしては顔は若く見える方だろう。  
華琳的には“醜男”だが。

通称“十常侍”と呼ばれる十二人の中常侍の一人。

宦官では有るが…

裏では奴隸商から女を買い弄んでいるとの噂が有る。

去勢したからと言つても、性欲は存在する。

根も葉も無い噂と言つては些か無理が有るだろつ。

「いえ、仕事ですの？」

そう答えて頭を下げる。

但し “仕事でなければ来たくもない” という棘を含ませて。

人身売買の件も有るが…

それ以上に畢嵐に対しては嫌悪感が強い。

祖父や母が要職に有つた事から名と悪評は聞いていたけれど実際に会つて見て、評価は最低の肩に認定。

また母が亡くなつて以来、自分を排除したがつてはいる事を知つている。

十常侍の中で唯一、曹家の危険性に気付いた為だ。

(でも、簡単に消せる程、私は易くないわよ)

畢嵐の仕掛けた罠や謀略は悉く看破した。

最近は静かなものだ。  
油断はしていないけれど。

「此度の任務は邪教集団の存在の有無の調査だ  
確認されれば対処して貰う事にもなるが…  
まあ、庶民共の間で広がる噂に過ぎんがな」

そう言つて、面倒臭そうに竹簡を差し出す畢嵐。

受け取り、内容を確認して見れば県令からの報告書。

河南尹は皇帝直轄の領地と有つて“下”も対応の為に“上”に伺い  
を立てる。

現場判断は滅多に無い。

「……この噂とは？」

「何でも、白き衣を纏つた天よりの使者が民を救いに現れた、とか  
何とか…」

「天の使い、ですか…」

何が“天の使い”か。  
と太話もいい所だ。

だが、噂という物が厄介な事に変わりはない。

噂の元になつた“何か”が有るにしろ…

“何者か”が意図的に噂を流したにしろ…

乱世に有つて、民の弱つた心を揺むには悪くない。

民衆を煽り、一揆を起こし大陸に戦禍を撒き散らす。

直ぐ脳裏に浮かんだ筋書きとしては妥当か。

御飾りの皇帝…

専横する宦官や外戚…

跋扈する匪賊…

そして

煽動された民衆…

名と皮だけの国は内側から崩壊する。

「…状況は判りました  
直ぐに向かいます」

華琳は一礼し退室。

予想される事態を想定し、対応策と処理案を練りつつ帰路に着いた。

調査を始めて三日が経過。

「華琳様、まだ件の討伐に出ないのでですか？」

「そうですよ～

早く討伐しましょ～よ～」

春蘭と理奈が退屈な調査に飽き不満そうに訴える。

「…姉者、討伐は“確定”した場合に、だ

「姉さんも大人しくして」

秋蘭と玲奈が溜め息を吐きながら一人を窘める。

しかし、秋蘭にしてみても一人の気持ちが判らなくもなかつた。

洛陽を離れ、巻県に入つて四日が経つた。

巻県の街に着いた日

昼餉を食べに入った店内で早くも噂を耳にした。

噂は民衆の間にかなり浸透している様子だった。

“これならば早いか…”と思つても不思議ではない。

だが、事は簡単には進まず暗礁に乗り上げる。

噂 자체は比較的簡単に把握する事が出来た。

噂は広まる過程で誇張され現実離れした内容になつた物も少なくない。

しかし、そんな噂も収集し検分すれば“元々の形”が見えてくる。

そうして、明らかになつた噂は次の通り

世が乱れし時

天より白衣纏いし者

光と共に舞い降りん

その者、天の遣いなり  
乱世に立ちて臨まん

と、云う物だ。

読み書きの出来無い民でも理解出来るだらう。

それに“噂”というのは、基本的に人伝だ。

内容は理解出来ていても、一言一句を正確に覚えられ伝えられる訳ではない。

才の有る者ならば兎も角、万人が出来る筈もない。

“変化”は起きるべくして起こっている。

それが“噂”的必然性。

市井に流言を流し、風評を操作する事は珍しくない。

だが、その為には幾度かの“挺入れ”が必須。  
施行者の“望む形”に誘導しなければならない。

ならば 今日はどうか。

はつきりと言つてしまえば“操作”的痕跡はない。

それは、この噂自体が特に深い意味を持つてはいない事を物語つて  
いる。

そうなると、今回の一件は“餌”的可能性が高い。

(華琳様を誘い出す、か)

だが、気になるのは県令が伺いを立てて来た事。

調べた限りでは…

県令と畢嵐の間に繋がりは見えなかつた。

安心するにはまだ早いが、それよりも尊自体が大きく成り過ぎている。

現時点では其方らを抑える事が重要だ。

「……華琳様？」

ふと、気付き先程から黙り一言も発していない華琳に声を掛けた。

ある竹簡で手が止まる。

両手で持つた竹簡を注視し綴られた文字を読む。

秋蘭達と収集した尊の件を確認していた時だった。

世が乱れし時

天より白き衣纏いし者  
光と共に舞い降りん

その者、天の遣いなり  
乱世に立ちて臨まん

天は乱れ、地は荒れて  
墮つ天には凶星が瞬く  
されど、宿星は在りて  
地より天へと昇り至る  
星は廻り、巡りて対す  
天も、地も、人も…  
全ては巴となり流るる  
ただ、理は不变であり  
星もまた、理に抗えず  
然りとて、星は輝かん  
その輝き、天地を染め  
新たな夜明けを齎さん

前文は検分により浮かんだ噂の元々の形と合致。  
此処だけを見れば派生した物の一つと思つたとしても不思議はない。

問題は中文以降。  
其処に綴られている文句は民の創作とは思えない。

明らかに、何等かの意図が秘められた文脈。

(まるで“予言”ね…)

此れを一読して理解出来る者が果たして何人居るか。

“尊”と断じ捨て置くにはあまりにも危険。  
しかし、確認は出来無い。

「……華琳様？」

「 」

秋蘭に声を掛けられ自分が周囲が見えくなる程に集中していた事に  
気付く。

「何か、気になる事が?」

「いいえ、何でも無いわ  
高が尊と言えど…  
内容が此処まで来ると滑稽だと思つただけよ

訊ねた秋蘭に平静を装い、呆れた様な笑顔で答えつつ件の竹簡を置  
む。

「Jたな根も葉も無い樽に縋る程に民心は弱つて居のだと思つて、  
ね…」

そつと話題を逸らす。

今はまだ、この竹簡の事は誰にも言えない。  
いや、知られてはならない気がする。  
理由は判らないが。

（…私らしくないわね…）

胸中で愚痴りながら思つ。

此処に有る竹簡は樽を纏め上げた報告書。

それらを書いたのは自分が連れてきた直属の私兵。

見馴れない筆跡が有れば、当然直ぐに気付く。

しかし、事前に田を通した筈の秋蘭と玲奈はその事に気付いている様子がない。

つまり、この竹簡は後から紛れ込んだ 否。  
誰かが故意に紛れさせた可能性が極めて高い。

（…あの字、何処かで…）

そして何処かで同じ筆跡を見た様な気がする。

ただ、それが思い出せずに苛立つが…

今考えるべき事ではないと思考を切り替えた。

巻県に来て一週間が経過。

今私は華琳様、秋蘭姉様と県令に会いに来ている。

春蘭姉様と姉さんは運良く　相手は不運だけど　入った盗賊の討伐に出た。

連れていった兵は二百。

今回の件で県令が用意し、指揮権を委ねられた兵達。

“今後”動く事を考えれば兵の実力を見る良い機会と華琳様が判断された。

二人の憂さ晴らしも兼ねて任せた節も有るけど。

連れてきた全ての私兵　三十人だが　は華琳様の指示で街に散つていた。

旅人や行商人に擬装させ、噂を打ち消す為の挺入れを県内の各地で行っている。

“天の遣い”という存在が何処にも居ないのなら噂は次第に終息していく。

もし居るとしたら何かしら反応が起きるだろつ。

煽動者が居るのなら民衆にその姿を見せるだろつし、華琳様への罷だとするなら次の動きを見せる。

そいつた狙いが有るし、何方らに転んでも無駄にはならない。

「此方へどうぞ」

侍女の声に我に返る。

目の前には装飾された扉。

しかし、開け放されており中には県令らしき男性。

歳の頃は二十代半ばから、三十代前半か。

短く刈り上げた後ろ髪とは逆に眉に掛かる位の前髪は赤茶色をしており、眼鏡の脇から見える瞳は濃緑色。

内装から見るに応接室だと思われるが、男性は竹簡が積まれた奥の机に向かって黙々と筆を走らせていたが気配を感じたのか顔を上げ此方へ振り向いた。

「おお、曹操殿！」

良く来て下さいました」

男性は机を離れると笑顔で出迎える。

「私は巻の県令を務めます李晏と申します」

男性 李晏は恭しく頭を下げて挨拶する。

同時に案内して来た侍女と入れ替わりで茶器を持った侍女がやって来る。

応接室で待つ間まで仕事をしていた事を除けば対応は悪くない。

「随分と忙しそうね？」

「お恥ずかしい限りです

私の仕事が遅い上に仕事は次々出来るものでして……」

華琳様の言葉に李晏は苦笑しながら頭を搔く。

初見での印象から言えば、良くも悪くも平凡。無能ではないが特筆すべき点も見当たらない。

「一応、名乗つて置くわね

朝廷の命により派遣された曹孟徳よ  
此方は夏侯妙才、韓義公」

私は華琳様に紹介されると秋蘭姉様に次ぎ会釈する。

「宜しくお願ひします」

李晏はそう言って華琳様を席へと促す。

私は秋蘭姉様と一緒に席の後ろに控えた。

華琳様は茶器を手に取つて一口飲む。

一見、無用心に見えるが、こんな場面で毒を盛る様な馬鹿は居ない。

それに万が一の時に備えて解毒薬も、私達四人が各々人数分を常備  
している。  
抜かりはない。

「！」の間の事は申し訳有りませんでした」

「あの様子では余裕が無いのも頷けるわ  
反省しているのなら一度と無い様に努めなさい」

頭を下げる李晏に華琳様は寛大な御言葉を掛けられ、お許しになられた。

この間の事とは…  
指揮権を借り受ける兵達と顔合わせの場に都合で同席出来なかつた事。

春蘭姉様や姉さんが居たら面倒な事になつた筈。  
居なくて良かった。

「それより噂の件に関して確認したいのだけど…

李晏、何故、高が噂如きで朝廷に対応の伺いを立てたのかしら?」

そう華琳様が御訊になると李晏の顔が真面目になる。

「…お気付きでしょ? が、 “あの噂” は危険です  
地方での事ならござ知らず司隸で起きては大問題…  
放置は出来ず、かと言つて下手な対応策は逆に民心を煽つてしまいま  
す  
然るべき形で鎮静する為にお伺い致しました」

正直、驚いた。

華琳様は態と“高が尊”と言つて事の認識具合を確認しようとされた。

地方役人にしては見るべき物が見えている。

チラツと秋蘭姉様を見れば表情には出さないが瞳には感心が窺える。

恐らくは華琳様も同様に。

「そう…なら話が早いわ  
噂の出所は不明だけど端を発した者が居るのは確實  
もし何等かの動きが有つた場合には此方で対処しても構わないわね  
?」

「…はい、御任せします」

李晏は僅かに考えて承諾。

逡巡するのは当然。

此処で“総指揮権”を渡す事は功績の放棄と同意。

幾ら地方役人と言えど　いや、だからこそ功を得る機会は重要になる。

もし仮に“自作自演”での功績作りなら此処で拒み、馬脚を現す所。それが無かつたという事は其方らの線は消える。

（となると…  
やはり、華琳様への罷…）

しかし、やうなつてへると益々腑に落ちない。

“罷”だとしても華琳様が簡単に誘いに乗ると思つてゐるのだろう  
か。

（……もしも、やうなう… これまでとは違つ相手…）

てつきり筆頭容疑者である畢嵐だと思つてゐた。

しかし、“新手”となると罷への対応策を一から練り直さないとな  
らない。

夜に秋蘭姉様と話しあつておひつと思つた。

その夜

秋蘭と玲奈は一時的に拠点として使用してゐる宿場の白塀に居た。

「…玲奈もやう思つたか」

「はい、現時点では可能性の域を出ませんが…  
万が一にも、と思います」

玲奈の言葉に秋蘭も頷く。

時を同じくして共に主君に仕えてきた。

それは同時に  
諸侯等は勿論、曹家に縁の豪族や貴族による策謀との戦いでも有つ  
た。

暗殺は特に多かつた。

毒や罠は勿論、刺客ですら珍しくもない程に。

それら全てから護り抜き、今に至るのは偏に幼き日の経験に学ぶ所  
が大きい。

備える事は決して無駄にはならない。

その事を常に念頭に置いて臨んできたのだから。

「しかし“新手”となると厄介だな…  
実態が掴めぬ以上憶測での対応策しか用意出来無い」

秋蘭の言葉に玲奈も頷く。

“想定外”程、厄介な事は有りはしない。

“想定”は“事がある”を前提とするのだから、敵を知る事は非常に重要。

しかし、それが出来無いと十分な備えは不可能。  
必ず“穴”が生じる。

「…取り敢えず、解毒薬は全員違う物を持とう

それと玲奈…

“秘薬”はお前が持て」

そう言つて、秋蘭は懷から桜色の小さな袋を取り出し玲奈に手渡した。

戦闘になつた場合を考え、秋蘭は自分は前に出る事になるだろうと予測した上で玲奈を華琳の護衛に付ける方針に決めた。

玲奈も秋蘭の考えを即座に汲み取る。

「…判りました

解毒薬は春蘭姉様が神経、秋蘭姉様が混合物…  
姉さんが植物、私が動物で良いですか？」

「ああ、問題無い」

秋蘭が頷くと玲奈は寝台の下から錠の掛かった木箱を取り出す。

次いで、常に首から下げている鍵を使って錠を開く。

開いた木箱の中には小瓶が幾つも並んでいた。

小瓶の中身は様々な薬。

解毒は勿論、腹痛や解熱に傷薬まで揃っている。

其処から一つの小瓶を手に取り中から丸薬を出して、水色の小袋へと移す。

秋蘭はそれと交換する形で赤い小袋を玲奈に渡す。

「…毎回思つが、これ等を使う様な事にならなければ良いのだがな」

「… そうですね」

毒は暗殺に限らず、戦場に於いても陰湿で厄介な物。

そして、使うのは決まって外道ばかり。

しかし“勝利”こそ全ての考えも間違いではない。  
賛同は出来無いが。

二人が揃つて溜め息を吐き窓から黒天を見上げると、静かに月が輝いていた。

李晏から借り受けた竹簡を広げて目を通していた。

「……関係性は無し、か」

最後の竹簡を読み終えると置んで積み上げた山の上に置いた。

ゆっくりと息を吐きながら椅子の背凭れに身体を預け目を閉じる。

頭の中に浮かぶのは情報を元にした様々な憶測。

それらを吟味していく。

先ずは

畢嵐の企てた陰謀の確率。

これは極めて低い。

性格的に遣り口は陰湿では有るが我慢が利かない。  
加えて自分に不利益になる様な策は用いない。

次に

反乱・一揆の可能性だが、これは微妙な所。

民心を掴む噂を流したのにそれを放置したままのが不可解。

煽動するなら既に顔を見せ存在を印象付けなければ、折角の噂も無

意味。

動きが無い所が判断し難くしている。

最後に

これまでと違う“新手”的可能性だが：現時点では一番濃厚。

しかし、どうにも敵の策が見えてこない。暗殺を仕掛けて来る様子も失脚を狙つての妨害工作も起きていない。慎重を期しているのか。

それとも別の狙いが有るのだろうか。

「…私に対する罠にしては“棘”が少ないわね…」

静かに瞼を開き咳く。

蠅燭の明かりに照らされた天井が赤く染まっている。

明かりは私の呼吸に合わせゆらゆらと揺らめく。

「……拙いわね」

右手で視界を塞ぐ。

主導権を握り切れない事に己の非力を感じる。

大切な家族を 忠臣達をむざむざ危険に晒す訳にはいかないのに。

「…………ねえ…

“貴男”ならどうする?」

同じ空の下、今も何処かに居る筈の半身に向け呟く。  
何れ程求めても返る言葉は無いと判つてはいても…  
ふとした瞬間に“弱音”が零れてしまつ。

勿論、一人以外の時は気を引き締めている。  
自分が揺らいでは四人にも伝染してしまつ。  
だから、決して“弱音”は誰にも、微塵も見せない。

「……………ばか…  
早く帰つてきなさいよ…」

遣り場の無い“寂しさ”を呴く事で吐き出す。

いや、誤魔化す。

自分自身を騙し、誤魔化さなければ堪えられない。

“想い”は寂漠とした心に雪の如く募り積もり…  
“冬”の様に凍てつかせ、埋もれさせる。

ただ“冬”は

“春”を待ち侘びる季節。

長く、辛く、厳しい程に、“蓄”は強く育まれ…

花開く“季”を夢見ながら健気に訪れに思いを馳す。

“貴男”といつ“春”に。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3439p/>

真・恋姫†無双 星巴伝

2011年5月6日03時45分発行